

東北遊日記と相俟つて、其の全壁に精力を費した好對なのは、明年大和の節齋塾で作した五郎義援の顛末なる「東征日記」である。後者は右と別趣、關聯の日記でもあり、又江幡の人物傳で、恰も藤田東湖の著はせる下斗米將眞傳を凌がんとする程の努力を傾注したかも知れぬ。下斗米と五郎は同藩の由縁もあり、曾て水戸滞在中松陰は其の傳を江幡から寫跋したのを贈られてをるなどにも、さうした激勵が自然と湧いてゐたからである。「文章報國」「文は人なり」てふ明治の流行辭語は、強ち新文藝的運動の標語でなく、夙に幕末の志士に克く觀念された例で首肯されよう。況して松陰の如き其の實文章には常に最大の注意と精力を用ひし、例へば後年松陰が東送の永訣に臨み、友人土屋に示して、「○前清人云、拾收人遺編、斷簡、其功德更倍」
于瘞埋暴骨、露骸、今吾骨未知何所暴露、而公先錄○東行前日存吾文、吾雖死於道路可也、
松陰神社藏、社藏、「かう遺言してをるなどにも、最後まで悲壯な文章意識を心得てゐたのに、覺とるべきであらう。

翌日の朝は晴であつたが、即て雪に變はり、愈東北特有の惡天候となつた。三人は植田を發足、海道から離れ、此處より左に折れて仙道に出抜ける山間の道を取り、山田、根岸村を經、齋所の有名な難嶮を突破し、其の夜は白川郡竹貫村に泊り、二十五日又雪を衝いて、仙道南要の白河に至つた。そして其の翌日例の如く新太郎の紹介狀を以て、劍士三田大六を訪問したが

目に一丁字無き人物であるのに呆れた。然し旅宿に越後流兵家平井勘五郎、青木造右衛門、山田喜内の來訪を受けたが、彼等にも亦得べき所がないのに失望した。此の日の條末に「岩城海濱、距白川二十里、有變白川差兵援之、白川雖在亂山中、東山本道、而西通肥之長崎、東極松前、蝦夷、奥羽諸侯必由之地、市廛繁盛、」と書止めてをる。固より松陰等は水戸や會津とは違ひ、白河に滞在して其の藩の政情や士風、乃至城下の狀態を詳しく視察しやうとした日程を豫定しなかつた。それなのに二十八日まで當地に足を駐めたのは奈何。今之を松陰の日記で言ふと「廿七日、晴、尙滯、彌八將有所爲焉、故欲以明日決事甚秘、不可紀、」とある斯の最後の意は、東征稿の前日條に「聞賊○五郎亡兄仇田鐵左膳、以四日飯國○盛機不可失也、請與三君永訣、吾二人○松陰鼎藏、請生死從之、五藏強辭之、遂定策、」に瞭然であらう。而して東征稿の云ふ所、若しか青年的誇張でなかつたれば、江幡が驟然策の定まつたのに對して、松陰等の『生死之に従はんことを謂ふ』とは、尠くとも自身が東北に亡命する動機の決心と依然重要な關聯を言つてをる。爾り彼等は五郎に應援、達志しむる事が社會の爲め重大の意義があると、強く信じたのは何んとしても否定を容れる餘地のなきまで、斷言してよい論定に陥いらざるを得ない。

曩に松陰が江戸より遣つた家兄宛の舊臘十二日狀、十四日亡邸一別の詩、翌春十八日水戸か

ら父兄や兒玉、小田村等へ送つた手紙と云ひ、特に復三來原良藏一書、東征稿と云ひ、彼れのさうした舉動を深く詮穿すると、東北遊歴そのもの、完了を以て、殉國的用猛の第一回と稱したのでなく、父祖代々最恩義ある藩律を犯した非行爲を代辯するものと言つてよからう。蓋し其の罪は縦し五郎へ自ら進んで應援する爲め、急變した一時的青年の感激行動と見做したいが、彼れにしては苟しくも武士たるもの、一旦の約束を撤廢するのは切腹以上の責任あるのみならず、後にも述べる事であるが、一行の義舉を東北の中から實現して、世人の覺醒に資する、新思潮への影響を絶對に信じたからであらう。換言すれば本來の目的たる東北視察は時局と重要な關係あるのを充分に知りながら、五郎の同行參加に因つて、屑よく之と替へるに、後者の方を以て精神的に、大なる効果があるものと信じたからであらう。

而已ならず松陰の詩や書狀中には、五郎を義援することを、宛も天下に告白するやうな檄語が可成り見られよう。例へば既に引いた筈である「丈夫の一諾、苟にもすべからざるなり、夫れ大丈夫は、誠に一諾を惜む」の如き、或は「一諾忽せにすべからず、流落何んぞ辭するに足らんや」、若しくは「縦ひ一時の負ひを爲すとも、報國尙爲すに堪ふ」の類、悉く五郎の行動を絶對に信じて投じた應援誓約の表明に外ならない。殊に松陰は一段と之を強調して「太平の久しき、氣義の將に地に墮ちんとす、讀書の人に非るよりは、眞に之を知る能はず、氣義の事は

天下萬世へ關係し、至大至重、窮達、禍福、榮辱、利鈍は一身、一家の事」の如き、彼れは斯の亡命の一舉を目して、徒らに五郎それ個人の復仇應援とは意識してゐないのである。彼れの應援その超越こそ「國家への御奉公、人に對して愧申さず」云々と披瀝して、決して一私人の至小至大の加勢とは念頭に無かつたのである。畢竟幕末の外夷難局に方り、斯の一舉を以て久しく太平に狎れ、忘れかけた義氣の復興と恢復を促す策と爲し、一介の五郎の境遇を執へて、兵學者的に之をして利大化し、自分の東北遊歴と相結んで、索莫たる關外からその切求する義氣、節義を發揚する思想的計劃を獲やうとするに至つたのであらう。縦し單なる一片の義氣であつても、社會に及ぼす影響の大なるは古今同一で、必ずしも之は漂々浪々たる五郎だけの應援に止まらぬと信じた行動でなからうか。そして其處に考察を假借されるならば、亡命罪と五郎報復後に於ての聯座罪とに因つて、若し江戸に歸れず、長州にも戻られなかつた場合、更に蝦夷、樺太、黒龍江、滿洲を経歴して國家、國防上に偉大なる活動の目論見を抱いたかも知れぬ。彼れが日記の序文や、去年八月二十三日叔父に贈つた手紙に見ゆる林子平が海國兵談を著梓する苦心などにも、彼れのさうした遠大の理想を、既に之と關聯せしめ湧出してゐたかも知れぬ。友義の士來原良藏の正月十五日狀未に「復た會期無し、之が爲め惻然」云々と新三郎か誰かに言つてをのを見ると、松陰は生きて再び良藏等に逢ふことを豫期しなかつたのである

まいか。亡邸詩句中の「流落何んぞ辭するに足らんや」とは、正さしく之が雙對の意志でなかつたらうか。

前に戻るが、日記二十七日條の下文は「作一詩示之云、白水關下風蕭々、與君永訣在明朝、壯士策定休遲疑、勝敗天數非人爲、○下」とて、松陰が之を賦して五郎に與へた。去る二十三日一行が始めてミチノク勿來關外に入り、其の址下を通行中、五郎が口占した彼の「風雨蕭々日將に夕ならんとす、來り宿す勿來關下の驛、君と手を分つ多日なからん」云々に、松陰が對へて「君に追隨して幾晨夕、踏盡す山亭又水驛」云々とは双絶の訣別詩であるまいか。況してや古來東北の界標と戒嚴の爲に設置した白河、菊多割の要地に於てをやである。翌日の「二十八日、晴、斷然與彌八訣、午前發驛、初約與彌八訣於此已久矣、及期情事難裁、買醉遣悶、所以致延留數日也、出驛越小坂一行少許、道左有一路、是爲會津道、余與宮部將抵會津、取道于此、而彌八則直行矣、宮部痛哭、呼五藏五藏數聲、余亦嗚咽不能言、五藏不顧而去、注視久之、及不得見而去」は、今の矢吹町外れあたりに至つて、一篇の劇的悲壯の情景で別れることになり、乃で五郎は仙道を北に直行し、松陰等は岩瀬郡飯豊村に向ひ、夜は勢至堂村に泊つた。けれど尙「與彌八訣之後、終日茫々如有所失矣」と、二十八

日條末に見られ、全く熱烈を越えた失意的の心境である。今此處に想察して言ふ失意とは、松陰がどこまでも五郎と生死を共にして、彼れの報仇を達成せしむる覺悟を以てしたが、何故か五郎は徒らに二人をして加擔さすべからざるを識つて、固く之を辭した爲め、彼等は是非なく爾後の應援は中止し、最初の目的なる東北遊歴そのものに還つた事に歸著する。然し初定の如く三人で其の盛岡藩の奸賊を斬つたとて、果して松陰と鼎藏は自己の精神に生くるとも、又先方より害さるゝか、重罪に問はるゝかの二途あるに終り、單なる地方的噺位に止まる程度でなからうか。従つて其の壯烈なる彼等の行動を以て必ずしも關外奥州より忠孝、節義の復興を天下國家に示し、士道上に重大なる影響を與へるに至るか付うかは請合はれなからう。要するに松陰等の五郎聲援は全く多感、多血の純眞さを遺憾なく發揮し、東北遊歴をして自ら悲壯化せしむべく、好んで五郎への應援を固持したのであると、姑らく假定するに止めて置きたい。斯の言分は史論的に甚だ曖昧の遁辭であるけれど、東征稿以下に假令僞らず執筆してゐても、松陰の全生涯を通じ、若し精神分析學的に之を考察し批判すれば、江戸邸脱走は實に五郎と出發日の約束を履行する爲めに過ぎず、且彼れの性格として終始武士を以て任じ、其の爲め五郎との關係が書翰と日記に、徹頭徹尾さう出來て了つたのでなからうか。

二十九日、宿を立ち仙會の界領なる勢至堂峠を越え、豫定の若松に入つた。新太郎から紹介

狀を貰つた井深藏人を訪問したところ既に死去し、彼れの孫茂松に會見し、又志賀與三兵衛、黒河内傳五郎を訪問したが共に不在、翌二月朔日の夜志賀、傳五郎、茂松が旅舎に來訪して呉れた。翌日高津平藏を訪ね、以後廣川元三郎、馬島瑞園、庄田長之助、廣川勝助、西郷十郎右衛門等に往來して交はり、六日當地出發の朝、黒河内の案内で藩營の日新館を見、文武の制を視察した。去るに臨んで未だ若い茂松に一詩を示して將來を戒めてをる。其れは「書畫眞玩具、詩歌亦閑事、立身素有擇、所志在國器、擊劍又讀書、文事兼武備、案上千卷書、遠求聖賢意、腰間三尺龍、進塵百萬騎、男兒本分外、無復功名地、及時當努力、無空青年志、」と如何にも峻嚴な教育者の立場と爲つて、充分之を諭したのである。斯の「書畫は眞に玩具」云々は、當時我が國外交上の難局下に在る青年子弟に對する劇烈の箴言であつた。然も兩人の年齢差は明かでないが、松陰より僅に三四歳下であつたと思ふ。其の詩幅に對し後年南摩綱紀の跋で見ると、松陰の東北旅行の扮装が粗ぼ想像される。それを示すと「跋吉田松陰詩幅、南摩綱紀ナラン、松陰會遊會津、訪高嶺君叔父井深茂松、穢衣弊袴、皚然一書生也、而詳問藩政之弊、文武之狀、且索紙曰、請錄詩爲贈、家人意輕之、出藁製鹿紙、松陰乃錄此詩、悲壯雄健、吐露肺肝、書亦豪放不羈、超三出繩墨、松陰又請晤軍監某、○會津藩軍事奉行廣川勝助ナラン、猶右ノ詩、井深藏人、ソノ次子某、孫茂松ノコト日記ニ參照、導見之、蓋亦足以想見其爲人矣、高嶺君獲此幅、愛翫不措、示余徵跋、嗚乎松陰誅、象

山下獄、卑幕府仆、至王政復古、皆余所目擊、今觀此幅、回顧當時、有下勝感慨者、因跋一語云、○東京市高嶺俊夫藏、序デニ云フ、山口市寺内文庫藏ニ、松陰ノ題上總五郎忠光、窮源右府（賴朝）圖上三日條ニ見エタリ、日記晦日ヨリ今月八日マデノ條參考、とあ（井略）る。又多分是の時であらうと思ふが、松陰に贈つた歌に「長門萩の人吉田ぬしのはなむけとて、深光徳○茂松ノ名ナラン、紫のゆかりならねどものゝふの花故しとふ萩の里人、○吉田家藏、がある。

松陰が會津に直接残した關係資料は、日記や詩幅に過ぎないが、外に次の文がある。即ち「慧日寺○會津郡、今耶麻郡磐梯村ニアリ、直言宗、印影記、大同年間、猪苗代洪水氾濫、其二天朝○大同二年夏東國旱ス、天長元年降雨セシメ給ヒンコト元亨釋書、空海傳等ニ見エタレバ、本書ノ天朝ハ天長ノ誤リナラヌカ、差ニ僧空海以治水、時空海建慧日寺、○空海ノ史料、特ニ今昔道碑等ニ合考スレバ、陸奥ニ入錫セズ、ソノ法弟德一ノ誤傳ニテ、慧日寺草創亦後者ニ係ルベシ、寺今尙藏銅印數顆、此印即是會津藩士廣川元三郎所贈也、猪苗代距會津城○一名鶴ヶ城、五里、築城戍卒以當奥羽之衝、始祖中將正之○保科、公之祠社焉、稱土津社、○同郡磐梯村、縣社、ソノ餘白ニ、右ノ印四箇ヲ押ス、（吉田家藏）、但シコレニ對シ吉田庫三ノ書附アリ、嘉永五年、先生年二十三、東北遊の時、會津藩士廣川元三郎の贈れる慧日寺の印影に其由を記して保存せられたるもの、先生の手記ト見ユ、とて、此の寺は中世前後より、中央にまで聞えた會津諸郡中第一の古刹であるが、彼れは何んの爲めに之を書作したのか判らない。又安政四年四月二十三日調の下註ある二十一回叢書卷四目次に「波多野氏會津諸稽古覺書、波多野與八、」と記してをる。其の翌年三月二十八日、萩城外に幽囚中の松陰に宛てた手紙を序でに示すと「一翰啓上仕候、追日向暑候處彌御清

迪可被_レ成_ニ御座、珍重ニ奉_レ存候、次ニ老拙當年七十五歳ニ罷成候へども、于_レ今存命罷在候間、乍_レ憚御放念被_ニ成下_ニ度奉_レ希候、先年_○嘉永五年二月、東北遊_ハ遠方兩度_○往_レ迄御枉顧被_ニ下_ニ、深く忝仕合ニ奉_レ存候、其後御無言仕候處、奇禍_○東北亡命及ビ下田_○御逢被_ニ成候由傳承、如何と御身上大ニ御案申上候處、無事ニ御濟_○決_レ被_ニ成候由目出度奉_レ存候、扱御約束之拙著終北錄漸上木ニ相成申候間、壹部懸_ニ御目、御笑擲被_ニ成下_ニ度奉_レ存候、何卒右書へ御題被_ニ成候御詩作一首頂戴仕度、外ニ御同志之御方ニ一兩首御乞被_ニ下度、是亦奉_レ煩候、去々年々去年へ懸ケ、友人南摩三郎_○綱紀ノ幼少名、字士張、羽峯ト號ス、父ヲ雅綱ト云ヒ、文政六年十_○月生ナレバ本年三十歳ニアタレリ、明治四十二年四月歿、八十七、と申者、西國へ遊歴いたし、只今ハ江戸へ罷出居候處、是へハ御逢も被_ニ下候哉、否外國奉行衆、アメリカ行之節、隨從罷越可_レ申趣ニ付、送別之詩文相求候ニ付、一首_○未_レ發、拙作仕候ニ付、紙末錄上懸_ニ御目_ニ候、右ハ御安否相伺度草略如此、此餘ハ奉_レ期_ニ後鴻之時_ニ候、恐惶謹言、_○吉田_{家藏}とあるが、三郎は遂に松陰と會見しなかつた。但し右書面のアメリカ行とは、同六年八月二十七日幕府は水戸齊昭に永塾居、其の子藩主慶篤に差控、同く慶喜に隱居謹慎を命じ、剩へ其の臣安藤帶刀を死刑に處した翌月十三日、條約批准交換の爲めに外國奉行新見正興、村垣範忠、目付小栗忠順を米國に派遣することにした。それで三郎は選拔をうけ、隨行されるやうになつたのを言ふのであらう。是の遣米使一行は、翌る萬延元年正月二十二日神奈川を解纜した。

ところが諸藩の少壯士は競うて先進國の文物を見たさに、極力隨行の運動は勿論、果ては密航まで仕兼まじき者さへあつた。例へば松陰の門人で後ち東送の命に直面し、師の肖像を寫した松浦松洞も亦熱烈な一人りである。安政五年九月十七日江戸に畫策中の松洞から松本村幽因の松陰に贈つた手紙を見ると「水府も志士多分蜂起致、どふべら事愉快ニ參り候歟、_○中_僕實に策無_ニ御座、奥羽行も何程之益ニ相成るべくと申計算御座候而之事にも非ざれば夫は扱置、_○永_{今度長井}_○外國奉行永井尙志、後チ_○外國奉行水野忠徳、但シコノ後新見正興ヲ以テ_○忠ノ派遣ハ文久元年五月歐洲ニ命セラレ、歟に從而米利堅行所存ニ御座候、此行なれば所_ニ見聞、或は畫_○松洞ハ夙ニ繪_{ヲ學ビシモノ、}或は記し、隨分益ニ相成可_レ申と勘考仕候故、一先御相談申上候、如何ニ御座候哉、_○中_又一昨日承り申候得ば、今度長井、_○永_{水野杯之米利堅行は、他藩之者一人も連行申事不_ニ相成_ニと之、幕府ハ被_ニ仰付_ニ御座候、_○前略、動上諸_{士遺墨帖所收、}かうあつて無念ながら彼れ亦渡航が出来なく、さうした事情で南摩も隨行が叶はなかつた。松陰が奥州に携行した雜錄に「會津國風、サンサシグレハ茅ヤノ雨カオトモセデキヌレカ、ル、_○吉田_{家藏}」と珍らしく見える。尤も此の俚語は仙臺が發祥地の様であるが、既に會津の盆都にまで侵入し、當時大いに流行してをり、松陰が其の城下に抵つた時、或る人にでも聞いた儘を書付けたのであらう。さて六日二人は若松を發し、高久、坂下を経て塔寺に至り、高津平藏の姪なる戸田兵庫が此の村の八幡神主をしてをるので、彼れを訪ね多大に藏する寶物を展覽せしめら}

れ、遂に其の祠宅に泊つたやうで、翌日舟渡、野津、野尻、白坂、寶川、東松、車の諸村を經、鳥井峠を踰え、越後に出で、八田、福取を過ぎ、其の夜は焼山に宿した。

(七) 劇的報仇奔走中の邂逅、遊歷完了、歸江

二月十日松陰と鼎藏は越後新發田に出て、夫れから新潟に至り、江戸の新太郎より貰つた添書で劍客日野三九郎を訪ね、其の家に泊つた。是の人は豫て會津の黒河内傳五郎や新太郎の父彌九郎と好友である。翌日三九郎と一緒に中川立庵を訪ね、且松陰と鼎藏は同宅に宿し、明日も泊つた。十三日二人は是の新潟から直ちに松前に直航し、蝦夷に渡らん計劃であつたが、彼岸に至らねば便船が無いと云ふので、宮部は徒らに之を待つのを止めて、佐渡に渡ることを主張した。松陰は之に賛して、明日發足、十五日出雲崎に至つて船を待つた。然るに北國季節の天候不良の爲め、當地に延留すること實に十三箇日に及び、二十七日佐渡の小木港に渡り、翌日順徳御陵を拜し、絶海の孤島に萬乗の君を遷し奉り、崩御せしめ給うた北條の大逆無道を憤慨し、哭して詩を賦してをる。それより有名な相川に出でて、二十九日藏田太中を訪問し、佐渡の士人、地理、鑛山等に就きて詳しく聞き、翌晦日寒風栗烈、飛雪の中を金鑛吏松原小藤太の案内で諸所を見物し、更に入坑して採鑛の作業を視察し、閏二月朔日相川を立ち、春日崎の

砲臺に至り、翌日八幡に順徳天皇行在所址を拜弔し、三日小木港に返した。此處で又烈風に沮まれて十日まで滞在、同日午後漸く出雲崎に至り寺泊に宿し、翌日新潟に戻つて日野の家に、十二日中川に夫々泊り、明日中川に寓する仙臺士氏家晉と立庵の子東庵と伴れ立つて、後藤宗謙宅に酒を飲み、又一同と相携へて海岸に行き、復た飲んでをり、此の日以來日野に泊つてゐた。十六日松陰は始めて東北遊歷に出てから、家郷の父、叔、兄連名宛の一通と、今春既に江戸邸に來た山縣半藏に詩を贈つた。是の半藏亦長州少壯有爲の士、嘗て彼れや兄梅太郎等と共に、叔父玉木文之進の松下村塾に學んだ竹馬の友であり、明年春幕府の樺太巡檢使に隨行し、其の四月五日奇しくも奥州白河に宿した後ちの穴戸磯である。

是れより先本月十日、文之進が北行中の松陰に遠く與へた書信は、實に叔侄の情連綿として無限の眞愛が含まれてをる。即ち、

荒陬、疊語中、定而何如、御國于今暖氣催し兼候得共、公臺○藩主敬親益御機嫌克被遊御座、國本も御定り萬々恐悦至極奉ニ脱カ存候、先以舊冬御東行之次第、飛ぬ鳥、跡をにこし、御國武士之遊學空く、流浪之形狀ニ被想像候、右ニ付一族、親類之殘憾、悲愁御案じも可有之與御尤ニ存候、愚も到來後數十日引籠、片腕モガシ候様相考へ、官途も是迄と存詰罷居候處、井與○井上與山字右衛門等之論ニ詰られ日々出勤仕候へ共、其後于今氣分相不快、就而は遊蹤いかゞ哉と案ずる計にて、此書狀も早晚こそ何地に達し候

而御披見可_レ有_レ之哉も渤海もなく氣之毒之事ニ候間、阿梅_{○杉梅}も縷々申越之由、其内之上策、下策等茂段々有識者之論を経たる事ニ候間、兼而之無肯を以、何之御案じも無_レ之、此地之論之上策ニ御出候而其上をバ丸々天命ニ任せ、御咎之輕重何之計るに足らんや、是社大丈夫よと申候、何も歸郷、一堂上之談ならでハ心懷盡き難く、勿々擱筆候、恐惶謹言、

(嘉永五年)

(玉木) 文之進

閏二月拾日

尙々其内御用心、誠々御專一ニ存候、何卒被_レ居候所なり共、早々相分度候、以上、

(吉田)

大次郎様 _{○東京市吉田茂子藏}

斯く彼れとしては讀むに勝へざる苦痛、感涙の一言一句を、未だ自分の旅先に達かぬうち(江戸に歸つてから受取つたのであらう)、十八日松陰は中川宅で認めた狀を、遠く故郷の尊族三人宛に發した。

_{奥州}

正月廿日發水戸、廿五日到_{○白川}、延留三日、與_{○安藝五藏}別、廿九日到_{○會津}、延留七日、二月十日到_{○新潟}、此間雪甚深矣、然寒不甚嚴、出新潟雪絶無、而僅有新潟往來、日野三九郎中川立庵二人家延留三日、謀_{○航}佐渡、タニタニ出雲崎爲_{○便}、十四日到_{○出雲崎}、風氣不_{○宜}、滯_{○出雲崎}十三日、廿七日至_{○佐州小本}港、廿八日至_{○相川}、滯三日、閏月三日至_{○小木}、又風汎不_{○宜}滯七日、十日航_{○出雲崎}、十一日歸_{○新潟}、將_{○以}明日發_{○新潟}爲_{○羽州之行}、道中大略如此、和氣清麿贈_{○從一位之事}、昨年三月十五日之事之由、水戸にて始承_{○之}、實數千年之盛典、而江戸人漠然

不_レ語、其不_レ知_{○有}京師、蓋如此矣、會津にて志賀與三兵衛、黑河内傳五郎、原貢へ會面、孰も壯健_{○黑河内}

原竝_{○二}劍士、是_{○レ}ヨリ先弘化元年、兩_{○人}萩ニ招聘サレタリ、志賀云、當春君疾御不豫一件にて、年首狀不_{○差出}候間、岡部、小幡_{○以上萩藩ノ槍術}

師範等へ宜敷申候様申候間、小幡へ御序も御座候ハ_{○可}然、

四月中ニは江府可_{○罷歸}ニ付、其節委曲可_{○申上}、且日記_{○東北遊日記}拙吟共併セ差出度奉_{○存候}、俄ニ出

足思立、甚紛然ニ罷居申候程ニ寄而は、大番連中交替後ニ及べく候間殘念奉_{○存候}、併來原良藏歸國候ハ矩方心事相知_{○申可}、

客中感懷 _{○東北遊日記二月十六日條以下、佐渡ニ航スノコトアリ、コノ詩亦出ヅ、參見、}

三千里外漂泊身、懷_{○國}思_{○家}感_{○存}臻、繪_{○續}纏_{○身}辱_{○君}恩_{○潘主ノ恩}、定省幾年負_{○慈親}、慰_{○閑}時取_{○史}

乘_{○讀}、淚落古來忠孝人、何日應_{○竭}鰥_{○鰥}鈍力、報効得_{○與}古人_{○倫}、

宿_{○新潟}、_{○コノ詩}、同記二月十日條ニ見エタリ、但シ、辭句ニ異同アルハ、本狀ヲ認ム時ノ推敲力、

排_{○雪}來_{○窮}北_{○陸}陸、日暮乃向_{○海}樓_{○投}、寒氣栗烈欲_{○裂}膚、枉是向_{○人}誇_{○壯}遊、男兒欲_{○遊}蓬_{○萊}者、家

鄉更爲_{○父母}憂、父母憂_{○子}無_{○不}至、應_{○算}今夜在_{○何}州、枕頭眠驚燈欲_{○滅}、濤聲如_{○雷}夜悠々、

水府自葬祭式一典寫し、井上壯太郎迄送り置候間、追々相達可_{○申候間}、祭式杯御見合端ニも可_{○相成}哉奉_{○存候}、

齋藤新太郎御國へも參り候哉、追々同人へハ懇意仕候、既ニ此遊歴、水戸ニテ永井政介、阿久津彦五郎、白川三田大六、會津井深某_{○藏}、新潟日野三九郎等、皆新太郎が添書なり、

(嘉永五年)
 閏二月十五日賀
 (杉百合之助)
 家 尊 大 人
 (玉木文之進)
 玉叔父膝下
 (杉梅太郎)
 家 伯教兄 前同、
 ○東京市

此れで見ても、水戸以來始めて郷里に送信したのが解からう。

やはり同月十八日梅太郎が同行の宮部に對して、彼れを些しも恨まず責めず、但だ忠孝と友義孰れか是れ大切かを強調して、一日も早く旅行より歸還すべきを依頼してをること、左の通りである。

○前文 一諾は素より可憐事ニ候へ共、執れ水府ニ而年を迎へ、春暖の差向、奥地の入込候御約束之由ニ候
 關ク、一諾は素より可憐事ニ候へ共、執れ水府ニ而年を迎へ、春暖の差向、奥地の入込候御約束之由ニ候
 へバ出足暫く見合、少し御跡を出懸候而、彼地邊に而追續候とも、左程諾に違ふと申譯は有レ之間敷、區々
 之身を惜むに不足といへども、忠孝を廢すると友義ニ背くと孰れが重くして孰れが輕く候哉、甚輕重之取
 捨を誤り候事と奉レ存候、彼是之辨も無レ之、不忠、不孝之罪に陥り、實ニ不三相濟儀と氣毒千萬奉レ存候、
 然處一應遊學之官許は蒙り居候事ニ付、右暇月之内ニ歸り、其節之參り懸り、丸ニ打出シ候而斷申出候ハ
 ゝ、君父を跡に見、亡命仕候筋ニは相當り申間敷候哉と奉レ存候間、何卒是迄之御友義ニ被レ爲レ對、前條之
 趣を以、御直々被レ仰諭ニ被レ下候様奉ニ希上候、尙又若又大次郎東國邊に共殘居候而御面會難ニ被レ成儀茂

御座候ハ、御傳を以御書中ニ而成り共、御覺醒被ニ成下候様偏ニ奉ニ希上候、國元罷歸り候ハ、公に
 し而は國典も相立、私にし而は先祖之祀も絶ず、父母、親戚之憂念茂解け、一舉し而不忠、不孝之罪を少
 し成り共償ひ候道と奉レ存、御恩惠之程、天高、海深難レ有奉レ存候、尙又業邊成立候上ニて歸參可レ願出
 と申儀も可レ有レ之候へ共、萬一其宿志得レ遂不レ申内ニ死亡等仕候節は、遂ニ不忠、不孝之罪晴れ候期は無
 レ之、萬々遺恨奉レ存候間、兎茂角も早速罷歸り候へバ、是祐萬全之策と奉レ存候間、幾應も此段得と落著
 仕候様御教示奉ニ祈上候、申上も疎之儀ニは御座候へ共御氣體御保護第一之御儀と奉レ存候、恐惶謹言、
 (嘉永五年)
 閏二月十八日

杉 梅太郎(花押)

尙々幾重茂隨時御自重奉ニ專要候、千萬失禮之至ニ御座候へ共別紙一封彼者陰、○弟松
 も略前後之意味を述置候間、委曲は貴公機入々被ニ仰聞ニ被レ下様奉ニ頼上候、尙又是非共修業目途相立候迄は、
 歸國難レ仕候之議とも御座候ハ、重疊御無心之議奉ニ恐入候へ共、居所彼是御片楮被ニ仰知ニ被レ候様之下御心入共
 御座候ハ、誠ニ以難レ有奉レ存候、萬々御厄害之御儀斗り申上、實以奉ニ恐入候、何卒失敬之段御了簡被ニ仰付ニ被レ下
 候様奉ニ希上候、以上、

宮部鼎藏様

人々御中上レ之 ○熊本市宮部増信藏、後收四月九日
 ノ鼎藏ノ本狀ニ對スル返事ヲ繼看、

實に斯のやうに兄弟の絶對な敬愛を表して、其の先輩たり又友人たる宮部に迫つた。然るに右の手紙は二人が江戸に歸つた翌々七日に、鼎藏は自藩の龍口邸で受取つた始末である。

一體中川宅に十四日から十七日まで滞在したのは、松前行の便船を待ったわけで、それが一週間後になつてから舟夫が士分の者を同船させるのを好まず、辭を設けて謝絶するのであると解つた。二人は已むなく意を定めて陸行に決し、十八日中川父子、日野、氏家、味形關右衛門に見送られ、新潟を發足し、其の日は藤塚に著泊。次日から電雪雨に困難しつゝ、大略海濱に沿うて歩行、二十一日遂に羽州に入り、彼の有名な鼠ヶ關址の地や溫海を過ぎて大山に到宿。二十二日酒田を經、吹浦に至つて泊り、翌日有耶武耶關址を超え、鹽越、平澤を過ぎ、本庄に至つて泊つた。二十四日久保田（後ち秋田と改む）に著き、翌日城下の商人敦賀屋新六、澁江内膳の家來熊谷恒次から佐竹の内情や藩政などを聞き、二十六日出發、鹿度に宿り、翌日八郎潟の道に沿ひ、檜山を過ぎ、小綱木に宿した。然るに此の日は「騎行八里、歩行三里、是夜與下加賀船頭自青森歸著同宿、云、西洋船過松前、津輕之間者、今年已三四隻、」と遊記の二十七日條末に見られる如く、近時異船通峽の模様を遁さず書留め、秘に幕府の之に對する緩慢なるを慨嘆した。先年十二月九日松陰は江戸で薩摩藩の兵學者肝付七之丞より松前、佐渡地方を跋涉した經驗談を聞いたのを、山田宇右衛門以下に通知した一節の狀況と、今自分が實地に臨んで目撃してをるのみならず、來月小泊に宿した時も同様の感であり、且又其の月六日平館に至つた例の如きは「四年前夷船一隻來于此、距陸里許、下錨、日放脚船一隻、乘五六人、」

上陸、夜則還船、如此者凡三日矣、○中略、松前戸數三千、去此十七里、惠佐志千戸、三十五里、宮館五百戸、三十三里」云々と見られる。

彼れは後年幕府當路者の不道、不義と並べ、外夷の侵來と共に之を極度に糺弾し、直ちに壓殺すべしと主張したほどで、殊に下田蹈海以後獄中の最後まで、其の事を同志や門人に促し、或は要策を指令したのは餘りにも悲壯であるが、北地の警備と極東異人に對しては特に之を要したのが遺書や手紙、書留め等に多見される。通俗の例を挙げると「情報書留○嘉永元年、當嘉永元

戊三月十六日、津輕々江戸表へ御早打有之候一條、此度異船地方へ押寄候ニ付、青盛々日々早打在之候ニ付、松前表へハ南部々加勢、然ル處異船々津輕の備へ、不火失打懸候ニ付、青盛之人家千軒余焼失、此様子見る々南部勢々黒船に向イ、石火矢數多打懸候故異船散々ニ相成、大風ニ灰をちらすごとく逃去り、南部勢大手柄、尤三番手を押出し候趣、御飛脚々直ニ委敷承リ候ニ付、繪圖ヲ以相印シ申候、○繪圖ノ併示アレド略ス、東京和田國雄藏の外に又「松前出店江州商人之風説、亞墨利加夷人箱館にて自由に人家に押込、我儘に戸棚推明ケ引出ヲ引出シ、折節人居合ざれば幸にして盜取べき趣なり、又人居合すれば何の品ニ而も交易を望む、○中略、又二條詰江戸役人々其家元々申來りし由は、夷人箱館ニて此方の婦人を理不盡に亂淫し、終に是が爲に婦人死せしとなり、此之趣なれば爭端起るべしと申人多しとなり、○下略、安政四年ノ雜篇ナル封燈私記中ニ見ユ、二十一回叢書所載、萩松陰神社藏、」等多少嘘

説を加へた大噂であつても、東北の沿海は實にさうした慘害があつたのである。斯くの如き夷禍や外舶に對する武備は、迨に先進地の九州、關東の海岸にさへ未だ遺憾ながら無かつた。但だ憂國の志士は皇國の中央を守衛する爲め、主として京畿を重大視するに反し、幕府は自己の爲め直近の相房を警護し、鎮西の大名亦己れの要邊に備へると云ふ状態であつた。然るに京畿を護衛するを第一とし、以下を分守すべきは勿論、是の外に東北を重視したのが松陰であつた。彼れの裏日本海防急要説は今一々擧ぐる煩瑣を避けるが、大略は水戸より江戸邸に在る來原良藏に送つた書翰や東北遊日記の自序と、夫れから歸國して屏居、待罪の間に國史と相共に海外の書誌を博讀した心境で充分に知られよう。後ち安政元年三月四日下田沖より海外に密航を企てんとする直前、自分は鳥山宅に寄寓し、當時麻布邸に在勤の良藏に與へた書面下半に、「蘭文典一冊、蘭學巡携去、願告淡水、○赤川、蓋シ松陰ノ門人、令無爲怪、僕以明日午後發都、將潛匿鎌府、○鎌倉、泉寺、今日急務不在亞墨、○米、而在魯西、故取文化以來北地文書、埋頭精研、將立待魯西之長策如何々々、○萩安藤氏藏、但シ回顧錄、及ビ三月廿七日夜記參考、とあるのは、鎌倉に暫く隱棲して、其の實對露關係の研究に非ず、一應ベリーの軍艦に投じて米國に渡り、それから露西亞を始め海外諸國の事情を汎ろく探訪して歸り、我が外交政策の確立と軍備擴充の智識を求めんとしたのである。松陰が東北を以て我が日本の急要な防備を必感し、同時に諸藩の動向竝に經濟に就き、重

大の關心を有つたのは、驚嘆すべき先覺者と謂はねばならぬ。明年十二月三日松陰は宮部、野口直之允と同道して瀬戸内海を溯上し、大阪に達する直前、其の安治川の船中で彼の會澤慈齋の「新論」を鼎藏と讀むこと數回と述べた家兄への狀末に「僕頃爲歌云、亞墨奴が歐羅ヲ約シ來ルトモ備ノアラバ何カ恐レン、備トハ艦ト礮トノ謂ナラズ吾數洲ノ大和魂、以此語人、人莫不咲、然今日之事、固如是矣、○下略、山口縣、山口吉良藏、」かく熱説してをるにも、彼れの兵學的國防の實行を天下の識者、要人等に急諭して熄むことはなかつた。

二十八日坊澤、綴子を経て大館に至り、白澤の山内儀兵衛宅に投宿、然も此の地は實に江幡父子の出生故郷であつた。文政四年の昔、僅二十三歳で豪勇無双と謂はれた忠臣下斗米將眞（相馬大作）等が、時の弘前城主津輕寧親を就封の途、右の矢立峠に自製の大紙銃を以て要撃せんとしたのは稗史小説や傳記に名高い。然し彼れの志は成らず、翌五年八月幕府の爲め痛ましくも獄門に處せられた。されば後ち藤田東湖が將眞の誠忠傳を撰した所以で、其れを去年一行が水戸に滯留した時、五郎が寫録し、且跋を附けて松陰に贈つた以來、彼れ亦下斗米の孤節に甚だ讚歎してゐたのである。

大作の事蹟に就いては、遊記二十八日條に初出し、又翌日條に「乃有矢立嶺、○中、其嶺爲奥羽界、山内云、往年下斗米、蓋欲要津輕於此險也、○中、余會聞之山鹿素水、○松陰ノ師ニ、質之

安藝五藏、向在_二水府、讀_二藤田虎之助所著傳、云々と、此の大館に來て宿主山内から復た之を聞かされ、彼れの志にいたく感心した。右の日（晦）山内宅を發足し、二人は矢立峠を踰え、碓關、於阿仁を経て、弘前に著き、明る三月朔日伊東廣之進を訪問して津輕の藩治を訊ね、二日江戸在中兵學の師素水の弟なる荒谷貞次郎を訪ね、共に伊東に行き、鈴木善二郎も之に會し大いに談論を交した。是の日弘前を發し、藤崎に至つて泊り、三日又發し諸所を経て小泊に出て泊つた。遊記の四日條末に「此與_二松前、隔_二海相距七里、と見る如く、松前には海の彼方指呼の間僅に七里であつた。そして翌日小泊旅舎より觀た首條に「晴、推_二戸望_二之、松前連山在_二咫尺間、云々以下は土地の狀況を述べ、當地を發して、三厩、大泊を経、上月に至つて投宿し「小泊、三厩間、斗_二出于海面、者、爲_二龍飛崎、與_二松前白神鼻、相距三里耳、而夷船憧々、往_二來于其間、比_二諸榻側容_二他人酣睡、者、爲_二更甚、苟有_二士氣、者、誰不_二爲_二之切齒、哉、獨怪當路者、漠然不_二省、と銳利の批判を下し、又附近に住むアイヌ人に對して、奸商が冷酷な手段を以て取引するのを、國家の爲めに慨嘆してをる外、此の地方に至つて松前に渡らうとした嘗ての新潟豫想の行動に就いては、孰れも書いてをらぬ。按ふに之は既述の如く日程や天候、船の都合で遺憾ながら其の地に渡るのは中止したやうで、後年の爲め太だ残念の一事であつた。「六日、寒風栗烈、飛霰繽紛」と冒頭しながら、朝に上月を發し平館に出で、二矢村に至り、

夫れから舟に乘じ、青森灣に著き、七日夜明け市中に入つた。

是の日青森を立ち、以來小湊、七戸を経、八日五戸に宿つて藤田武吉を訪問、九日こゝを發し淺水、八戸、三戸を過ぎて一戸に泊り、十日川口村に宿し、翌日澁民を経て盛岡に著き、村井京助を訪ねた。此處は南部氏の藩所で、江幡が第二の故郷である。松陰の氣性では既に水戸で五郎や東湖の著傳に據り、檜山騷動として天下に評判された大作の事を知るに於て、一層彼れを應援するに力づき、又今其の城下に入つて彼れの辛慘や流浪に對し、更に之が義念を深くしたであらう。

松陰が盛岡に著くや、即ち「十二日、微雨、巳時乃止、訪_二坂本春汀、_〇春庵ノ一門人、至_二山陰村、_〇盛岡城外、訪_二江幡春菴、_〇五郎母、妻及遺孤文虎、_〇東征稿ニ「孤」ト見ユ、サ至_二長町香殿寺、拜_二春菴假葬所、春菴忠義之士也、以_二侍醫、從_二駕于江戸、爲_二奸臣所陷繫_二于獄、乃自仰_二藥而死、拜哭之餘不堪_二懔懔、鼎藏題_二國風二首、_〇本書既ニ燒失スレド、寫本ニテ姑ラク補ヘバ、なき人によその訣をしりつゝ、涙數句云、人衆勝_二天亦何久、請俟_二他年天定時、云男兒報_二國一死足、黃泉之下君瞑目、_〇中略、訪_二山田齋宮、瀬山命助、二人皆坐_二春菴事、爲_二所禁錮、竝辭不_二逢、未後發_二盛岡、_〇下略、しかく極めて簡單に敘述しが、宮部と自分と五郎の關係、特に目下彼れが報仇の爲め仙道を上下、潜行してをる等を詳細に語つて慰めた。又爰に推察すると甥文虎の將來をも引受けたのは確であるべく、

後年松陰が幽囚中より門人久坂玄瑞や知友の五郎に與へた手紙中に、屢々彼れの修業に就き、是非西遊（萩か熊本か平戸の内と思ふ）させたま希望を、申遣つてをるに見ても肯かれよう。實に松陰の武士道意識には、節義を以て最至高最と觀念してゐたのである。但し切角春庵の同志山田と瀬山を探訪し、且は賊の近情をも訊ねたかつたが、今なほ禁錮中である爲め、各自が憚る所あつたと見えて、松陰等の面會を謝絶したのは甚だ物足りなかつたに相違ない。猶二人が春庵の遺族を訪問した際、老母の喜びや悲嘆の情緒は「東征稿」に能く述べてをるが、今こゝに省く。當時遊記の別帳である「雜錄」中に「江幡春菴、夢ノ中ニ夢合セスル夢ヨリモ覺束ナキハ浮世ナリケリ、○前後略、吉田家藏、」とあるのは、春庵が獄中毒死の辭世であらうか。且此の「夢ヨリ」もと書ける所の上欄外に「墨鷺月芥坊、江幡童春」と見えるのは、春庵の長男即ち文虎の兄であらうか。今詳に知られないが、東征稿に據ると二子あつたことになる。

右の日午後松陰と鼎藏は盛岡を立ち、道々二人の目に映じたのは何んであるか。乃ち大作、否春庵等の義起後に、今尙残つてゐる非政の跡の慘憺たる展開であり、紊亂の蒼然たる光景を認め「南部國○藩ノ異稱、前日條ニ「南部美濃寺利敬」ニ、アタル、二十萬石、都（盛岡）也、トアリ」事、實可悼哉、○中南部鈔幣、蓋坂都豪商所出、署三商三人名、雖不知其制度何如、安得非國用乏缺不得已、屈膝於豪富、以彌縫目前者哉、堂々大藩○中、其如三國體何哉、と彼れは之に痛評しつゝ、是の日は郡山に至つて泊つ

た。盛岡藩の亂政は既に全國の有名な噂さに上つてゐた。然し近頃が始つたのでなく、天保七年十二月領内に百姓一揆が起つて以來、本年に至るも鎮まらない。明年七月二十八日松陰が家兄への手紙に「南部ノ民變も不_レ容易之事ニ候、仙臺方の扱ひニテ治マル方ニ向タルヨシ、然連年苛虐ノ所致、未_レ知其結局、要之内變外患常相倚、衰季之光景可_レ恐可_レ嘆、○前後略、萩松陰神社藏、」など告げてをる。兎に角南部氏は其の臣相馬大作の義舉このかた續いで生じた弊政と、又江幡春庵の殉事等で、善惡折重なつた問題が何れも遠きに發してゐた。

十三日二人は盛岡を立ち、石取、花牧を経、黒澤尻に著いて宿に投じ、翌日又出立、舟で和川を渡り、鬼柳村に至つた。此處に南部領南界の關がある。嘗て五郎が十八歳の時南部藩（盛岡）を逃走し、將に東都に上らんとするや、一詩を留めた句中に「聲明を以て海内を驚かさずむば、一生鬼柳關に入らず」の豪語を投擲した所である。それから水澤、前澤を経て中尊寺を歴覽し、當夜は一ノ關に泊り、翌日佐世岱太郎を訪問し、又發足して、絶景の松島道に入り、鹿沼、和久津を経て石森に出で、黒沼を通り、登米に至つて宿し、明日舟で北上川を下り、柳津、飯野を経て石巻に入つた。是れは後とで判ることであるが、曩に五郎は白河外れで二人りに別れてから仙道を北下し、賊を待ち受ける時日もあつたので石巻に至り、何かの由縁があつた栗野木工右衛門家に暫く滞在否潜伏と云つた形で、得意の漢學か兵書などを講授してゐる

間、早くも娘を妻に娶つたやうで、直に一女を儲けたのが長じて同藩士藤村源藏の三男で、嘉永四年正月十四日生れの某を養子とした。夫れが明治四十一年三月一日五十八歳で死去した那珂通世に當るのである。後ち江戸の同志、舊友にも徹頭徹尾彼れの言行と一致せぬことが分り、非常な誹謗を受けたが、松陰と鼎藏は最後まで信じ、其の非難に與みするのを務めて避けたいやうである。事實五郎の不烈、劣等の行動は爾後だん／＼瞭かなるに反し、松陰と宮部はそれとは全く反對に、自ら悲壯な殉國的運動に身を挺して往くのである。思へば奇しき關係であり、否先天的人格の相違でなからうか。

十七日二人は石巻を立ち、矢本、小野を経て高城に出で松島に至り、舟で灣を渡つて鹽竈に著宿、明日鹽竈別當鈴木隼人を訪問、導かれて陸奥一宮を參詣し、今町を經、其れより燕澤碑を觀、原町を過ぎて仙臺城下に入り、國分街に宿し、翌日仙臺城や市街の諸所を見物した。且仙臺は既に平戸遊學中に豫想した所であり、其の時大槻磐溪の著なる「獻芹微衷」を讀んで、遙に人と爲りを思慕してゐたから、松陰は直ぐ様彼れを訪問した。遊記を以て代へると「十九日翳、求接養賢堂學頭大槻格次、々々使塾生森本友彌來」云々と見られる。但し前項では「堂、文化年間、拔大槻民治爲學頭、増廣其規制」云々とある民治を、後項では格次と記してゐる。傳記に據ると磐溪は號で通稱は平次名は清崇で、民治や格次ではない。勿論之は聞

き違ひか筆誤りで、當時彼れは未だ學頭でなく、文久二年藩の謂はゞ大學養賢堂の教頭と爲つてゐる。何れにしても磐溪の同一人であつた。又小野寺玄迪、國分平三が來會し、酒食を供して大いに談じ、且二人は磐溪以下數人より其の政制や學風及び士氣を聞いた。水戸以來前後四日間で第二位の詳細な視察を費してゐる。二十日森本と金子平作が來訪、尤も以上は上山藩士で仙臺に遊學してゐる者で、午後に森本と仙臺藩人三名を伴れて瑞鳳寺や政宗、忠宗、綱村三廟を詣で、愛宕山に登觀して宿に歸つた。然るに其の次の關係が遊記は意外にも「山本文仲來云、安藝五藏、欲見公二人、來自鹽竈、謬聞二人已發也、未時^{○今ノ午後}發此」と言ふのであつた。尤も松陰と鼎藏は仙臺に四日も滯つたのは、何等か五郎の情報、消息が獲られぬでもない希望があつたので、今文仲より之を聞くに及び、矢張りさうであつたかと頷いたのである。四時頃松陰等は國分と吉岡九左衛門を訪ねてゐた所へ、石川才八郎が亦會して遅くなり、吉岡宅に泊つて了つた。二十一日二人は吉岡家を辭し、桑原隆朝を訪ひ、國分、入江に至り、又大槻、田邊、森本を養賢堂に、山本を醫學館に訪ねて夫々別れを告げ、是の日午後四時頃、仙臺を發足して中田に到宿した。

明日の條が宛ら一片の劇的光景であり、又志士の奇遇的で、彼の五郎と白河先きで永訣した

悲壯の第二回場面に記されてゐる。「廿二日、晴、發驛○中略經増田○名取郡而出大川原、

○柴田郡過刈田宮、○刈田郡宮村道逢彌八、々々斬奸之策定、欲必逢吾輩、以廿日朝發鹽竈、

○中略至仙臺、倍道兼行、日夜不休、追吾輩至福島、行程三十里、意遂不可追及、將復歸仙

臺、至是相逢、無勝拊躍、相伴至白石○同宿焉、○中略彌八白河別後、至湯村、滯數日、至

鹽竈、又滯數日、至石巻、寓栗野木工右衛門家、彌八復姓名曰安藝五藏、又以仙臺自古與

藝不善、至是痛拒藝人、不肯入封内、變鄉貫稱備後人、別後有詩云、浮名恐累百年

身、棄絕文章已幾春、昨夜松洲誤觀月、又呼筆硯作詩人、有歌云、明日茂又櫻翳而遊家

武、今年計農春思波、夜聞五藏策、又爲語其家國近狀、酌酒劇談、快愉甚、とあるので、

五郎は大事決行近くに迫る爲め、今一度松陰と宮部に逢つて永別するべく、二人を求めて鹽竈

(實は石巻であらう)と福島間、夜を日に繼ぎ疾風の如く上下してゐる内、刈田の宮を過ぎた途

で奇蹟的にも邂逅し、彼れは宛ら狂氣せんほど喜んだのは言ふまでもなく、相伴つて白石に至り同宿した。

五郎は二人に逢つた時、何よりも先きに亡兄の遺族を訪問せる實情を聞いて號泣し、感謝したことであらう。東征稿に斯の光景を極めて簡述して「遇諸逢限河上、喜悲交至、爲語其家狀、五藏大喜曰、吾可以死矣」と見られ、五郎は家郷の事まで自分に代はり、二人が態々見

舞つて呉れたのであるから、最う世に心を残すことなく、愈々田鎖左膳を討ち取る、唯だそれだけに奮激し、又泣哭したのであらう。そして三人は最後の訣別を惜しんで離れ難く、以來同宿して痛飲した。

二十三日松陰等は剩す所の米澤に赴かゝとして、白石川に沿うた難道を歩行、小原温泉を過ぎて戸澤に至つた。五郎は此處まで送り、五藏送至戸澤、○今ノ宮城縣磐城國刈田郡小原村大字戸澤、戸澤川流ル、將以明日

永訣遂同宿、夜招淨瑠璃語、使語忠臣藏十二回、相見慷慨、淚數行下、と遊記は當條を終つてをる。實に彼等は情緒纏綿其の限りを竭し、全く一篇の戯曲を實演して居るのと同然であ

つた。更に翌日條を續けると「五藏○決行カ期在近日、是以訣別、殊不勝情、五藏作與森田謙

藏○節、鳥山新三郎、村上寛齋、來原良藏、土屋彌之助、井上壯太郎書託吾二人、又招淨瑠璃

語、使語忠臣庫八回、未後斷然捨五藏而去、とて、遂に戸澤で永訣し、是の夜松陰と宮部は

滑津に至つて泊つた。二十五日其の地を發し關、峠田、湯原を經、奥羽界の嶮なる惡黨合(永

井峠又は屋代峠とも)を越えて新宿に下り、高島、龜岡、河井、花澤關を過ぎ、米澤に入り荒

町に宿を求めた。

二十六日、松陰は高橋玄益を訪問、藩情に就いて種々訊ね、又市廛の模様を見物した。然るに明朝藩主上杉侯が東觀すると云ふので、前日から城下の非常警戒は大騒ぎであつた。二人は

幸ひ其の儀衛振りを觀んと大町に至り、駕籠の立つた後に彼等亦米澤を發し、舟坂を越え關に至り、松坂、奈古坂を経て綱木に至り、奥羽界の檜原嶺を突破して、再び會津に入り、大鹽に到宿、二十八日熊倉、鹽川を経て若松に至り、直ちに井深、志賀、黒河内、高津を訪ね、且志賀宅では嘗て訪問せる一ノ關藩士佐世俗太郎と逢つた。此の夜は七日町に泊り、明日立ち、高津に詣つて別れを述べ、夫れより飯寺、本郷、關山を經、火玉嶺を越え、大内に出で、倉谷、檜原、長野を経て田島に到泊、此の日の行程實に十一里。翌晦日發し川島、糸澤を経て、愈々奥野國境を爲す山王峠を越し、即て下野高原に至つて宿した。

四月朔日、藤原、大原、高德、大瓜を經、今市に出で、日光街道に由りて二荒山内の徳川墓宇を瞥見し、其の造築の宏壯、彫刻の巧美に對し、支那阿房宮との皮肉な比喻を投じて去り、疲勞の爲めか、中禪寺湖に登らず、是の夜鉢石町に草鞋を脱いた。遊記には見えぬが彼れ徳川の廟に至つた時の即興か、無題の長詩を賦して「江海汲浪漫浩淼、遊歷周歲事何了、一朝失策索然還、知己天涯夢空遠、君亦遠遊不能久、○上ノ二句、五郎ニ係ルベシ、堂上劉老勞心悄、憶得晃山百聲鵲、果爲吾輩ト歸兆、嗚呼人間得失何須問、男子須要卓立塵俗表、○吉田家藏、今や將に江戸に還らんとする切情を悶發してをる。二日早朝今市に返し、直行して徳川が祖廟參拜の爲め、巨大な土木費を要した所謂例幣使街道に出で、足利に至り足利學校を觀て、文狹、鹿沼、奈佐原、

楡木、金崎、合戰場、壬生を過ぎて栃木に到宿。明日富田、茂呂、犬伏、天明を經、足利に至つて泊つた。

四日前夜の地を發足、十年寺、猿田、荒を過ぎ、上州館林に至り、三科文次郎を訪ねんとしたが、城内に住居するので、藩法は旅者を許さずと云はれ、態夫を立てたが不在の爲め斷念して去つた、それから板倉に至り、右折して便道を取り、舟で小川を越し高島天神社傍を過ぎ、遂に刀根川の堤塘に出で、川に沿うて下り泉に至つた。此の時丁度一舟が人を乗せて下るのがあつたので、松陰等は呼び留めて搭じ、數里下ると、右岸は奥州街道の要所として有名な栗橋(關)に上陸して憩ひ、再び舟に反へし、又下つて途中より右に分岐した一川(今の江戸川であらう)に舟は入つて下り、關宿に著いたので、二人は上陸し夕食を喫したが、日は早くも暮れてゐた。晝間宮部が五七言の絶句を各一首作し、松陰に示したので、彼れ亦即興的に其の韻に和し「遊歷幾年渾是客、晚花新葉子將還、檜山白水且休說、不耐憂思塞胸間」と「積雪又殘花、與君徒然還、獨羨吾盧子、已在英雄間、○東北遊日記、四月四日條所見」と賦した。但し宮部の前述二詩は、彼れの日記が闕けてをる爲め、惜しいかな見られぬ。併しながら後者の檜山白水とは、去る正月白水關下風蕭々なる詩別の悲壯を稱し、檜山とは彼れの郷藩主南部氏の義臣相馬大作の要據せし矢立峠の別意に係けたのでなければ、會津の嶺名などに假借したのであらう。特に

後者の五絶は既に江幡の英雄的達志を確信して羨望するのに反し、今の自分は亡命の旅から、密かに江戸に歸る不勇を恥ぢた對照を責感してをり、即ち起承句の積雪云々は自己の現實が五郎に最初言明した武士的行動とは大いに異つた境遇に墜つたのを自ら知り、將に江戸に入る一步前、舟中で之を賦したのは、彼れ尙之に撞著して自ら責めてゐたと思ふに差向へなからう。畢竟松陰の亡命動機は右の二詩に據つても充分に語つてをり、則ち犯律是一片武士の潔き約束履行の爲めで、延いては之が應援實行の結果は、當時の社會に太だ大きな影響を與へ得ると信じてゐたのに、前後些しも不一致と訂正を見出されぬのに想到すべきであらう。然るに拘はらず何故彼れのさうした分り切つた原因、終了に就いて、深く考察を要し、殊更に批判を長めたかは、著者自らも不思議に感ずると同時に、或は意義少ない徒勞の研究でなかつたかに、動々もすれば茫然たる事があつた。けれども假令その亡命理由は至極簡單に結論を得られるとはいへ、依然松陰の最初の目的であつた東北遊歴は、五郎との關係罪に因つて微しも蹉跌もなければ支障もなく完全に達成し、其れより獲た大なる經驗は却つて將來の殉國的精神の根本を創つたと見定むるに、最早躊躇の要がないのである。後ち彼れが自稱するに至つた猛士の號案こそ、蓋し東北亡命旅行を代辯するものであるから、斯の問題と原因の解決は單純でも、其の内容は決して淺薄でなく、猶深く考察すべきものが多大に潛有してゐるのは言ふまでもない。

さて關宿で日は既に歿したが、又一舟に乘じ流に順うて十三里下つた。夜の河風殊に鋭く、積雪殘花の自責に懊惱する松陰は、舟中に睡眠し或は覺めて、五日午前十時頃、江戸川の橋下に達した。兎も角二人は鳥山新三郎宅に至り、彼れを首め土屋兄弟以下を吃驚させ、且失走後の事共を語り、盡くるを知らなかつたのは無理もない。夜になつて鼎藏は公然熊本藩邸に歸つたが、松陰は其の儘殘つた。實に斯の旅行に百三十八日を費し、陸水海の行程合計約六百七十餘里に及び、經る所亦關東、奥越佐、二野八州數百町村部落を算えられ、全く驚くべき根氣であつた。序でに遊記當日最終條を前出の詩末から繼收すると「又乘一舟順流而下、直達江戶々々橋下、關宿至此十三里、風力甚勁、且睡且醒、以五日巳時達焉、乃抵桶町、投鳥山家、土屋兄弟、及越後三條一向僧北條秀英寓于此、相共劇談、至夜宮部歸邸、○龍口ニアル熊本藩屋敷、余猶止焉、○遊記ノ本日條ハ以上ニテ終リ、下文ハ歸江後ノ事ニ就キテノ論述ナリ、斯くの如く亡命旅行の本文は終結してをる。

松陰の東北旅行の詳細は該の日記に全看されるが、若し手紙を以て之を代へる時は、出立の際、永井政介以下に紹介狀を與へられた齋藤新太郎に、本年九月四日遣つた謝狀であらう。次に之を掲出すると、

九月四日 ○嘉永五年、但シ睡餘事録ニ據レバ「九月朔日、周田 吉田矩方、再拜白ニ齋藤新太郎足下、不レ遠ニ千里、而來ニ僻陋之境、○當時松陰松本村ニ屏居シ、循々誨人不レ倦不レ難、雖ニ孔席不レ煖、墨突不レ黔、其意何以異

哉、感謝々々、僕歸國百餘日矣、以客冬^{○先年十二月十五日}、逃亡之故、屏居待罪、不敢與人通問、但尙友千古、歷覽萬國於黃卷經帙之間耳、昨忽得井上壯太郎書、發而視之、則所賜高作一章、反覆吟詠、懇乎如愛其狂、懇乎如厲其情、於是赧然愧羞曰、甚矣、我之負吾新太氏乎、僕在江戶、數辱足下之下交、而其遊東北、又辱卜所在名士、附書託之、二者未謝、而又辱賜高章、噫、僕何以謝之、在江戶者暫舍焉、請概舉東北遊以謝之、僕渡刀水^{○利根}、越筑山^{○筑波}、至水府、先訪永井政介、政介父子^{○芳之助}、皆奇士、因得遍見會澤^{○會澤藏}、豐田^{○豐田桑原}、諸士、志同而才各有所長、道通而學各有所造、思明主造士之盛、與奸入蔽賢之甚、爲之感憤、直有淚不能墮、心不能衰之嘆、而見滯其沈沈、而益養其志、益喜其才、又喜其所得更多、爲遊之快、最爲最矣、手綱則阿久津彦五郎、雖不三全雅、亦不三全俗、且有喜交遊之意、越勿越關、而訪白河三田六、六者魯鈍耳、不然吾之不知人乎、時正正月下旬、初逢雪焉、加快一等、^{○既收文下日記}到會津、井深藏人既死、其子弟松某、孫茂松トアリ、亦善周旋、而藩素不乏文武士、則甚寂寞、去奧至越、三十之程、數丈之雪、快之又快、新潟則日野三九郎、不設城府、不輝彩幸、奇矣奇矣、轉航佐渡、佐渡島嶼、而相川一村落耳、亦何觀哉、但沮風延留、乃觀北海之怒浪、三十日矣、而始得還新潟、新潟、相川爲薩肝付所壓倒、妙々、沿海入羽而跋沙漠、出窪田、^{○今、澁江內膳以藩制辭不遇、殺風景矣、越旋關入津輕、轉至小泊、睨松前一箱館、過龜飛、平館、秋田、}至青森、遂不航松前、恐不免胎足下與肝付之笑、而猶蹈南部荒曠之野也、觀松島、鹽竈、仙臺、米澤、二荒野、足利野^{○上}之槩也、爲日一百二十、爲程四百五十、而背負一領甲、^{○コ、ニ云フハ、按フ}米澤、二荒野、足利野^{○上}之槩也、爲日一百二十、爲程四百五十、而背負一領甲、^{○コ、ニ云フハ、按フ}

陰江戸遊學ニ用意セシ諸品ノ「辛亥仲春衣服其外用具附立」ノ目錄及ビ腰三尺劍、僕之遊如是而已矣、雖不能平常ノ狀態等ヨリ考察シテ、防塞ノ笠帽類ヲ誇張シテ記シ、ナラン、^{○如足下之遊、雪也浪也沙也野也、亦足以張氣膽而長才識矣、而非有足下之附書、安能如是乎哉、僕賦稟躁浮、未嘗覃思研精於書籍、屏居父ノ許、以來、無一事到身、無一念介胸、埋頭爲蠹魚、專心力于此時、省其內、竊自喜長才識張氣膽、不特向之東北遊時而已也、^{○當時松陰自筆、携帶ノ日他人（門弟ニ似タリ）ニ之ヲ清書セシメ、又之ヲ訂正、加筆シタル今萩松陰神社々藏、記ヲ更ニ増補、推敲シテノ他筆本ハ、コノ屏居中ニ整理サレタルガ如シ、ソノ間ノ讀書ハ、睡餘事録ニ詳見ス、人皆曰、博學而後遠遊、僕則遠遊而後博學、逆行順絕、孰得孰失未可知也、僕之罪、公裁雖未定、不[○]得放逐山野、則禁錮終身耳、要之自今至死之日、當得如屏居以來然、果然也、未死一日則長一日之才識、長一日之氣膽、未死十年則長十年才識、長三十年之氣膽、比之專也浪也沙也野也、快何如哉、養狂策情、足下之所[○]以懇懇、懇懇者、慎藏諸胸臆矣、若夫干城云爾、則僕之才識、氣膽未足當焉、然僕生長防之士、食長防之食、衣長防之衣、遊當爲長防之用而已矣、無事則草茅、危言以死、有事則馬革裹屍以死、放逐亦然、是則矩方已、抑快之最不能志爲者、獨水府諸士、而政介之子芳介與僕年齒相如、而志氣精銳甚可畏、常勸僕以擊劍、且屢舉足下之名稱之、足下歸都之日、若芳介往從、幸願語僕所爲、快欲言者、尙多筆不能盡意、且留在後日、時維秋冷、境異則水土從異、萬不[○]適意、伏惟眠食自愛、}}

辱知生

吉田大次郎矩方

再拜

○年月日、宛名關クモ、^{○幕末偉人齋藤}、^{○是レヨリ先年某月松陰ノ與、劍客齋藤新太郎、書（未焚稿所收）}、^{○彌九郎所收、}及ビ本年閏二月十五日松陰ノ父、叔、兄ニ贈レル狀ト合見、

(八) 自首、歸國、屏居待罪、裁決 (用猛第一回舉)

宮部が龍口藩邸に還つた所、曩に彼れが新潟か藤塚より送つた梅太郎宛の手紙は幸ひにして七日に達した。然し其の文は今未發であるが、鼎藏は八日に返事を出してをる。即ち、

閏月十八日御日附之御手簡、當月七日相達、雖有奉_レ拜讀_二候、先々暖氣相慕申候砌_二御座候處、増御勇健_二被_レ爲_レ成_二御座、珍重之御儀奉_二拜賀_二候、兼而吉田大次郎様御様子は拜承仕居申候得共、當時は寸牘を以奉_レ窺_二御起居_二不_レ申、重疊御無禮を申上候内、却而芳翰御惠投、殊_二御腆厚之御書中、千萬忝奉_レ存候内、恐怖不_レ少奉_二存上_二候、何卒此段者御宥恕被_二成下_二候様奉_二拜希_二候、誠_二以大次郎様には去夏已來、懇遇被_二成下_二、無_二御腹臆_二御切琢被_二仰付_二候處、舊臘よりは奥羽方御同行申上候内は、別而御深切_二種々被_レ附_二御心、御厄害_二罷成、申候事御座候、去ル五日御供仕り、歸府仕候間、先々尊意易被_二思召上_二、可_レ被_レ下_レ奉_レ存候、擬_レ御關券之儀_二付、當方御發途之砌、夫々御手數も不_レ被_レ爲_二濟_二し御遊行なされ候_二付、縷々被_二仰下_二候趣、逐一奉_二敬承_二候、右之儀は必竟私忤_レ被_レ對、御許諾之違變も被_レ成さき所より嚴法を御破_二相成候段、被_二殘置_二候御書中にも有_レ之候由、右之通_二御座候得ば、於_二私共_二も重疊不行届之次第、多謝難_レ奉_二陳謝_二、恐怖此事奉_二存候、御發途之節之事_二付而は、些入組候儀も御座候得共、今更梨々申上がたく御座候、私忤も其節ハ水府ニおゐて奉_二追付_二候得共、最早一旦御禁を被_レ破候御事_二御座候間、彼地より直_二御引返し被_レ成候も、奥羽方御宿志之御遊歷被_レ爲_二濟_二の上ニ而御歸邸_二相成候ても、

矢張五十歩百歩之御事_二可_レ有_二御座哉と、乍_二不束奉_二拜察_二候間、終_二直様東北御同行仕候事_二御座候、併是迄日數相懸り候内御亡命之姿_二相成候_二付而は、嗚々何角免被_レ爲_二成_二御案旁_二候と重疊奉_二恐入_二候、然處今般歸府之上、尊邸御朋友之御方より段々御談論御座候由之處、大次郎様ニも不日_二御歸邸被_レ成候御決定有_レ之候、巨細之儀は此節井上壯太郎君御歸國_二付、御聞取被_レ爲_二成候ハハ分明可_レ爲_二御座_二と乍_二憚奉_レ存候、勿論私儀も尊翰之趣、至極御尤之御儀と奉_レ存、且又前に申上候通、萬事無_二御腹臆_二御交申上候事_二御座候間、不束之私_二は御座候、萬一心付キ申候事も有_レ之候ハハ、吐_二露肺肝_二、御取捨を願申候所存御座候得共、右之始末_二付、及_二此儀_二不_レ申候、何様不_レ遠内御事落著可_レ仕、乍_二憚左様得_二思召上_二仕候、先は右御答申上度、艸々如此_二御座候、恐惶謹言、

(嘉永五年)
四月九日

杉梅太郎様
常吉藏

宮部鼎藏
増 實 (花押)

尙々乍_二憚時下御自愛御專要奉_二萬祈_二候、大次郎様之御書_〇コノ狀今見エズ、は早速拜呈仕申候、左様被_二思上_二可_レ被_レ下候、以上、_〇萩市池内常吉藏、

かういふ全文で、實に之は彼れの友人として、又同行の義務者として、情義を盡した答へである。宮部は固より東北旅行許可の願は無論、過書の交附も受けて出發したのであらうから、江戸に歸ると一層名聲が増したのに比べると、松陰は恰も日陰者の浪人同様であつた。

既に彼れは自ら處する所があり、今後十年間學を勵み、時を得て歸藩しやうと心に期した。

然るに六日玉木の同門下山縣半藏や井上壯太郎の二三人が鳥山宅に往來し、大いに斡旋して江戸上司の諒解を求め、彼れの歸邸を勸告し、宮部も彼れと同行した責任や、彼れの父兄に報じた義理もあるので、切に之を慫慂した。松陰が東北遊日記の附論とも跋とも認め得べき、即ち曩の夜、宮部が歸邸し、松陰は鳥山宅に居泊つた條の次に「將有所處、次日藩人來、懇勸歸邸、余以前日之言、與前日之志拒之、○上ノ意ハ十年間ノ修業ヲ終リ、歸藩、報效ヲ誓フ、藩人云、子之亡、官不○蓋シ鼎藏以爲ク、五郎ト自分ニ關聯セシ責任アルベシ、甚答、蓋以子初得遊歷之許也、然子之得許、以十月爲限、過限則罪不可測、及限而還、則官或不深罪、今急還邸服其罪、然後再申素願、徐贖其罪亦未晚也、且子非負國家○國家ハ藩ニ係リ、松陰ノ身分、未タ要士ニ伍ス者ニアラザレバナリ、一者、十年之後歸國、則其學雖已成、身已無所容、不如急還爲容身之地、然後出成其學也、宮部亦以余亡、謂爲已故、○蓋シ鼎藏以爲ク、五郎ト自分ニ關聯セシ責任アルベシ、欲必還之邸、以塞其責、論之甚力、於是歸計決矣、以十日入邸、○蓋シ鼎藏以爲ク、五郎ト自分ニ關聯セシ責任アルベシ、とて、十日先づ櫻田に還り、亡命の罪を待つこととした、此の五日より十日までの間、山縣自身の「敬字目錄」から、關係を抄録して見ると「五日、宮部鼎藏○松陰モ共ニス、奥羽遊歷方歸る、猪牙○松陰ノ亦然、鼎藏歸子肥邸、○龍ノ猪牙寓鳥山邸、○新三者之家、鼎事宜顯猪牙事、秘而未發、云猶在水府、初午後自土屋生、致書於余同舍井壯○井上壯太郎之處、壯偶不居焉、及暮而歸、而門禁甚嚴、不可

復出、乃將待明早而到其寓宿、○中略六日、味爽壯○井上到鳥者之家、到則猪○松陰頭而寐、猪乃起、竊告壯以共由、且云○蓋シ鼎藏以爲ク、五郎ト自分ニ關聯セシ責任アルベシ、歸、邸内壯士之輩強焉云、午後余與壯亦到焉、見猪、々面依然、歡○入入夜、話談及五更而歸、○櫻田邸、八日亦到宅、○鳥山焉、九日同斷、約以明晝歸邸、云々、十日、井壯今早發邸歸國、送子門前、午後猪子歸邸、伴言今日初到府下、因直歸邸、蓋以秒五日來寓于府下者耳、將夜有命、云、與余同移于侍儒舍之隣舍、乃移焉矣、○毛利元道藏此くの如き情況で、彼れの救解には半藏以下が最も奔走したのである。

其の日午前、丁度松陰門下の右に見る井上壯太郎が歸國の途に就いたのである。彼れは一昨年九月酒狂の行爲があり、お咎めを蒙つたけれど、將來あるものとして、去年三月松陰等と共に江戸に上り勉學中であつたが、其の業未だ就らざるに松陰の亡命幫助に連座して、今日歸國を命ぜられ二十六日逼塞の身となつた。尤も壯太郎に限らず、其の首領株たりし來原良藏に次いで小倉健作、宍道恒太も亦之に連座し、何れも同様な逼塞の處分を受けてをる。但し壯太郎の首尾は前後共大した事でないが、後者は尠くとも自分の爲めに構成されたのであるから、松陰の氣持では當ならざる感であつたに違ひなからう。従つて彼等と異り松陰の方は藩規から觀て、決して輕からざるものでなかつた。然し今日の二人は其の大小があつても、不遇同士に

は相違ない。前引の日記末文を續けると、既にして「井上壯太郎以是日發歸國、乃走筆作序曰、井上壯太郎曾以血氣犯科稷罪、慷慨愧赧、不能自堪、將屠而死、會官裁有望外之思、於是感奮負笈東遊江戸、折節讀書、將大有爲焉、今茲四月有故、學未就而歸、來告吾曰、吾之歸實無面目以見父兄、雖然事亦不可已、爲之如何、余乃惘然曰、吾子實無面目以見父兄矣、○松陰自分ヲ引例ス而吾則有更甚焉者、吾向執匹夫之諒、爲唐突之舉、上犯邦典○藩法之重、下貽父母之憂、其罪固天地所不容、然自誓以謂、前罪已不可追、但有盡一身之力、繼之以死、勉立後効、以贖之耳、苟能卓然自立、不顧（鑄、流俗）俗流、直以古之大丈夫爲師、毀譽利害、毫不足以動吾心、則可庶幾也、吾子向已不辭其死、則於吾言、固將有所豁然、古曰、同病相憐、吾子之病、吾固憐之、而吾之病、吾子幸勿契、他日子歸于山陽之陬、時々出此文誦之、其必有憶于東海之濱、斯く彼れの更生を激勵し、同時に自己の東北歸りの感想とを結んでをる。又彼れに誨へたのに注目すべきは、今自分が亡命罪に問はれやうとする際、曩の東北亡命は「匹夫の諒」に過ぎなかつたを自白すとも、其の失敗や毀譽褒貶や利害の如き俗流を顧みず、須らく古への大丈夫を以て師と爲し、是の爲めには毫も自分の心を動かすに足らずと、卓然反省して更に感發、再生の覺悟を述べ、自他に教育した事でなからうか。今後に於ける彼れが該の信念を強行する所、則ち用猛の遞加毎に倍々白

發創成の不撓精神を表はし、區々たる消極の窮地を突破し、堂々截り裁いて往く意氣に燃えてゐた。そして如何なる難事の境遇に陥つても、彼れの特異な教育主義を忘れなかつたのに驚くべき忍従を有つてした。例へば杉家屏居待罪及び幽囚中の國史研究と教育、野山獄中の人道教育、松下村塾の殉國的教育、實踐運動に指令せる國家重大への關係等、歴々として擧げられるでないか。「辛亥東武遊學中遷史手抄、班書手抄」と標題紙に書附けた松陰の本に據ると、東北に赴く直前、史記と漢書から抄出した目錄が列擧され、其の次に「以下壬子四月、亡命を戻り候後抄録也、但し江戸邸○櫻田、ニテ、○萩松陰社藏」と註し、次から後漢書、史記などより有名の文を抄出して、自己の心懷を一層勵ましてゐた。

松陰は無論のこと、半藏以下悉くは多分この儘江戸に止められ、遊學を許されることにならうの豫想とは全く反した。明治になつて梅太郎の作した「松陰年譜」の一本に「壬子、四月江戸へ歸り、書ヲ上り、罪ヲ待ツ、○吉田家藏」とある。此れに云ふ上書は、後收の亡命裁決文に引用するので分からう。同人の別本に「最前出足之次弟、尙御國法相立候様身柄御咎被仰付度、云々書面ヲ出ス、道中平鉢ニテ御國被差下、○同藏」是れが江戸邸吏の傳へた審命である。序でに該の一節に足らぬ所を、後の亡命判決文に據つて補述すると、四月十八日松陰を平常著の儘、

(護送駕籠にせず即ち歩行) 中間二人を附添へただけで國元に差下げ、親類の兒玉太兵衛と久保清太郎の二人へ引渡すべきを仰付けた。乃で前收末文を續けると「居數日○十日ヨリ十日マデ、歸國之命下、於是愕然、初覺爲所賣、而今則無可如何、交朋來者、皆憮然相弔、或曰子能途而亡乎、則爲之、謹勿途而屠、余曰、匹夫匹婦、尙能引決、大丈夫誠重死矣、知不能知爲人所賣、至所賣、又求苟免、益見其拙、且吾計數蹶、而志則益壯、志壯則安往而不可成學矣、かく日記の本文は大團圓を告げてをり、全く之には松陰首め友人等が憤慨した。詰り山縣等の奔走、救解は、上司の意中に何等の應へもなく、却つて彼れをして自訴、歸邸を誘導される巧術に陥り、知らず自己の進退を賣る所と爲つた形で、追に用猛の彼れをして一時は驚慟させ、少なからず激怒せしめたが、右日記の謂ふ「吾が計數々蹶きて、志しは則ち益々壯なり」云々の結語に、自ら最後の決を明斷し、鮮しも失望してゐない。

其の日松陰は所謂平體で、何某と組子二名を添へたのみである。半藏の敬字日記に據れば、「十八日吉生、以此日味爽發邸就國、官有命、以竹兜子○氏名ヲ詳ニセズト雖モ、次收ノ檜莊日記ニ見ユル杉原某カ不詳、後考ヲ俟ツ、之罪也、余亦歸舊舍、○毛利元道藏、及組子二人○名ヲ知ラズ、但シ一人ハ又從之、蓋以有犯門禁之罪也、とあるから一行僅に四人であつた。小田村の檜莊日記で此の間を考援するに、「四月十三日晴、發番、世良孫植出足、○大阪ヨリ松陰ト同船スルコト後收ノ狀ニ見ユ、(中略)、午々上邸○櫻田、但シ本書檜ノ題註トハ檜(下)邸ノ稱ニ出ツ、行、瀧野、吉田、

大二郎に相對、吉田氏過ル十日歸寓、○中略、十八日晴、非番、上邸吉田大次郎出足、杉原與又四郎○上ハ杉原某ト又四郎二人ノコトニヤ、出足、○中略、又四郎に金貳步用立、○前後略、東京市榎取三郎藏、以上の通りである。是の日鳥山宅にゐた土屋は、陰ながら品川驛まで見え隠れに送つた。然し道中は案外愉快で、又有益なことのあつたのは、大阪を舟發し、瀬戸内海を航行中、本年春藩主の東觀に従行し、江戸に上つてをる山縣に遣つた手紙に、

○前略、吾樓○五の事は聞えん歟、寬齋上、はいかい、兄の嘆病は療治相成候哉、○下從行者二人○附添ヒノ但シ前引ノ半藏ガ日記ニ據レバ三人皆精ニ研軍書、戰記、又通ニ天下地形、人情、甚爲ニ益友、阪港發舟、同トスベシ、何レカニ錯誤アラシ、舟者、麻布邸に居候膳宰世良孫植、○半藏日記ニ云フ竹兜子カ、否ザレバ小田村ガ日記ノ杉原某ニアテベキカ、猶考ヘヨ、頗通國史、國語、且其人物卓立塵外、不野不怪、眞有爲之人、船中之興不斜、○下略、

○年月日ヲ闕ク、蓋シ松陰ノ大阪船發ノ後ナレバ、ソノ航中ナルベシ、

(山縣) 半藏 足下 ○吉田家版松陰先生遺著所收、

と云ふ、窮屈しない旅行を續けた。

十二日將さに萩に著かうとする前夜、周防山口驛舍から久保清太郎に發したのに據ると、不忠不孝之重罪人、無恙今日歸著仕候、親類兒玉衛、○太兵衛、久保、○清太郎、實ハッノ父五郎左衛門ノ家ニテ、授ヲ營ム清、○先キニ新道玉木ノ松下村塾名ヲ襲ギ、水口ノ宅、歟へ著けと、江戸御留守方より相授申候間、貴家御差間も無御座候ハ、御厄介罷成奉存候、

尤重罪人故、平人の御引受にては迷惑仕候間、其段御含被_レ下候、頓首、

(嘉永五年五月)

十二日、實は十一日夜、山口驛舎にて認、

(吉田)

大次郎

(久保)
清太郎様 (吉田庫三編)

一先づ松本村字清水口に居住する彼れの父五郎左衛門が隠居宅に入つたが、數日目に(吉田家藏の山鹿氏墓碑文の松陰奥書では、今月十八日右の外叔が經營せる松下村塾の北窓下で、彼れは之を寫録してをるから其の後であらう)松陰の伯母某が嫁ぎ先で、やはり同地に住む高洲(又左衛門)家に一時假寓してゐた父百合之助の許に徙され、爰に屏居、謹慎して待罪することなつた。

彼れが歸國した日、梅太郎は一弟を獲た喜びの禮狀を、半藏に贈つて、

三月廿九日、四月二日兩度之芳翰_{○以上}追々相達奉_{○以上}捧讀_{○以上}候、殿様慶親_{○以上}御機嫌克被_{○以上}遊_{○以上}御座、恐悅至極奉_{○以上}存候、將又貴兄様殊以御壯健被_{○以上}成_{○以上}御勤學_{○以上}候由奉_{○以上}持賀_{○以上}候、二ニ私も都合無異消日仕候間、乍憚御放懷奉_{○以上}祈候、又大次郎儀被_{○以上}爲_{○以上}縣_{○以上}御念_{○以上}毎々御懇切被_{○以上}御遣_{○以上}奉_{○以上}感謝_{○以上}候、且又同人此度歸邸一件ニ付而は、不_{○以上}容易_{○以上}御配慮被_{○以上}仰付_{○以上}被_{○以上}遣候由、誠以難_{○以上}有仕合奉_{○以上}存候、歸邸後も引續キ御厄害_{○以上}被_{○以上}仰付_{○以上}候由、何分度々御禮之中上切ラレルデハナイズ、偏ニ貴兄様井上_{○以上}郎_{○以上}金山_{○以上}近藤_{○以上}君之御丑裁を以、再

び一弟を得候後は、何共心中之欣喜、禿筆之盡すべきニ無_{○以上}御座候間、萬々御推察被_{○以上}成遣候様奉_{○以上}希上_{○以上}

候、父共、其外_{○以上}高洲_{○以上}見玉_{○以上}、も同様御禮申上候様申事ニ御座候、先は一應之御禮旁、草々申上縮候、

○下略、東京市久原房之助藏

これは讀む者をして、彼等の兄弟愛が如何に言ひ盡されてゐるか、そして其の情節が亦甚だ深かつたのは、既に東北旅行に出發する前後と、後ち江戸傳馬獄に斬首されるまで、終始同じであつたのに察せられよう。

父の許に屏居、待罪したのは約七箇月であるが、其の間先づ東北遊日記の整稿を完成し、特に史學と海外事情の研究や其の實踐運動と教育方針に就き、自ら一大轉換期を得た驚異すべきものがある。此の前後の詳細は「壬子歸國後睡餘事録」や、同じく讀書と抄出の目錄乃至往復の書翰で知られる。

愈々是れからの彼れは心の轉機的努力を要して國體と國史研究に入る前、常に無用視して來た詩歌(俳諧も然り)、茶華棋碁、印刻、謠曲の内、特に水戸齊昭の茶道觀に屈服するに至つて訂正し、既に亦義公以來彼れに及ぶ水戸學風に一しほ畏敬したのである。嘗て同元年十月、周防三田尻に於て岸彌平次が手録した「水戸景山_{○以上}齊_{○以上}公文茶說、茶對、戒_{○以上}太田秀實、偕樂園記、醫弊說_{○以上}略_{○以上}」を、後ち土屋が該の文を採つて「呈_{○以上}吉田君、君讀_{○以上}之、當_{○以上}有_{○以上}所_{○以上}感、肅海拜_{○以上}」

とあるやうに岸の寫文を贈つたのを、松陰が「嘉永五年壬子五月十七日、寫清水口寓舍、○後松陰漫錄所收」とて又寫し、茶道に對する箴を自ら味つてをる。即ち『茶對、嘉永五年、或問、子學』

茶法二乎、吾對曰、未也、嘗聞之、其味也苦而甘、其器也匱而清、其室也樸而閑、其庭也隘而

幽、其文也睦而禮、○明治ニ至リ梅太郎、本文ヲ白抜版刷シタル附註ニ「右亡弟松陰東北遊歷中、所ニ手寫而贈、今依ニ原本ニ禮下脱、數會而不費一句、是爲可憾耳、明治丙申（二十九年）夏、學問誌」トアリ、前ノ

松陰ノ手寫年ト異ル、蓋シ後者ヲ誤リトスベシ、能樂而不奢、如此而已矣、其反之者、吾所不知也、景山、矩方云、簡

潔高古、至矣盡矣、故錄呈、○コノ時梅太郎、贈リシナリ、來原、壯太、○井上壯太郎、坪井竹槌、皆英氣勃々の様子ニ

候得共、僕ハ右ニ申通閉戸○屏居待罪、先生故、右ノ奴原ハ隔世人ノ如シ、○萩市三輪、休雪藏、と彼れは來原

から嘗て齊昭が之に偶意せる一讀、幽勁の感を生ずるが如き諭しの含むあるに遇ひ、一層奮起を促されたのであらう。

さて彼れの學問性に一大革命を與へたのは、睡餘事錄に「嘉永壬子五月十二日、歸國、爾後屏息、縮首於一室中、以待斧鉞之誅、晝則懼暑、夜則憎蚊、惟睡是愛、然進不能爲將、相于一時、退尙友聖賢于千古、平日之志也、是以愛睡之餘、亦未敢廢素志也、身生皇國、而不知皇國之爲皇國、何以立于天地、故先讀日本書紀三十卷、繼之以續日本紀四十卷、其間有古昔懾服四夷之術、可法于後世者、必抄出錄之、名爲皇國雄略、○下略、萩松陰社藏、云々と前提して、貪る如く國史、國典を讀み出し、且感じた處はどしどし抄録した。元來松陰が皇國學に目

覺めたのは平戸遊學より見られ、次は江戸に上つて猶之を意識し、既に東北旅行より歸れば、歴史と文章を一ヶ月おきに勉強する豫定を立て、師でもあり叔父でもある文之進に報じたことがある。それで水戸に入るや、實地に其の切望と同時に國史、地誌編纂の何ものなるかをも目のあたりに見て、自ら之に暗きを覺つたのは言ふに及ばず、苟しくも國事に投ぜんとするものゝ大なる恥辱であると痛感した。實際彼れは是れまで何處の家にも堆高くありふれた經史や兵書、幼稚な海外の翻譯本を讀んだ外、國史や國文など其の實心を入れて見なかつたのである。

例へば彼れが曩に水戸に至つた時、大日本史編纂に膺つてゐた豊田を度々訪問して聽いた事を日記の外に携帶した「雜錄」に「讀國史法、豊田所說、以故事爲經、以國造本記爲世家、徵之以職日本記、○吉田家藏、」と筆録した。然し故は古、記は紀、職は續の夫々誤りで、三書の一字が何れも誤つてをる。但し之は彦次郎を訪問した時、彼れの語る所を書取つたと思はれるが、松陰の國史に對する程度は全く未知の世界であつたのを自證してゐる。夫ればかりか本年歸國し屏居、待罪するに至つても、書紀を書記、三代實錄の代を朝と誤記したのが壬子五月歸國後讀書目錄（原本無題）や睡餘事錄にも見られる如き、彼れほどの熱誠な尊皇家に、奇なる感を投ぜざるを得ない。されば夙に之が缺陷を悟り、殊に會澤と豊田乃至は宮本尙一郎を訪談するに至つて強く示唆され、東北より歸るや待罪の屏居時日を幸ひに利用し、猛烈に勉

強し出したわけである。先づ彼れの壬子讀書目錄（假名）五月二十六日條に據れば、日本書記三十卷を抄出した後に「余向跋涉奥越、察臘夷出沒之情狀、扼腕切齒者、蓋數焉、歸家焉、屏處一室、時取此書而讀之、觀古聖天子之雄略、有所深感矣、因摘其勦撫之術、可行于今者錄之、以置座右云、嘉永壬子五月念六、書于清水寓舍、吉田大二郎矩方識、」斯くの如くして、始めて爰に我が歷世天子の氣宇壯大にして、確乎不動なる聖績を目のあたり知らされ、自ら多大なる衝動に感激した。換言すると彼れは書紀を閱讀するに至つて、眠りを喚び覺められた如き警告と暗示を與へられたのである。瞬間に歷聖の雄略に感激、感泣し、斯の讀破の裡に、要文を抄録して、縦ひ體系が一貫を成さざるとも、將來自己の國史研究の資料に用ゐんが爲めを志し、以後該の讀了を俟つて盛んに拔書きしたのに對し、前意を採つて本輯に「皇國雄略」と號づけたと思ふ。是れは先きに引例した睡餘事錄の自序的首條に云ふ書名の所以と相應じてゐるでないか。猶之が内容と關係あるものに就いては、孰れ後で述べよう。

乃で同月二十八日より續日本紀四十卷を讀み、且抄出を了つたのが翌六月九日、又同月十七日に日本逸史四十卷を抄出し始め、翌月五日之を終つてゐる。其の抄後に「壬子七月五日午夜抄畢、時蚊群爲屯、從揮從來、而孤燈獨坐、眼如魚、掩卷稱快矣、○同」の苦心と努力の繼續であつた。續日本後紀二十卷は七月十二日より著手、二十二日に同じく終り、文德實錄十卷

は二十八日に了つてゐるが、外に延喜式、類聚國史、菅家文章を參考した。八月三日三代實錄五十卷を抄終したけれど、其の條末に「嗚呼桓武崩、而天覆不遍、田村將軍薨、而地載有闕吾復何觀乎、未畢六國史、長嘆而掩卷」と誌してをる。彼れは國史に據つて漸次皇朝の眞姿を瞭かに識る毎に、大息しては浩漭な其の一卷を掩ふのである。夫れから職官志六冊に掛り、同月十一日始めて、十九日に終つた。更に同月二十一日よりは令義解十冊に著手、二十九（晦）日に亦抄了した。但し本書目錄の卷頭に見ると、なほ古事記と日本後紀を擧げてゐるに拘はらず、本文に該の讀抄を逸してをる。或は二書が手元に無かつた爲めであらうか。

然るに此の外同年の別本讀書目錄に據ると、七月初めより支那の史記、十八史略、漢書、其の他數本よりも抄出した。尤も之は江戸で著手したのを、復た繼續したのであり、更に此の事が九月十七日夜に畢つた。そして次に「古人重史配經論、經不得史、無以證其褒貶、史不得經、無以酌其輕重、○秋松陰神社藏」かう書いて、古人の言つた史學と經學を分隔するとも一致しなければならぬを主張した。是れは彼れの師佐久間象山も同一の見解で、縦しむば西洋砲術を學ぶ爲めに入門する學生に對しても必ず經學をさせ、若し經學の爲めに入門する場合とて、必ず砲術を兼ねて教授した。

竜大に及、和漢讀書と鈔錄の仕事は、十一月半頃までに大略済ませたのである。其の最後に

「嘉永壬子十一月十一日卒業、是日寒風栗烈、雪華繽紛、松陰蓬頭子、吉田大次郎藤矩方識、」
 と告げてをるが、然し別本の目録末尾○原題「辛亥日」で云ふと、其の抄出を終つたのは「壬子十一月十四日抄、蓬頭子吉田大次郎識、○萩松陰神社藏」と書附けたので分かる。是れより先彼れの舊鈔に收むる名物未知録の内に「壬子九月七日、蓬髮生誌」と見え、又前記目録の九月十一日條に「蓬頭子曰○中略、壬子晚秋仲一」とある。されば彼れは屏居以來、其の先天的殉國教育の旗幟を山陽の僻陲より擧げる前、全力を傾注して國史の讀破と其の抄録に従事したから、結髮する迄もなく、身を窶して日夜之に専念した爲め、先づ初め自己の現況から思浮んで蓬髮生と號するに至つたのであらう。但し其の日を明示してないが、若し七日だとすれば該記事より思ふと格別の動機を得られぬ。舊鈔の右條は「一日、好晴、曝背讀書、適久保清太來、乃亂抽座右書冊、得駿臺雜話、相與對談、因相言曰、書爲學之根、觀古人所讀之書、亦可概見其學矣、○中略因作一薄置几上、隨讀以錄其引用書目云、○下略、萩同社藏」の下に、右の壬子九月七日云々が記してあり、且本書全五冊は同月二十日に讀抄してをる。然し蓬髮生を蓬頭子（後ち子を生とも）と訂した初見は同月十一日である。但し之は境遇上から命づけた一時的の戲號に過ぎぬが、更に爰に注目すべきは郷土擁護、郷土文化の意識に想到し、聽て自己の確乎なる郷土教育より之が國家への實踐運動に出づる大理想の觀念に立脚すべき、號を擇んで立てたことである。其れ

は先きの蓬髮生、蓬頭子なる假りの異號の次に及び、決して見遁すことの出来ぬのは、十一月（八、九月には未見、十月は闕記）十一日以來、該の戲號と併用するに至つた『松陰』の正號である。是れは東北亡命より歸來して、其の罪の自取に因り裁決を待つ、屏居間に於ける彼れの哲學的思索的且信念的心境の轉機と、將來への之が實踐運動に出發とを標示、記念すべき大きな意義を有つべきの考案で、偶然にも一人間の松陰の名をば、幕末維新史上に顯はすに至る、彼れ自らの感得した命名であつたと謂へよう。

但し松陰の號は、後ちの松下村塾記や前後の書信、記稿、詩文に見て、固より松本村を基調とした崇高強烈な郷土意識から創作したのは言ふまでもなく、例へば本は下と同訓のみならず同意に通じ、従つて下は陰と同義であるから、おほらかに「松本村人」と謂ふのであらう。此の反證は後年の自狀末署名に「松本ノ無名氏」、「松下囚奴寅二」、「松本村」などの如きで明かに之を示してをる。且つ例へば本を下としたのは全く替へ字に過ぎなく、下を更に陰と異換したまで、強ち松陰生家の庭前の松に因んだ挾義から採つたのではない。惟ふに松陰の號こそ用猛第一回の信念に因つて、立てた大きな意味の擲得と言つてよからう。斯くして彼れは今後國家の混亂時代に、身を投ずる方針を定める見透しも著いたが、兎に角未だ屏居待罪中であるから、極力皇朝の燦然たる正史、古文、法制等何れも夫れが難訓、難解ものゝ外、難物の漢文

は無論、以上を身の周りに夥しく蒐めて、僅々五六ヶ月あまりに讀破且拔録したのである。其の努力と忍耐は常人の及ぶ所でなく、蓋し貧士と雖も牢乎たる父の屏居室に、蓬髪を紊しつゝ端然としてゐた勇烈さを彷彿として想像されよう。

是れより先本年四月十日、櫻田邸に松陰と入れ違ひに、彼れの友人で又兵學門下の井上壯太郎が亡邸に聯座し、歸國して逼塞を命ぜられたのは既述の筈である。然るに其の後（月日不詳）釋され、九月再び江戸に遊學することゝ爲つた。此れに於てか松陰は國史の讀抄や外他の來訪、講述で全く目まぐるしい勉強の忙劇を極めてゐたに拘はらず、力めて支那古人の勸學、言行、刻苦、精勵條をも抄出し自ら「猛省録」と題してゐた。但し之は其の際の辛亥筆記（實は翌壬子を補足したから前後二年に亘る）に「壬子六月廿四日、猛省録の材料となれる人の事蹟十五條、及韓愈の詩文の語二條、計十七條、壬子九月十七日夜抄畢、○前後略、萩松陰神社藏、」と記して可成り多量の中から更に二十項を整寫し、壯太郎に餞別として贈り、前途を激勵した。該の首文の題下に「松陰蓬頭子輯」とあり、次から序と右に云ふ抄録で、終末にも亦同號を二種并用してをる。併しながら原本は既に失つたのか、今世に残されてをるのは上梓者及び年月日不詳の板本で、該の寫録と思ふのが萩松陰社に藏される。壯太郎に對しては前にも言つたやうに、松陰が東北より江戸に歸つて以來、山縣半藏と共に密接な深交關係があつたばかりでなく、當

時松陰は屏居中の繁忙に、よくも斯くの如き猛省録を亦撰した上に、専ら之が整寫を敢へてして壯太郎に贈つたかの時間と、其の飽かざる不撓の努力に驚くの外はない。全く彼れは自分の戲號的な蓬髪、蓬頭、其の儘の強行勉強に身を窶し、晝夜從事した結果、猛省録なる書名も必然に想出したわけであり、後ち之が志しを擴めた所に、猛士ふ松陰に次ぐ號を發案するに至つたのも、皆東北亡命行の待罪、縲紲の境遇より享受したと言ふに差障りがなからう。

松陰が國史を讀む場合、彼れ特有の研究性と犀利な著眼を必然に試みた。例へば前の八月三日讀抄後の記述である「嗚呼桓武崩じ給ひて、天覆遍からず、」云々は、別本讀書目錄の發明錄篇末にも亦「嗚呼桓武之德、愈大王、」云々なる崩去前の聖德を欽仰してをる。尤も後者は阿保親王を評し奉つたのであるが、十一月十日後松陰が屏居室中、多分は清太郎に其の條の抄文を示し、講評したと思ふ狀に「○前略、勉強して讀みた所が、六國史も卒業したといふも名目のみ、前數卷にて、此時の勢と風○三代實錄ノ貞觀三年正月條、を略知した先は、先づ他書を讀まんと欲す、全體此時代の風、君臣共上飾多く、内實少し、禪位、讓位、尊號、太子冊立、大臣謝表、辭官、奏瑞、賀表、辭賀の類、皆其實情有るべくとは思はれず、田村將軍薨じて臣なし、桓武崩じて君なし、悲哉、草莽の臣終天の憾あり、○松陰先生遺著所收、事錄同年十一月條ニ「十日（中略）三朝（代ノ誤リ）實錄探要入冊卒」ト見エ、コノ前後清太郎、屏居室ニ來リテ聽講シタレ

バ、本書ハソノ際彼レニ此くの如く思ひ様に因つては、恐懼に勝へぬ批評を勇敢に述べたの一致してをる。けど彼れは國史の全章を熟知せず、従つて歴世の天皇御以下親王、王子の御關係と天下統一の原理を見解せず、纔に三代實錄の一項を乗つて、斯くも大膽、早計の咏嘆を投じたのは、國史研究に入りながら、實に幼稚にして、又危險極まる觀方であると謂つてよからう。日本の國體、歷朝に就いて、人間的批評を爲すべきでないのは、皇民としての歴史教育に終始淪らざる定則である。然るに彼れは其の著手勿々遠慮、忌彈なく斯くの如き抄後の感を表してゐる所以は姑らく善惡を措き、兵法家として修業せる者には、さう云ふ態度に知らず出るのが自然であつたらうか。彼れ明年八月十五日家兄に送つた書面中に「○前後 何分天下之大亂近年ニアリ、何事も打捨、大砲小銃ノミ注意、專要ナリ、○長門尊 機堂藏」とは、其の年六月米使ペリーが軍艦を率ゐ、始めて浦賀に來航し、威力なき幕府に通商と開港を迫つた後の非常對策である。彼れは時に臨み一箇の兵學者たる牢見を超越し何ものにも屈せず、又之を顧る餘地のない尊攘の決を執るに應ずる性質であつたから、未だ幼稚の國史觀に直面しても普通には危險思想の人物と見做される損害があつた。固より彼れの國史研究に據つて國體觀は漸次知りうるには違ひなかつたらうが、國體に對する思想や意識を、若し假りに古人に之を索むると、其の傾向は北畠親房と似通うた點が見えるのに氣附くであらう。今親房の國體と國史の兩觀に就いての思想

的批評は略すが、大凡そは神皇正統記を一讀すれば自ら解からう。其の點は彼れの甚だ不利なこと、往々藩の内外から忌避された。例へば「○前後 吉田寅二郎ハ出スギものと謗議喧然、其災將レ不可量矣、○嘉永六年八月八日、松陰ノ家兄ニ贈」や「○同 此節大ニ宦官ノ惡ム所トナリ、邸内○江戸櫻田、麻布ニ入る事も斷レ申候、併先日上書」○松陰ノ用猛第二ニ算フル對米外交策ニ就キ、ソノ年六月上ヲ云フナラン、（マ脱カ）之節勿論、死覺悟なりしニ死も得セズ、爲國ニも得セズ、可レ恥可レ愧、○同年八月晦日同上狀、の行動も亦彼れの先天的一面で、結局彼れは「○前 一筆致ニ啓上ニ候、秋著之節、彌御壯剛爲道御精苦奉賀候、歲月勿々、青柳渡○常陸那珂川」頭之涙も亦已ニ一年半ニ相成申候、僕以ニ昨年五月十二日歸國、爾後屏居待ニ客臘月亡命之罪、四方之故人々音信ヲ絶シ、所ニ與晤言ニ者、但千古萬國人耳、然讀書養志亦非無ニ益ニ矣、○同年七月二十三日、松陰ヨリ永井芳之助ニ與ヘタル狀、（兵庫縣渡邊徳次郎藏）」の期を以て暫く外他と斷ち、國史研究に身を寢したのであるから、聽て其の赴く所、動々もすれば誇張と過激の誤解を受けたのである。然し苟しくも殉國運動者が歴史教育を受けた以上、過去を批評し非難し、其の前者の覆敗を見て、後者への箴と爲さしむるを希求するのであるから、世間一般の街學者流が時世に附合する俗輩と比べるなれば、全く常人でないやうに扱はれた。後ち安政六年五月松陰が結局幕府の令狀で江戸に檻送されるに際り、奮然門人松浦松洞に肖像を畫かしめた自賛にも亦「讀書功なく、朴學三十年、滅賊計を失す、猛氣廿一回、人狂頑と譏り、郷黨衆く

容れず、云々と郷藩にも亦見捨てられたかを號叫して、萩を立つたのが最後である。實に「偉人郷土に容れられず」とは、概ね斯る俗譬の通りで、なからうか。

然し松陰とて一青年學徒の純情さがあつた。今年十一月十日後、追に難澁、尨大な六國史の讀破には精根を盡したと見えて、○前文六國史を讀み、爰に至り、終に退屈して、後讀むことを得ず、此迄も度々退屈すれども勉勵して、大丈夫此位の事が遂られでは、大事業はならんと勉強すれども、夫れ夫れ讀むべきの急務是のみならず、空敷斯様の書に精神を費すこと、無益なりとて打置ぬ」と言つて、次に「貞觀三年正月、○中天皇○桓不御は、御幼沖故歟、○中藤氏專權是等の事に原づく、胸くそわるし、且付内侍奏、不堪慷慨、○中十三日除目、くだくだしく、讀でも覺えられず、且姓族譜、公卿補任を著述、校正する積なれば、此等の處、甚面白けれども、此等の事は不及其儀、只外國に關係することを重に見る積り故、此條等ははね除ける計なり、○中此等の事も類聚國史などの如く書集め置候はゞ、後世君臣上下の遠々敷所へは、攻道具には可成候、○下略、但シ前引中ノ「讀みた所が六國史」云々ハ、本文下略ノ末文ナリ、」など、彼れの國史觀は全く古今の形迹を執へて、内外的に其の効果を發動する準備であつたのである。縦ひ桓武條だけに止つて、田村麿將軍如きを、特に古今稀なる忠臣と稱し、以後の帝紀に比すものなさを思はせたほど國史に暗かつたやうに、無智の危險さに駭かざるを得ない。當時彼れは餘りに俄か勉強してか、

是れより後世の聖績と武將の勳功を知らぬ、輕卒な評を下したと認むるは充分であつても、彼れの國史研究の良心は、其の讀感する毎に國家の現在、將來を憂慮或は亢奮して起ち、自ら曠古に貽す偉大な歴史を創造せうとする強力の欲望に熱したのは慥である。縦し彼れの國史批判には思想的に科學的に未だ不徹底と不明があつても、姑らく同情して恕すべきでなからうか。

右にも言つて通り、類聚國史の如く書き集めて置くのは非常時局に當つた際、論策を立て、國家、藩主などを攻める時、其の正しき出所、典據の用意に過ぎない。此れは國體、國史教育の絶對要望で、古今を通じて何人も否まれぬ條件で、彼れは早くも之が効果に著目したわけである。さうした資料を一括して書名したのが、事録の卷首に前提した「皇國雄略」てふものの、内容であつたに結論されよう。然れば元より系統立つた編纂でないのを想像するに易いが、該の稿が未發の爲め、抄録其の儘であるか、夫れとも多少著作仕掛けたか、或は大略の整理だけであるか、今推定に躊躇するけれど、時日や境遇より見れば恐らく六月より十一月まで、日記や目錄まゝの堆積、保存に過ぎなかつたと思ふ。果して其の實現こそ第三回用猛の下田踏海罪に因つて、翌々年九月江戸から萩野山獄に送致され、十一月「幽囚録」を著はして時務を痛論した出據と竝に附録は、右「皇國雄略」の未定稿なりしを想はすものと、同一の主旨を有つて相通じてをるのに氣附くであらう。

なからうか。

是れに於てか松陰は猶も六月八日八紘通誌三冊を讀了し、七月六日海防彙議を讀み始めた。尤も後者は平戸遊學の時に初見したもので、八月二十日魯西亞本紀上下を中句に讀了、二十八日海外新話を讀み始め、翌日に終つてゐる。以上は孰れも海外の事情と地理を識る、兵學者に取つて大切な新書であつた。嘗て松陰の江戸亡邸の不始末を一身に引受けて呉れた友人來原良藏に與へた彼れの手紙に「古聖、朝廷の官を設け、職を命ずるの概及び慷慨、節義の士の著論する所を窺はんと欲す、傍ら輿地圖誌を閱す、亦萬國の形勢を觀るなり、是れに於て卷を投じて起ち、劍を抜いて跳り、慷慨悲憤、自ら禁ずること能はず、當今の弊、千古萬國未だ曾て有らざる者を歷舉すること若干事に至り、嘗に痛哭、流涕、長大息するのみならず、特に未だ老病、死苦せざるのみ、云々と對外の状態に就いて、激越的に慷慨した如き、皆自己の學問と實行を一致せしめる苦悶であつたのが知られよう。

所で松陰の屏居待罪讀史間、特筆すべき行動を見受けたことである。乃ち前の『蘭夷の我邦に航するや、必ず瓜哇より發す、云々、故に海島新誌を讀む、』に續いて「古今論策、切于時務者多、獨宋人陳同甫論華夷之辨、君父之義、及天下之大計、古今之得失、尤爲痛快、故讀陳龍川文」と本書の序詞は之で終りとした。該の宋人陳の主張は、自國の體、君父の義を論辨

し、天下の大計、古今の得失に及んだ壯意に對して、松陰は自分も亦我が國體と君臣の道を辨へて、特に目前に於ける天下國家の得失を論じ、非政者、不義者への攻め道具と考へたのは言ふまでもない。夫れからが屏居室に來往する者への經書講義や、支那文の會讀、國史の讀抄を六月初旬から十一月二十三日まで、簡略に日記してをり、此の外に彼れの讀抄目錄が二三部あるから、屏居中の詳細は以上の數本で見られる。例へば之に來往した者を挙げへと、松下村塾の創始者で叔父の玉木文之進、實家の兄梅太郎、文之進嫡子玉木彦介、口羽壽次郎、佐々木小次郎、今は村塾名の繼承者外叔久保五郎左衛門と其の嫡清太郎、周田源八、中村百合藏、來原良藏等、孰れも親族と藩校明倫館時代の門弟或は玉木門下の友人でないか。知らず之は屏居待罪中に創立した學術の研究所と教授所であり、否松陰の必然的殉國教育學の一室と見定めてよからう。蓋し彼れのさうした教育の嚆矢、萌芽は歸邸前に鳥山塾で、早くも壯太郎に試みたのに尠くとも發せられたのである。但し前者は松本村字清水口の父が許（實は當時婚族の高洲宅に暫く假寓）の一室に於ける鄉學の一聲であつたと謂へよう。後ち之の關聯が亦父宅（字新道）の幽囚室で、邑學教育の最効果を發揮し得るに至つたのに、刮目、大書して想到すべきでなからうか。斯くの如き境遇に至つたのは、固より彼れの天性の之く所に因ると云ふものゝ、其の體驗と思想の變化こそ東北亡命旅行より享けたのを、何んとしても切離しては論立されないの

である。後ち松陰が該の實行を強調して、殉國的運動上の信念なる用猛の第一に算えてゐるのは偶然でなく、初めより決定した彼れの目的で、従つて必然の收穫であつたのは言ふまでもない。そして彼れの行爲は其れ毎に前後と首尾を一致してゐるばかりでなく、強力な記憶力と不動の精神が持續されてゐるのに心附くであらう。

此くも彼れの青年期に對し、精神と思想と學問上に大きな變革を與へた外に、最も紀念すべき業を成し遂げてゐる。夫れは昨年十二月十四日に櫻田邸を出走し、本年四月五日桶町烏山宅に身を寄するまでの忘れえぬ長途の「東北遊日記」の整理、補充、統一であつた。其の初め奥州に携帯したのは日記に用ふる帳と、諸事を聞き控へる一時の「雜錄」に充てる一二冊の帳と、（或は別に詩帳もか）であらう。但し前の一本となすべき初校本には、別冊のものより詩や關係事項を補充し、序、跋（詩）を加へた全體の自筆本（鑄方家藏に當る）で、爰に一貫した日記の一部を成すに至つた。然るに之を更に推敲して、他人（門人ならん）に書寫せしめ、畢るのを待つて猶も校閱自ら訂正、書入れた所謂他筆本（松陰社藏）である。此の方は自筆本が出来た後であるから、十一月か十二月頃までかゝり、茲に及んで首尾が纏り完璧したのであらう。跋には亡命罪が決定した日附の詩を以て代へてゐるにも、此等二本の整稿年を粗ぼ證してゐよう。扱又東北行に最も關係したのは、本年九月八日彼れが屏居中より、曩に紹介狀を貰つ

た恩誼の爲め、其の當時（九月四日）萩に滞在してゐる齋藤新太郎に贈つた長文の謂はゞ東北遊歴終了の報告的感謝書翰で考へると、日記の整理が大略成らなければ、さうした全體的要、劃切の筆述が容易く出来る筈がない。故に日記も其の前後に亘つて終結され、此れと相俟つて右の手紙も發せられたであらうから、無論兩者併せて讀む必要があらう。

因みに言つて置きたいのは、安政四年十二月十三日、當時阿武郡須佐村に居住してゐた松陰の友人小國剛藏より、松本村杉家の幽囚室に在る松陰に與へた狀中に「東北遊日記願借觀焉、○前後中略、東京市吉田家藏、」云々と見える。此處に云ふ日記は、初稿か自筆か他筆自訂本の何れか不分明であるが、苟しくも他人に貸覽せしめたのは、今萩市松陰神社藏の所謂他筆自訂書入本でなければ彼れの本意に副はないと思ふ。されば其の前後東北遊日記を初め、彼の江幡の爲めに作られた東征日記（後ち寫本にて東征稿と改めて傳へられるもの）も亦他人に貸與し、従つて之が寫本が轉々して何冊か生じ、世に傳播されたであらうが、現在に見られるのは屢述の通り、初稿本と合せて三部であり、東征日記の方は稀に寫本として一部である。

是れより先、烏山塾に居た松陰の同藩友人で五郎同門の土屋蕭海は、四月十八日彼れが江戸出立の時、見え隠れに品川驛まで送つたやうで、六月十日其の屏居中に書面を與へた。○前品川之別、不堪夢想候、爾後無異御歸國之由、兩度之書問、得審之、奉喜雀候、幽囚之狀

如何、千里之才も繩墨之字には入り申候、しかし太平之時節、逢此罪案、可賀之至也、所謂時無英雄、使堅子成名、俠兄當鞍馬空匆之中、此等之事實不足言、兄之得此名、幸生無事之時也、僕數日前以此語土井氏、々々拊掌呼快曰、男兒到此亦可以無恨、土井氏平日不許可入者、於今許兄、兄之知千里之外、豈不多乎、○下兄前書言、欲僕之歸、出中村氏意乎、邪念乎、則雖邪念乎因中村氏書、未會不的當也、兄之明眼實燃犀之如シ、以此明眼幽囚中二十一史○支那、研之精之、古今之得失、治亂興敗、聖賢、姦邪之進退出處、奇節異常、山林瑰奇之士尙而論之、豈不一大快事乎、○下御賴常陸帶○藤田東湖ノ著、七日比にハ持主よりかりる積りと、鳥山○新三翁申候間、其迄御待可被成候、制外危言、藩祖實錄、後便ニ差贈リ可申候間、御安心可被下候、五藏○五之事、于今不分明、大ニ氣遣申候、渠居常無隱謀故、シクジリハセンかと被存候、姦臣○田は後レニ侯駕ニ、十四五日後に出立致し○江戸ヨリ歸國、候様子故、間違候者哉と被存候、千住にて姦臣之出立承り候處、十四五夕後レ候に無間違と申事ニ候、何分氣遣ハしき事ニ奉存候、其故他人にハ夢々御洩無之様奉願上候、今日は急使故略々申述候、後便には委曲上聞、不一、時候○コノ意ハ天候ニアラズ、幕府ノ日米外交問題ハどうなりともゆわかないよ、○次ハ追申ノ一御一讀後ハ夏之蟲○下略吉として、此處にも五郎の報仇を應援し、殊に其の讎敵田鎖左膳の歸國日を急報してゐる。併し既に五郎は石巻に

足を駐めた儘、即て妻を娶り、私塾を開いて悠々生活に逸樂してゐた。彼れが心境の變化や其の隱現行動は、是の時分より漸く見られる。

睡餘事錄本年八月條の「四日、晴、周田○源久保、○清太來、○前後とあるだけで、道に松陰も疲勞したのか、今日は國史の讀抄も子弟への教授も休んだやうで、其の代り父の許に在るに拘はらず、彼れは何故か態々五郎の復讐を絶對信じた論文的手翰を認めて呈し、

〔原本、七行ノ原注割注マテ、抹消シアリ、〕
『吾樓之事、翹企望報數日矣、腹中獨罵曰、半○山縣半藏カ、鳥山、土屋何愚駭之甚、吾樓之決策〔兄ノ明略可レ刻、何不下一遣宋朝岳飛、探其事情、誠如レ是、則不レ出數句、而得其詳矣、何二子○鳥山、土屋之不レ及此也、後乃悟曰、英雄舉事、相機而動而已矣、數年之遲速、何必區々然計算爲哉、戸澤之別、吾已見此子心如鏡石矣、傍觀者宜知種種樹郭タク駭然、二子之心蓋在于此、而余則向未及焉、得半藏兄賊脱矣之書、大悅曰、必使吾樓成大名、何者善戰者無不知名、勇功、賊愈黠、而吾樓之知勇愈可レ見也、炭漆心愈切、一點癩餘漆、○作年不詳、吾樓ノ七絶ノ轉句ニ「願吾樓之上策、僕略聞其說矣、吾樓有數策、先試其下、不中、而上非用其上、何足觀、吾樓之智勇、兵法云、策不三必良、唯其多、吾樓蓋聞焉、雖然蓋棺論定矣、此書之言不三必言、而又三不當言也、爲三知己故不覺發之、忽悔而抹之、誰氣ニカ、ル、豆國之變、咄々怪事、僕於是得有レ感焉、頃讀三六國史、略觀上世威服百蠻之雄談、國威之衰頹、未レ有如今日之甚者、豈之何如、曰脩本而已矣、所謂本者凡五六事、皆甚難之事、蓋講官他日之任也、兄宜致思焉、』

身在三千里外、則憂君憂民憂士氣憂國、凡者遊學人之常情也、然及歸國也、百不舉一、亦遊學人之常態也、○追申彌介之助、彌介^{○土屋矢}への狀も此内へ籠テ居、別段ニ書く、與獨眼^{○鳥山}書、御致可被下候、
○東京市久原房之助藏

斯くの如く述べ、今尙東北亡命の動機關聯を固持し、終始同じくして、彼れの行動効果を待望し、自ら亦其の感受する所を以て目的とした、最初の意志と些しも變つてゐない。況んや今の日米外交難局に際し、江幡の義舉より影響して彌が上に尊攘の志士を結束させ、奮起を作因せしむるものと主張する爲めであつたらう。例へば五郎一箇の武士的行動をして、明年八月八日家兄に送つた松陰の狀で換言すると「明春江戸惣崩れハ當然之事ニ而不待言候、○中有志之士何一度爰ニ來リ、君侯之御馬前ニて討死して、英名ヲ千載ニ傳ヘざる哉、○中天下ハ天下之策アリ、一國ハ一國ノ策アリ、一家ハ一家ノ策アリ、一人ハ一人ノ策アリ、一人ノ策ヲ積テ一家ノ策ヲ成シ、一家ノ策ヲ積デ^{○中}候事、御努力是祈、^{○前後略、山}と云ふ效果大を絶對に信じ且念じて變りなかつた所以であらう。偕て前に反へり、今年九月某日萩に在る來原が江戸の土屋に發したのに「老兄九月一日の貴翰拜承、羽倉^{○簡堂ナ}氏へ御轉寓、師友の益不少之由太佳、^{○中}章吉^{○濱野五郎等ノ友人}不絶往來して切磋之功、想像に堪へず、^{○中}吉田氏今以て幽囚に御座候、閉戸にては無之、實家の杉^{○百合之助}氏方に屏居、けしからぬ勉強^{○國史}の由、可喜又可畏、^{○前後義}

^{所鳥山先生傳所收}」に據りても松陰が屏居待罪の家と、又猛烈に國史の研鑽と抄録の傍ら、此處に來る子弟、時としては父、叔、兄まで、漢文や海外關係以下の諸本を講述或は會讀して、夙くも郷土教育の第一歩に出でつゝ居つたのが、彷彿と想見すべきであらう。

かうした時、曩に文化七年二月二十六日幕府は陸奥白河、會津藩をして相模と總房の海岸に砲臺を築かせた。以來幕府は以上の砲臺并に近邊沿岸を重視して、各藩に交替守備を命じてを。然るにペリー來航の前後に於て、猶幕府は特に海防を嚴にすると共に、海岸の要所に砲臺を築き、各藩をして守らしめ、且海岸地方大名にも亦之を築かせ、或は大船、巨砲を製作せしめて、今尙忽せにせざるなど我が國は外患内憂の急迫を續けてゐた。既に幕府の築造した品川砲臺成るや、今年十一月十四會津、川越、忍、彦根藩の内海警備を免じた、更に會川忍藩に其の砲臺守備を命じ、彦根をしては羽田、大森を警衛せしめ、又肥後、長門(萩)、備前、因幡、築後、柳河藩には相模、安房、日總、武藏本牧を守らしめる騒ぎであつた。夫れ故以上の諸藩は有能の士を選抜して之に派し或は交替せしむる等で上下し、全く文字通りの急迫光景であつた。松陰が國史より享けた大きな感動と示唆に因り、將さに苦悶の極に展開されんとしてゐる新日本黎明の直前に當つて、斯の大きな信念を投じやうとする準備と用意が、必然にも東北亡命待罪の屏居境裡から、除々として發し得たのである。

屏居中に於ける松陰の國史研究の要は、三千年來光輝ある國家の永久保持の爲め、君民一體と爲つて、崇高な思想の創造、鞏固な精神の發揚を希求する實踐教育の至念に外ならぬ。是れより先彼れは東北亡命旅行の出かけに豫定した水戸滞在、視察の際、携帶せる所謂東北遊日記（初稿本）の雜記中に『水府、一史官ヲ建テ、人材ヲ教育スル事、一學術は各其好ミニ隨而、朱學^{○朱子}テモ陸學^{○九淵}ニテモ王學^{○陽明}ニテモ皆兄弟ノ如シ、何ゾ相闘フニ至ラン、^{○中}會澤は諸子ヲ讀ム事餘リ不^レ好、殊ニ莊子ナドハ甚キライノ話シ、^{○中}「天下ノ士ヲ集め事ヲ辨ズル事、^{○下}略^{○中}」かうあるのは會澤か豐田を訪問した時の談を、歸宿してから筆録したと思ふ。翌六年六月三日米艦が浦賀に來航した時、松陰は既に大和五條から江戸に上つてをり、此れを聞くや明日赴いて調査し、歸來八月初めと思ふが、國家の容易ならざる當今の急務に就き、大義と至誠の間に超然起つて論じた「將及私言」なる一篇を草し、假令御家人召放の未釋、遊學中であると雖も、「明春之事江戸之光景、如何可^レ有^レ之」と御想像被^レ爲^レ在候哉、扱も々々天下之一大事、今日ニ立至り憂憤仕候のミニ御座候、孰も明春一戰^{○日}ニ就而も、幕ニも大砲などハ追々出來候由なれ共、士氣之未^レ振事甚しきもの也、且盜賊橫行之噂有^レ之、一戰ニ及び候ハ、一タマリ不^レ申様被^レ考候、迎も一月と踏留ハ六ヶ敷かるべく歟、併此等之難處本藩など諸侯ノ先トナリ、一度大義ヲ天下ニ伸度ものと、石龜ノシダンダ、鄙夷御下察奉^レ祈候、就而は別紙之通草卒之舉ニ及申

候、^{八木甚兵衛ヘ渡ス、○御直目附}然處甚兵衛取計ニ而、覺書ヲバ下ゲ、將^レ及^ニ私言^一ハ匿名ニシテ、君聽^{○藩主敬親ノ}覽、ニ達シタル由、幸甚々々、^{○下略、同年八月八日家兄ニ宛テシ狀（山口縣當海村山本雪三藏）、}斯くの如き外交上の切迫を目撃しては安閑として居るに忍びず、彼れは潜越の境遇から始めて國史教育の實踐運動に出でたのである。今本書の内容上から觀た意見は省くが、要するに該書はベリーの來航に直面して、我が日本が彼れに對する重大時務策に就き、第一項より第九項に至る大綱を忌憚なく述べて藩主に上り、則ち尊皇の精神に富む防長大領主たる毛利敬親に向つて即時之が對策の實行を促し、其の遂巡拒否に因つては、國家の存亡に懸はる所以であると身を決して強調、進言した。

幸ひにして以上の上書が御側役八木の好意に依り、匿名の形式で君覽に達した。更に其の内容を俱體的に述べたのに、「急務條議」があり、八月二日附となつてをるから、前の私言に引續いて執筆したのであらう。此れに據れば藩主は水府老公（齊昭）と熊本藩主と交りを結び、從つて毛利の家臣は右二藩士の錚々たるもの、外、廣く天下の士と交るべしとて一々其等の人物を列舉し、翌九月「急務策」、「急務則」、明年正月「海戰策」を撰して孰れも侯見に達したと推察してよい。「一將^レ及^ニ私言^一、急務條議入^ニ御内覽^一候、急務策一則是ハ公然ニ而も不^レ苦、兎も角も上國ノ事氣遣敷御座候、^{○前後略、同年九月十五日家兄ニ送レル狀、（吉田家藏）}以上は、松陰の殉國運動の用猛第二と自稱してをり、然も前の第一回と共に何れも東北亡命旅行と因縁のある實踐行爲であつた。後ち

松陰が父の杉宅に幽囚中の記なる「丁巳日乗」に「安政四年丁巳正月元日佐々木龜之助來云、學校○明倫、復設科目大略三等、經學兼諸子、歴史兼國史、詩文兼諸集、未及其詳、余謂科目之者、當三繼考、設、大便教育、○足以破固僻之習、然非以國史爲幹、凜然立國體、則吾無理也、○下吉田家とて、極力國史教育を松本陋村の一隅より絶叫した。後ち傳馬町の獄に斬首せられんとする僅に七日前、彼れは最後に於てすら、猶國史の實踐教育を天下の有識者や門人等に呼號し續けてをる。其の例は『水戸日本史（大脱力）』の後も無之、天朝六國史の後も缺く、天皇の御謚號も光孝天皇までなり、其後の帝紀御撰述、謚號御定等、勅詔にて學習院に被仰付度事也、尤も是は書籍と人物と大に學習院に集りたる上の事也、學習院興隆の事、一天下有志の者、出席を免し玉ふべき事、居寮、寄宿を免す、一天下有用の書籍獻上を免し玉ふべき事、古書、近世書に不限、一尊攘の人物○殉の神牌を立て玉ふべき事、○中向に御相談申候尊攘堂の本山ともなるべし、神道を尊び神國を尊び、天皇を尊び、正論計り拔取、一書として天下に頒べし、○中一院中に史局を設け、六國史の缺を補ふ事、○下未十月廿日松陰、子遠兄○門人入江杉藏、足下、○松陰先生遺著所收、とあるのに、彼れの國史教育の熱説は終つたが、今に其の信念は不滅であるのは言ふまでもない。

待ちに待つた亡命の罪は、十二月八日藩議で決定し、翌日之が宣告を受けた。後年梅太郎が

作した松陰年譜、其の他に之が判決を皆八日附に書いてをるのは、松陰の書狀にもさうある爲めに據らうが、前言の如く、翌日藩が松陰以下に申渡した該の所謂公文書に據ると、實に次の通りである。

吉田大次郎（矩方）

右軍學爲○嘉永五年、稽古江戸被差登居候處、去亥ノ十二月十四日、稽古切手を以御門外罷出、及暮候而も歸不申候付、揚り切手ニ相成候、尤固屋內、其外只今迄懸り合無之段、支配證人役申出候由、同十五日御目付方申出有之、猶居合之親類兒玉初之進も右ニ付、心當之先々相尋候得共、一向行衛相分り不申候由、同日申出候、且又大次郎事軍學爲稽古水戸、仙臺、米澤邊に罷越度段、御在府中御願申出、被逐御許容候付、先達而出足之段申出候處、御詮議之趣有之、當分出足見合候様御授相成居候由ニ候得共、唯一途ニ彼地の修行之志深く、前後無辨、稽古場々直様罷越候哉、被相考候付、彌以相尋候得共、今以行衛相知不申候段、不遁者申越候、乍此上居所相知候ハ、早速趣可申上、由於爰元ニ當正月廿九日親類兒玉太兵衛、久保清太郎申出候、

一大次郎事、當四月十日、江戸御屋敷罷歸候而申出候趣は、私儀先般奥州邊修行之儀、被逐御許容候、然處細川越中守様御家來宮部鼎藏と申者、彼邊同道仕度、去十二月十五日、江戸出足可仕段手堅内約束仕置候ニ付、右日限前廉過書之儀申出仕候處、早速御下渡可相成、御物扱ニ相見不申候處、風と存

付過書之儀は諸所御關所等差障無之様ニとの爲ニ而、畢竟一身に當り候事故自身他國ニ而武道取失、耻辱を取候事さへ無之候得ば假令過書無之共、御國を辱候儀有之の間敷、他國人○五郎、に違約仕候而は、差當御國武士之信義を失、面目無之事と一途ニ存詰、同十四日稽古切手ニ而御門外罷出直様出足仕候、然處其後熟々思案仕候得ば御家來として浪人同様過書をも所持不仕、且御門出入之儀ニ付而は御作法も有之儀を容易ニ相心得、缺落同様卒爾之致方仕候段、實以奉恐入、今更前非難ニ悔返、御了簡之御歎可申上、品も無御座次第奉存候、縮る處私儀身柄如何躰之御咎被御付候とも、御國法相立候様無之而は不、相濟と心付、修業中何共安心仕兼、御暇日限半途之儀ニは御座候得共、早々御屋敷罷歸候儀ニ御座候由、一右ニ付大次郎事、當四月十八日江戸出足、道中平躰ニ而御中間之者兩人付添、御國被差下親類兒玉太兵衛、久保清太郎に引渡候様被御付候處、五月十二日致歸著、相續罷居候由、親類同人申出候、右奥州邊修行御暇被遂御許容候共、出足見合候様授有之候付、何分之御沙汰を可相待之筈之處、無其儀猥リニ他國出行之上、數月令徘徊、御條目之旨ニ相背、殊ニ肝要過書御儀を於下容易ニ掠了せしめ、且御門出人之御法乍存相背、剩最前出足延引仕候而は他國人に及違約ニ、信義を失、面目無之事と存詰候由雖申出、前後之廉々上を不憚、却而他國人に信義を立候心底、本末顛倒之儀其筋不、相立、重疊不届至極不謂事候、依之重キ被御付方も有之儀候得共、前非を悔、立歸、且宮部鼎藤、内々斷之趣も有之、御不審之筋無之候付、格別之御了簡を以、御家人被召放候事、右可被申渡候、

○本書二通アリテ本文並ニ同シケレド、一ハ「十二月九日沙汰成」トアリ、他ハ「嘉永五年十二月九日沙汰」トアリシヲ、後チ「十二月八日」ト直シアリ、然ルニ毛利家藏文書ニ據レバ十二月九日ナルコト明カナラン、サレバ九日附ノ本書ヲ受クル前日、既ニソノ内命アリシナルベシ、(吉田家藏、以下同シ)

覺

大次郎事

吉田松次郎

(養母久藩)

同人 母

右趣有之、御家人被召放候處、私儀不通過者ニ付、育ニ仕、宗門之儀は五人組ニ相加中候間、此段御聞

届、宜被成御沙汰、可被下候、以上、

(嘉永五年)

十二月九日

杉百合之助(花押)

三須市郎兵衛殿

前田孫右衛門殿

(刎紙)

被聞召届候事、

良右衛門嫡子 來原良藏

右去亥○嘉永四年、十二月十四日於江戸吉田大次郎事、稽古切手を以、御門外罷出、及暮候而も不罷歸、揚

り切手ニ相成、尙藏嫡子小倉健作一同小川右兵衛に相對仕、良藏申述には、大次郎事今朝御門外罷出、今以不罷歸ニ趣は、此内以細川越中守様御家來宮部鼎藏同道之約束致置候事ニ付、出足及延期候而は宮部の對し義理合不_ニ相立、御咎を蒙り候而も、押而罷越候由申事ニ付、心得違之譯、種々及_ニ存寄候得共相用候様子ニ無_レ之、強而留候ハ、當座異儀ニも可_レ及止事を不_レ得勢故、其儘ニ差置、是迄御内達ニも不_レ及今日の次第ニ至り候段奉_ニ恐入候由申出候、然處大次郎不_レ屈之心底、最前存居候ハ、強而差留置、内々物筋可_ニ申出_レ之處無_ニ其儀、尤存寄をは申聞候由ニ候得共、行詰不_レ宜等閑ニ打過候より事起り、不_ニ容易御厄害ニ立至り、朋友之道も難_ニ相立、不_レ屈之至不_レ謂事候、依_レ之逼塞被_ニ抑付候事、右可_レ被_ニ申渡候、

(嘉永五年)
子十二月九日、遠近方_ニ渡_レ之、

尙藏嫡子 小倉健作

右去ル亥ノ十二月十四日、於_ニ江戸_一吉田大次郎事、稽古切手を以、御門外罷出、及暮候而も不_ニ罷歸、揚り切手ニ相成候即、大次郎相固屋罷居候處、良右衛門嫡子來原良藏一同、小川右兵衛に相渡仕、良藏申述候は、大次郎事今朝より御門外罷出、今以不_ニ罷歸候趣は、此内以細川越中守様家來宮部鼎藏同道之約束致置候事ニ付、出足及延期候而は、宮部の對し義理合不_ニ相立、御咎を蒙り候而も押而罷越候由申事ニ付、心得違之譯種々及_ニ存寄候得共、相用候様子ニ無_レ之、強而留候ハ、當座異儀ニも可_レ及、止事を不_ニ容

得勢故其儘ニ差置、是迄御内達ニも不_レ及、今日之次第ニ至り候段奉_ニ恐入候由、左候而健作事、大次郎相固屋面々孰も彼者心底乍_レ存是迄不_ニ申出趣、良藏同様之譯相ニ而、今更奉_ニ恐入候由申出候、然處大次郎不_レ屈之心底、最前存居候ハ、強而差留置、内々物筋可_ニ申出_レ之處無_ニ其儀、尤存寄をば申聞候由ニ候得共行詰不_レ宜、等閑ニ打過候より事起り、不_ニ容易御厄害ニ立至り、朋友之道も難_ニ相立、不_レ屈之至不_レ謂事候、依_レ之逼塞被_ニ抑付候事、

右可_レ被_ニ申渡候、○外同文ニ通アリ、但シ各狀ノ首尾ハ「直記嫡子実道恒太、子十二月九日遠近方_ニ渡_レ之」ト「與登居ニ付、追而御在府之上逼塞被_ニ抑付事、ト書ク、但シ後者ノ壯太郎以下ハ、別行ニテ同文ニ書ケリ、

實に以上の理由で、爰に松陰は父祖代々の士祿を褫奪されたから、吉田家學師範の名跡は養母の久満と諸共失つて、一介の浪人と爲つたわけである。併りながら父の願出でに依つて、其の育くみ詰り親預けの身とされ、彼れの扶養、監督下に屬する者となつて、五人組に編入せられた。同日、松陰の友人であり兵學門下でもあつた關係から、亡郎を幫助した懸疑、否事實であると見定められた來原、小倉、実道も亦夫々逼塞の處分を申渡された。但し最も早く國元に差下げられ其の罪に服したのは壯太郎一人の様である。玆に至つて松陰は其の日を限り、從來の通稱なる大次郎を松次郎と改めた。蓋し之は罪を蒙つた身として、前名を憚つた爲めであらう。然し彼れは右の斷罪に因つて意氣は沮喪せず、時難に會ふ毎に自己を創造して往く新境地に

出發する、乃ち第二の用猛を豫想するのであるから、固より心境は昂然、明快であつた。

さて先きに言つた東北遊日記は、後ち三種と爲つたことで、即ち現地所持の所謂初校本には自序も詩跋も收めぬ極めて粗略のみならず、惜しいことには翌年閏二月十八日まで止まり、次は殘闕（松陰社藏）である。他の二本は何れも整理年月日を附記してゐない爲め、其等著了の時日や場所は詳かにあらずと雖も、松陰の之が前後境遇より推測すれば江戸邸に歸つてから始め、尋で松本村字清水口に屏居待罪中の完成であらうし、次は右歸國後の屏居待罪間、知人の一切と音信を絶ち、専ら讀書養志を敍べた後に「扱昨冬十二月八日ニ至り削籍奪祿之命下ル、於レ是閑雲野鶴、何天不飛、○下略、兵庫縣渡邊家藏、」と芳之助に意圖を披瀝した如き、是れは明年七月二十三日水戸の永井芳之助に與へた書面に據る、即ち昨年正月水戸城北の青柳渡で見送てから以來の感慨を冒頭した例で、既に強烈なる自己更造の再出發を胸中に劃してゐたのである。

（九）東征日記の執筆、殉國者の絶対信念

是れより先松陰の十一歳の時、藩主毛利敬親が初めて國に入り、文武の師家を城中に召見し、親ら其の學力を試験するに當つて、松陰に武教全書を進講せしめたことがある。藩主は彼れの滔々たる巧述に驚嘆して、其の師を問うたところ、左右の臣が玉本文之進なりと答へた以來、

深く印象の榮を蒙つてゐた。爾後屢々兵書を進講し、其の都度感賞を賜ひ、江戸遊學に上つても東觀中は毎月十二、二十三日を定めて進講したから、彼れの將來を囑目したのは、主従の關係よりして必然の情誼と謂はねばならぬ。夫れ故中谷等の如き先輩は尠くとも彼れに好意を寄する以上、藩主に暇乞ひを告げさせて、東北に旅立たせるのが至當であると思惟したのに拘はらず、一片武士間の約束から、さうした謂はゞ大義と代へて、徒らに匹夫之諒を執つて了つたのを、東北亡命遊歷後の自省自顧の結論とした。殊に藩主が彼れの罪を聽かれて惜んだのを、松陰が後ちになつて人から傳聞し、大いに感泣してをる。それが何時であつたか分らぬが、安政六年二月頃、野山獄中より江戸に在る妹婿の高杉晉作に與へた手紙に「小生幼年より深く御知遇を蒙り、往年は御前○藩主慶親會にも屢々被召出、親しく德音を伏聽仕、一々肺肝に徹し候、其後感慨不能已事有之、亡命○東北仕候處、後にさる人より○按フニ玉木カ山田カ、不詳、承り候處、其節○事御無用、君公、國の寶を失ふたとの御意ありし由、一乳臭、國○藩ヲに何の損益ありて、かく難有被仰候事か、何共誠に忝く候へども、小生に於ては感激身に餘り、此世に生ては居られ不申候、墨夷○米國、行思立候處、夫も不遂死もせず、剩へ昨年已來又々恩旨を蒙り候事どもあり、昨年より屹度志を立て、當御在國中には是非一死を遂げ、積る重罪の御申譯可仕と存候、○前後略、松陰先生遺著所收、斯うあつて、主従の情節が深く纏綿されてゐよう。

乃で藩主は密に彼れの再起を望まれ「父百合之助ヨリ遊學ノコト願出レバ、免サルベキ内諭アリテ、十ヶ年間諸國遊學願出、許可アリ」と後年梅太郎の作譜に見る通り、彼等父子は君恩の渝はらざるに感泣、感喜し、其の旨に應へて、十二月九日自費で向ふ十箇年間、他國修業許可の内意伺書を提出した。勿論内諭より伺書を出したのであるから藩當局も異議ある筈なく、翌年正月十三日正式に願書を差出し、十六日に許可された。松陰の喜びは譬ふるにもなく、心機轉回の爲め（多分其の日）前の通稱たる松次郎を寅次郎と改めた。二十六日午前六時頃松陰は家兄梅太郎、外に佐々木小次郎、同龜之助、高洲某（瀧之允か）、玉木彦介、赤川淡水、久保清太郎の友人、門弟等に萩郊外の大谷巖まで見送られ、更生の旅に上つた。但し清太郎だけは周防三田尻まで送り、二十八日訣れて松本に歸つた。別れに際して一詩を賦し、彼れに贈つて「會稽有辱吾敢忘、負笈自憐嘗膽情、今君遠來送吾行、臨別一語與君評、講學徒與口舌爭、盡作經國大文章、人生得喪一毛輕、英雄常要身後名、嗟吾微志或有成、巴城之下尋舊盟、○前後略、癸丑歲遊歷日、錄所收、萩松陰神社藏、」と示してをる。此く彼れは貌に一新的高調さを表はし、且自他を戒めるのを忘れない。但し此の行の詳細は其の自ら成つた「癸丑歲遊歷日録」と、前後間の關係書狀で知られるから、本節は畧めて彼れの東北亡命に關聯した、即ち後の之が所要を逐述するに止めておく。

二月一日周防富海より船に乗り、瀬戸内海を航して六日讃岐に著き、翌日再び船で備前や播磨の沿岸を進み、十日大阪に著いた。是の日彼れは家兄に手紙を出して、大和五條に廻り、森田節齋を尋ね、次ぎには伊勢の津に至り文武の盛隆を見、夫れから美濃不破郡岩手村に赴き、長原武がなほ江戸に在るか歸郷してゐるかを尋ね、それより東海道を下り、二月末までは是非共江戸に著きたいと報じてゐる。十二日同地を發し、翌日五條に至り、五郎の師節齋を訪問した。蓋し松陰は東北亡命後、今や心機轉換の修業首途に當り、先づ初め之を想起し愴惶として森田訪問の豫定を立てたのであらう。其の理由は言ふまでもなく、去年三月二十四日五郎と奥州戸澤で別れる日に、託された節齋への永訣書面を届ける義務と、又彼れに對する自分の應援事情や前後の關係に就いて詳しく語り、且彼れの遺文に節齋の添削を求めて板行する等の用件で其の家塾に詣つたのである。節齋は是の遠來初參の青年が、殊に五郎の親友なる松陰の至つたのを甚だ喜び迎へたのは言ふまでもなく、而して彼等は既に五郎が兄の復讐を達したとまで信じ切つてゐたからである。

日録二月十三日條下半に「訪森田謙藏、々々名益、號節齋、江幡五郎之師也、謙藏至堤孝亭家、追至其家、是日行程六里、午後乃達、爲語五郎之事、又聽其論文、至于夜半、快甚、遂宿焉、五條數三千、」と書終つてをり、以來彼れは節齋の塾宅を兼ねた堤孝亭に足を留め、

四月まで江戸に下る豫定であつたのが、知らず識らず滞在して彼れに従學し、其の間森田の紹介や招祭に隨行して、附近の學者や少壯の士と交際し、甚だ有益な日を費した。當時二人の師弟状態は「嘉永癸丑之春、先生^{○森田}、拉^{○門人}吉田寅、來^{○相馬}訪翁^{○九方}、于茅海濱、鼎^{○坐}爐畔、談及^{○海濱}、弘^{○撰}節齋碑文、」の情景であつた。

是の行の二十三日條に據ると、去る十四日より本日に至る、節齋が河内富田林の豪家中村徳兵衛を訪問するの、其の門人増田久左衛門と松陰は隨伴、滯泊し、又此れより和泉岸和田へ遊ぶのにも從つて行くこととした。節齋は駕籠に在りながら一詩を作し「人情反覆雨耶雲、氣似^{○吾樓}獨有^{○君}、他日勿^{○忘}河内路、與^{○中}與^{○外}共論^{○文}、^{○日錄}、但^{○シ}東京市賀集亮二藏森田詩書ニハ「泉汝語懸懸、他年須^{○記}泉州路、與^{○外}與^{○中}共論^{○文}」ト見ユ、又當時ノ作ナラン、」松陰に示した。斯くして二人は其處に駐すること十日に及んでゐる。但し其の概ねは節齋が岸和田藩教習館教授相馬九方と文を論じ、世事を劇談する爲めで、又彼れが之に赴くと數名の若い藩士が教へを乞はんとて來集するのであるから、何時も松陰は下僕のやうな對照で傍聽する態であつた。

先づ本節前後の推究便宜上、十四日以来松陰が節齋の駕に従行して、後ち彼れの用事を仰付けられ、又富田林から大阪に赴く間に談論を交した人々を一括して見ると、其の日大和五條より増田久右衛門（門人ならん）も從ひ、河内富田村の中村徳兵衛（郷士の富豪であらう）に至

り、九十日滞在したが、其の間の詳細は日録に缺くので分らぬ。孰れは徳兵衛の招待に應じ、御馳走を饗けつゝ、文談に費したと思はるゝ。二十三日富田林を出で、和泉岸和田の藩儒相馬一郎（九方）を訪問せうと駕從、福町を過ぎての途中、節齋が彼の與外與中の詩を作つた。岸和田に至つて一郎と學問を論じ、深夜を越え、辭して富田林に歸る時は翌日午前二時にも爲つてゐた。是の日相馬の方から中村宅に來訪、夜に入つて節齋等が彼れを追かけの訪問、劇談明晨に及び、乃ち午前富田林へ戻り、二十六日相馬を訪ひ、又同日庄屋岸長太郎とも逢つた。既にして中村宅に延留間毎日一郎と往來、又岸和田藩の少壯士岡部十左衛門、古屋惣兵衛、濱田雄二郎、宮崎要人が之に來つて節齋の教授を受けた。且出雲人で岡田に移り醫業してゐる山田文英が來訪、談論に時を過したと見えて、中村宅に一泊した。二十九日節齋等は岸和田儒員の三宅源之介を訪ね、大いに學術を論じ、中村に歸つた翌日は三月朔で、當日は濱田、宮崎が來訪した。斯の時松陰は彼等より拓植彌左衛門の復讐の事を聞くや、其の後世繁勝と云へるを態々訪ね、詳細を聴取、記述した。夜に及んで庄屋岸を訪問して泊り、二日も彼れの家に宿つた。三日岸和田を發し熊取の庄屋中左近に至り、又泊ると醫生左海祐齋が之に來訪した。五日熊取を立ち、岡田の山田に至つて一宿、彼れの門人西川俊齋とも逢つた。然るに其の翌日から十七日まで日録が闕けてゐるので、節齋師弟（松陰、久右衛門）の行動が分らぬけれど、十三

日間も長く文英宅に滞留して、十七日岡田を發し堺に至り、一行は旅舎に宿泊したやうて、翌日増田秀齋、小林新介を訪問し、午後富田林の中村家に返し、又十三日も滞在した。併しながら日録は十九日より晦（三十一日か）の前日まで缺けてをるので其の間の状態は判らぬが、孰れは是れまで來往した士等と漢籍や文章を論じ、乃至は時局を談じ、且幕府の外交無力や、其の要人の入洛非難、不忠等にも憂國慨世的意見を交換したであらう。晦日かくして松陰は節齋の用務（不詳）で彼れと（増田もか）別れ、其の日攝津大阪に住む節齋の門人なる醫者の難波邦五郎に赴いて泊り、節齋は一ヶ月半振りで五條の自宅に歸つた。四月朔日松陰は大阪で更に後藤春藏（松陰と號す）、藤澤東暎（名は昌藏）を、翌日阪本鉉之助（鼎齋）、奥野彌太郎を夫々訪問し、四日邦五郎宅を發しての歸途、五日大和八木に谷三山を訪ねて師事する所あり、六日五條の堤孝亭に還つた。

爰に松陰の性格、否彼れの武士道的精神を常に把持して、變はりのないのが認められる。三月朔日彼れが未だ岸和田に滞在中「終日陰翳、濱田^{○雄二}宮崎^{○要}來、聞[○]柘植彌左衛門復讐之事、抵[○]其後世繁勝[○]叩[○]其詳、有[○]別錄、」と日録して、彼れの復讐觀念は、武士の最高の美譽であると強く信じてゐた。此處に云ふ別録は今見當らぬが、兎に角く不義への仇討は士道上、最要

の行動とすべき意識は、東北亡命の發端より今に及ぶ猶同じ考へであつた。實に彼れの復讐觀念は、飽くまで執拗性を持したことになる。斯うした例は後年獄中に在つてさへ、屢々見られるのに感歎せざるを得ない。三月三日岸和田を發し、節齋の駕に従つて諸所に至り、多くの人々と會し、十八日復た富田林に赴き、前後徳兵衛の家に二回實に二十餘日滞在したが、彼れは晦日節齋の用事で分れ、一人りで大阪に赴いた。二十一日彼れの懇交なる大和八木に住む高取藩の豐儒谷三山に贈つた手紙に據ると「僕先月中旬有[○]故、遊[○]於河泉之間、今月念一日從[○]泉州[○]富田林[○]來候、^{○中}此生長洲藩中吉田寅次郎と申者也、僕遊[○]河泉[○]前日五條[○]來入門、則相携遊[○]河泉[○]一月餘、此度一旦江戸[○]遊、大和[○]再遊之積也、^{○中}此生爲[○]人朴實、讀書實用ニ志厚、毫[○]毛浮薄[○]ニ不[○]陷、尤江戸[○]ニテ江幡五郎ト交善、宜御話、五郎同様ニ御教誨被[○]成下[○]度候、[○]下文東征日記ニ係ル、後收、必見[○]森田節齋の生涯[○]所收、」稱讚し、彼れに紹介の勞を執つた。

日録は殘闕ならぬ完本であるが、節齋を訪問し、又彼れの遊行に従ひ、或は其の家塾に滞在した間に於て、其の間何かの都合で往々記事が缺けてをる。例へば二月十三日節齋初訪以來、五月朔日辭去、五條出立までを見ると、其の二月十八日より二十二日、二十七八日、三月二、四日、十九日より月末まで、四月七日から二十日まで。及び二十四日の各條が缺いてゐる。斯くの如きは、彼れ前後の克明な諸日記に較べると甚だ稀れである。其の原因は何の爲めであつ

たらうか。按ふに之は節齋の駕に従つて富田林以下の地方的名士や若い藩士へ訪問、來談に忙殺されたのと、其の間彼れは松陰の非凡を見込んで、五郎に次ぐ誇るべき新門人を獲た満悦を攝和泉の學者や書生等に吹喋し紹介し、時として學を講述せしむる爲めで、又之が關係で中村以下の里正達からまで度々響應を受け、揮毫を望まれ、或は劇談に時を移し、五條に歸れば節齋塾宅で指教を受ける一方、自分をして彼れの侄貞二郎に漢文を教授させられたなど、全く寧日寧時がなかつた爲めであらう。但し三月からの關記は後とて言ふ「東征日記」の著作に没頭したゆゑであるやうに思ふ。元來世間普通人の日記は、其の題義通り毎日の事をするす、其の極めて單純なる行爲に拘はらず、往々にして數日を経てから辛つと之に遡つて書く、畢竟忙しい儘日乗すべきを厭つて放置するのを常とされよう。當時の松陰も斯の弊を認められる。彼の江幡の如きに至つては最も横著で、例へば後年石卷より江戸に上る際の日記は、毎つも日を経つてから追書的に記したと見えて、彼れの前後關係資料とは一致せず、往々錯誤極まる所がある。夫れでは史料學上第一價值に屬すべき日記が、其の實大きな相違否誤偽のものがあつて、必ずしも信據されないことにならう。

松陰が意外に長く節齋塾に滞在したのは、始め五郎の傳言と其の返書出版と、又彼れの爲め東征日記をも撰述するに至つた外、偶然にも彼れを自分の師と爲すに足るを見定めたからで、

彼れに對する最初の觀察は「論學術、取伊藤仁齋、中井履軒、又尤左祖姚江、其文章在本邦、取室鳩巢、太宰春臺及瀧淵八、○又常曰、議論皆出自孟子七篇、敘事皆出自史記、而諸子中、獨推孫子、○日錄二月二十九日條」と記したのに見られる。尤も松陰は幼年より家學の代理教授から兵學者として養成されたので、基礎學は書經から這入り、漸次兵書類を專攻した爲め、其の學的觀念外には、徒らなる詩歌、文章の餘技を侮蔑した。斯る例は既に十八歳頃より彼れの論文や其の後の書翰等に主張してをる。然し鎮西遊學の時、草場佩川に之を尋ね、江戸遊學には安積長齋に問うた事があるが、格別之に留意せざるのみならず、其の道には自ら之を排してゐたから特別に學んだ事がない。されば夙に詩歌、文章は學者に取り思嗟咏嘆して之に熱中するが如きは、甚だ卑しきものと思つてゐた。けれど東北旅行前に心境の變化が生じ、歸れば國史と文章を一箇月おきに精出すべきを言つてゐた。今五條に駐つて節齋に師事するに及び、彼れの考へは俄然一轉したのである。それは江幡と同行した頼末の執筆で、是れは節齋に隨行し或は其の家に滯留する間に作爲し、且充分なる推敲を重ね、心身を勞したものと見てよく、寧ろ前述日録の缺けた日の概ねは、此の爲めに費した事もあつたかのやうに想像される。彼れは五郎が既に郷藩の奸物を殲したのを信じ、其の義節をして空しくせしめず、同時に自ら亦奥州より之が士道の實踐を天下に呼號せんが爲め、全力を傾倒して著作したのが多分三月二十二日前で、恰

度日録の同月初旬頃より往々闕けてをる間に當り、其の脱稿を以て「東征日記」と題したが、現存寫本の題名を姑らく信ずれば、後ち「東征稿」と改めたやうである。

斯くして松陰は節齋の許に従學する間、五郎の同行傳が成つたので、彼れの校閲、添削を乞うた所、「往々讀むに忍びず、卷を擲つて浩嘆するのみ」と五郎を追憶し、又松陰の凡ならぬ文名をも激稱した。乃で二十一日節齋は之を三山に紹介、披露して更に削正を要め、五郎の爲め不朽の美文と爲すを切望した。即ち「○上文同日狀五郎義以奇節頼シヨシ、然未詳、要之決死候事、已非此世之人、僕爲之痛心、御推察可被下候、然彼兄弟○兄春庵五郎死節不愧爲節齋門下之士也、此事此生所作東征日記ト申文中ニ詳ナリ、此書御一閱之上、爲此生御削正被成下度候、此生僕少々改遣候得共、事涉僕事有之、往々不忍讀、擲卷浩歎耳、何卒老臺痛御削被遣候得は、五郎亦不朽矣、至囑々々、委曲は此生ヨリ御聞取可被下候、勿々不備、○東京市佐伯仲藏寫本所收とある。是れで見ると右の手紙實は添書と思はれ、松陰は早速八木の三山に赴いて、充分に批評を聴き、同時に削正して貰つたことであらう。但し日録は三月十八日から晦日まで闕けてゐるので、其の間の状態は不明であるが、翌月二日松陰が大阪より父、叔父に宛てた書面で幸ひ補はれる。それは、

去月○三念二日河州富田○本狀見エズ、併シナガラ之ハ東征日記ノ脱稿ヤ前後ノ情況ヲ知ラセシモノニ當ルベシ所發書、已ニ相達候と奉存候、御圖

族近情如何、定而御無異可被爲在候、(日脱カ)矩方去月晦森田節齋翁ニ別レ、富田林ヲ發シ大阪ニ出申候、富田林至六里前書○コ、ニ云フモノハ去月二十二日狀ニ通ベシ東征日記ニ似タリ、或ハ然ラン、寫上仕候、森田與齋藤○伊勢ノ津藩儒拙堂書、阪ノ名家後藤春藏○松陰ト號ス藤澤東畠の相談之趣有之、矩方携之、昨今日二家ニ參リ、直々相談相濟し申候、因之明日發坂和州八木ニ至リ、號三三谷昇平一見之積リニ御座候、聞此翁甚奇人、○中春藏文人ハ文人ナレドモ、海外ノ事ナドハ甚迂濶不足言、○中森田其僕爲文人ニ笑、浪遊中春又盡、白駒之過可立而俟、但文ノコトハ森田ヘ頗ルキ、甚得益候得共、身ヲ茲ニ委シ可申とも不存、心志爲之大動、委曲著府○江之上上可申上候、時維初夏、伏惟御自愛專一ニ奉存候、旅中勿々拜書僅此、

(四ノ誤リ)三月二日認テハ、日録參照、

尙々大阪ニ難波邦五郎ナルモノアリ、本藝○安人、業醫、亦森田門人ナリ、僕寓其家候事、

家嚴君様○杉百合

玉丈人様○叔父玉木文之助、(元新道ニ松下村塾ヲ創始)

家梅兄○以下切斷シテ良三(來原)ノ御示奉賴候、尤御口演ニてもヨロシク候

語森田ニ以江幡始末、森田大喜、矩方遂記爲一篇文、號曰東征日記、森田題其後云、

辛若經營僅作文、文壇建轡獨張軍、何如炭漆心如鐵、一劍橫衝陸奥雲、○日録末ノ「雜記」中ニ節齋、ノ七絶四首ト和歌一首ヲ書留メコノ詩ヲ收メタリ、但シ轉句ノ心如鐵ハ、竊茲賦トアリ、按フニ之ハ五郎ヲ追憶シテ作レルヲ、松陰ニ示シ、モノナルベク、又ソノ頃彼レニ與ヘシモノニ「養氣節我門流、不許庸兒待從遊、愛子眉間存豪氣、吾機以後一吾

樓下見

(癸丑ノ誤リ)
壬子三月念二日、吉田生似ニ此稿、余不レ忍ニ多讀、漫題ニ一絶以換ニ評語、時余爲ニ與ニ拙堂書、故句中及レ之、

老兄○來嘗著ニ五郎傳、○本書未見、僕欲ニ一見而未果、辱ニ寄示、幸甚、前日所藤田○東所著下斗米○相馬傳亦願ニ却贈、森田翁欲下待ニ五郎遂ニ志而立ニ江幡兄弟五郎、傳、與ニ將眞作、爲ニ合傳、因甚求レ詳ニ將眞事、不盡、語略情無レ窮、

(吉田)

寅二郎

(來原)
良藏 兄○本書ノ次ニ後ヨリ貼紙ノ繼足文ニ「森田著桑梓景賢錄一書(原注、立傳五篇)叙事簡勁、僕將携赴ニ江戸ニ請ニ諸家評、則錄贈ニ一本」トアリ(東京市中島松次郎藏)、

以上で東征日記の成つた月日が凡そ知られると同時に、森田の跋を受けた日や、又之を家郷への尊族及び友人來原に送閱した日と、而已ならず既に五郎の素志が達成したと信ずる前後間の事情、一切が結論されたことにならう。但し本狀で注目せられるのは、其の初めの方に見る傍註に「森田、甚だ僕をして文人たらんことを欲す」とあるのは、文筆、弄文を好まざるを兵學者の常として來た松陰が本稿の執作に膺つて、其の實名文の素質あるのを節齋が充分見究め、且彼れ亦之に自信の有るのを覺つたが爲めに外ならぬ。猶この點に就いては追つて補説すべき要があらう。

然るに松陰が右の日三山を訪問、初謁の時と思ふ挿話がある。即ち談偶々彼れの東北旅行の途、水戸の視察に及んだと見えて、「所著新論尤世ニ行ル、會澤常藏大日本史校正ノ時其功アリ、豊田彦二郎氣節識見壓ニ倒一藩、藤田虎之助、延于山○青ノ子近世四十七士傳刊ニ行于世也、然ドモ其人物ハ前三人ニ及バザルカ、青山量太郎、右四人水藩ノ人物ナランカ、○大和谷信藏有レ」とあるが如き紙書は、言ふまでもなく松陰と筆談したものであらう。其の時か二度目の際か亦分らぬが、猶此の外の筆談紙書もあるけれど、漢籍に就いてのもので東北遊歴には關係がない。尋いで同月二十九日父叔兄に贈つた書信に『谷三山は天下の奇人と謂ふべし、○中略、聽ニ於心、博洽無比、不ニ敢輕許人、而以ニ藤○郡山藩ノ儒者藤川積二、君ニ爲ニ一敵國ニ云々、與ニ大槻盤溪書中云、○中略、聲而善讀書、經傳百家無レ所不通云々、○下略、松陰先生遺著所收、○中略、かう述べて居る。序でに言ふが七月十六日三山から伊勢山田の松田縫殿に與へた書牘に「先日吉田生ニ承リ候バカリニテ、未レ讀候、コレハ安積良齋ノ作ト承リ候、コノ人モ當時○幕府儒者、森有備館囑託有名ナレド、識見ハ乏シキヤウ相見得候、○前後略、三山谷先生遺稿所收」と評したほどの碩學であつた。尤も良齋の淺薄に就いては、既に松陰が江戸遊學最初の師でありながら、山鹿素水と並べて痛評、自ら其の子弟たらんを排し、古賀茶溪には言及せず、却つて後輩や門人に其の入塾を薦めた。況んや東北亡命から歸國斷罪後、再び江戸に上り、佐久間象山に復た入門を仕直すに及び、始めて偉なる人物であることを洞

見した以來、己れ否天下國下の爲め常に彼れを絶稱した。然るに今大和に遊歴するに及び、森田に學ぶ所ある以外に、縦ひ聾なりと雖も三山の該博、洽聞を敬したのである。換言すれば江戸第一回遊學の時、其の學界に空虚と失望を止めどもなく切感した彼れであつたが、五郎の約束を果す義務から、第二回諸國遊學の途に於て之に至るや、始めて學問的效果の得たのを喜んだわけであらう。松陰は餘程三山の學殖に心服したと見えて、後ち安政三年五月二十四日松本村に幽囚中、江戸に在る久保清太郎に與へた狀中に「先日愚按有之、今夜上楮候、非別事、貴兄來春御交代にて御歸りニ候ハ、百日位ノ御暇御願被成、水戸、日光、相模、伊豆、伊勢、津、山、大和、谷昌平、森田謙藏ナド京師、大阪等御遊歴被成候ハ、如何、○中略大和國八木高取ノ近所にて谷昌平と申、聾ニシテ學アル人アリ、海外異傳商推ノ作者此男子ノ死ナヌ内十日十四五日ナリトモ、其談御聞被成候ハ、鴻益可有之と存ズル故ナリ、僕見此人、三四度ノミナレドモ、聞たる事今以耳ニ殘リ、讀書中往々思出シ、何カニ付ケ發明有之様覺、由是申上候事ナリ、イカン々々○下略、東京市久保清一藏と推薦してゐるのに知られよう。

さて前に戻り、即ち四月六日（前夜三山宅に泊つたか八木の旅舎に宿つたか、日録に書いてないが前者であらう）、八木を發し復た五條に歸り、節齋の堤孝亭に投じた。以來二十日まで

日録が缺いて、詳細の行動は分らぬが、大略は次の同月二十日家兄に送つた手紙で見ると、○前略本月四日發大阪、到三和大和八木、見三谷昇平翁、六日復到五條、今日迄留滯、森田にて史記頂羽紀、淮陰傳、及孫子十三篇ノ文法をキク、甚妙、○後收ノ文末闕ク、節齋ヨリ森哲之助ニ與ヘシ狀ト合見不覺長逗留ニ相成、更衣之節忽至リ、驚駭シ發程明日ニ相決申候事、矩万事、文事ヲ治ムルニ精力ヲ注ガンカ、又文章ヲ棄絶シテ專ラ韜鈴○兵法に用ンカト心緒錯亂仕候處、近日斷然一決シテ急ニ江戸ニ向ヒ、韜鈴ヲ治メント心定仕候、委曲著府後可ニ申上候事、矩方是ヨリ田井莊○森哲之助、三山門人八木谷三山の行、郡山にて安元杜預三ヲ訪、伊勢之津へ行、美濃○長原武ノ在否ヲ尋マルタメナヨリ木曾山中ヲ通り、江戸へ下リ可申、今月末までニハ參り度心算仕居候、雖然凡事可ニ豫觀難候、誠如孔明之言、○下文闕ク、吉田家藏とあるのに據れば、彼れの日録に缺く間は、節齋に就いての勉強に忙殺された爲めであらう。ところで其の間、特に彼れの學的心境に動搖を來したのは、常に實學を以て苟しくも國家に立たんと信念せるものにとつて、詩歌、文章の類を欲せざるを（事實は其の天分あるけれど）自ら亦之に警めて來た。然るに曩の東征日記をして彼の東湖が下斗米傳をも凌ぐに足る名文を用ひ、嘗ては同藩士なる江幡の傳を撰述せうとしたのは、一に水戸の修史事業や山陽の日本外史、諸家の史傳に傾倒するやうな大きな牽制と憧憬が手傳つたこと、一度は生死を共にしてまで應援を肩くした五郎の義舉錄なる東征日記を實地に著述するに當り、彼

れは遽にさう感じたのであらうか。

是れより先同月二十九日堤孝亭に在つて、父叔兄に宛てた文末に「治心氣齋先生○松陰家學ノ師山田宇門、來原兄○真藏、近日何如情態、久保○清太生亦何如、別に無書可然御致意奉頼候、欲し學作文、莫如從節齋、節齋論文律、精嚴拆毫釐、而大眼一視全局、最其所長、常舉金聖歎語云、此一條古今人言及者絶少、部有部法、篇有篇法、章有章法、句有句法、字有字法、而方則不服、此段三氏○山田、來原、久保に御話奉頼候、○松陰先生遺著所收と文章學に就いて申遣つてをる。是れは從來彼れの見地から言ふと、文章、辭句、詰り今の純文藝の如きは卑級に屬するもので、兵家、學者の執るべき仕業でないと蔑視した者が、節齋に師事してから、何故か甚だ之に傾向したばかりでなく、遽に友人五郎の傳に其の方面の效用を試みた等で、多感多志の心を動かさざるを得ない環境に暫く在つたのである。乃ち彼れの五條滯在中、殊に本月七日より二十日までの日録が闕いた原因は、按ふに今まで文章に關し何も言はぬ節齋から急に作文、作詩の事ばかり終日聽き夜に入りて猶實習する等、息もつかさぬ勉強に逐はれたゆゑであらうか。日録末の「雜記に見る節齋の『文筆難攀古賢、匹如瓦礫不當錢、何圖僉父誤爲玉、梓布人間未定編、』は、其の頃松陰に示したものであらうか。節齋とて文、詩を以て能事としたのであるまいが、夫れにしても近世末の名文家には相違なかつた。例へば後ち彼れが慶應元年の撰文に依つて、

吉野如意輪堂側に建てられた小楠公髻塚碑で首肯されよう。恐らく之は全國吉野朝忠臣の碑文中第一位に認められ、現代なほ有名の評判を保つてをるでないか。兎に角松陰は一時累代の家學をも抛つて文事を修むるに精力を注がんか、又文事を絶廢して専ら兵學を研鑽するかに、發作否傾向的心境の急變を招徠したのであるが、斷然一決して近日江戸に下り、兵學を究めんと元に還つた前後の状態を家兄に通知したのは、前に收めたので知られよう。彼れほどの者も一の文學者と爲らんを欲し、逡巡、大息したのは事實で、一方の森田にしても彼れの天分を見込んで慫慂したのであらうが、最後に至つて自ら斯の危地を脱し、以前の信念に戻り卓然自ら之を解決したのである。

二十一日久しぶりで松陰は節齋の許を出て田井莊に至り、藤井隆菴の家を宿とし、(近所に住むか)森哲之助(竹汀)を訪問した。此の者は谷三山の高弟で學問もあり、森田から次の様な紹介狀を貰つて訪問した。即ち「呈一書候、筆硯益御多祥珍重奉賀候、扱此生兼て御囑申置候長州藩士吉田寅次郎と申者に御座候、此間浪華より歸來、○是レヨリ先松陰、節齋ノ用務ヲ承ケテ三月晦日大阪ニ赴キ、翌月五日八木ニ、六日五條ニ歸ル、從僕讀史記論纂及孫子、孫子與生反覈、討論、可從者不_レ少、其故態々相遣申候、疑義御質申候、與生御相談、老兄○哲之助御存念承度候、尤此間より一老臺○三山之奇說相話候處、生抵掌稱妙、人物至テ篤實、學志實用、無御心置御話可被下候、○下文闕ク、但シ日録ト併看スレバ、四月二十日頃、

節齋ヨリ吾之勳ニ與ヘシモノナルコト明カナリ、(學碩學谷三山所收)此くの如きで、明日も彼れを訪ねて孫子訓詁を論じ、二十三日亦此等を論じ、或は哲之助の嫡子吉太郎や隆菴の弟重平などとも話てをる。其の翌日は缺録して不明であるが、森と論じ續けたやうで、二十五日田井莊を發して五條に歸つた。そして翌日から晦日まで、節齋の侄貞二郎が堤孝亭に日參するの、松陰は彼れの爲め史記の項羽紀を講じてゐる。實に忙しい日課であつた。

以上の始末で松陰の五條滞在は初定と太だ違つて、意外の時日を過し、夏も半ばに入らうとしたのに駭き、忽卒として出發することにした。三月十三日以来節齋から幾多の指教を受けた彼れは訣別を惜み、癸丑遊歴日録」と苦心の「東征日記」を携へて、五月朔日堤孝亭(塾宅)を發足し、再び田井莊に至つて、藤井の家に投じ、森を訪泊、二日吉太郎を伴つて立ち、八木に二度、獨學精研和漢の書に通ぜざるなしと謂はれる聾儒の三山を訪ねた。此の日なほ節齋は谷宛の添書を松陰に持參せしめて「呈一書候、此度吉田生携與拙堂書、東行、因附一書候、○中異傳商榷(之ノ寫談)一書、日々渴望拜見仕度候、吉生ヨリ二三條承リ、抵掌呼妙、此生、老臺議論一々記於心、爲僕語之、曠世之碩儒ト驚嘆いたし候、此間方從僕讀孫子、森○吾之(ハ寫談ニヤ)之に參り質疑いたし候、○下文略、東京市佐伯仲藏寫本所收と飽くまで彼れの人物を稱してをる。

三日谷より大なる啓蒙を受けた松陰は、又彼れに別離の情を残して出足し、郡山に至り、節

齋の門人である安元杜預藏を訪問した。但し日録には之を關いてをるが、本月九日、安元より節齋に贈つた手紙の「三日長藩吉田生花墨携、遠方之處、迂路過訪被^(僕)致候、小生義漸其十四五日前、家督襲秩被^(僕)命候、蟬冗紛起、殊ニ四日五日城内當直ニテ漸就城下一小店、會^(僕)生、々翌日仗劍東行誠ニ大失敬仕候、○前後略、大和郡山市安元年彦藏」で幸ひ補はれる。彼れは其の三日郡山城下に泊り、四日同藩の儒員で、節齋の門人なる藤川禎二を訪問した。是のものは大和で谷や森田に次ぐるの學識のあつたのが、先月二十九日家郷の父叔兄に宛てた書面でも一息されよう。右の日午後郡山を發し、奈良の社佛を參拜し、夜は垂井の小刀屋善助に泊つた。十一日彼れは伊勢の津から節齋に送つた狀に、「郡山安元○杜預藏生トハ一夜旅宿ニ而談候ヒシ也、談緒、蜂生甚殘情に奉^(僕)存候、兼而承り及候通、痘痕滿面與僕同相、津々談兵與僕同癖、實ニ一見如舊ニ御座候、○中杜預生入大番組、勤番モ煩シク、又同組并組頭ノ爲めに左支右吾シテ周旋甚勞候ヨシ、○前後略、同家藏」とある。茲に及んで附帶的に考ふべきは、是の時松陰が所持した「東征日記」を杜預藏に見せたか何うかばかりでなく、既に本稿に序を、彼れの弟で節齋の門人のみならず、五郎や松陰と同友であつた魯三郎に求め、更に藤川の同手寫本が、今なほ原本の未發に拘はらざるに、題が「東征稿」と變つて安元家に藏されてゐる。殊には松陰が大和に往訪した重要な執筆稿に對し、節齋同門下と云ふ一片由縁りの魯に序文を促し、且藤

川の寫録した經緯も不可解である。然るに日録には無論、常に克明精緻の書癖性を有つ彼れの記録、書狀の何ものにも見えないのは、聊か奇異の感であるまいか。

原題の筈なる「東征日記」が何時しか「東征稿」と簡潔の書名に改められた、現存の藤川手

寫本の卷首に見られる序とは如何なるものか、即ち『東征稿叙』○嘉永三年、春、五藏開二國內

○盛岡有レ變、而兄死レ之、謂レ余曰、我將二東歸爲レ兄報レ讐、請與レ子自レ此別、爾來四年、不レ知二

其所レ爲如何也、頃者邇二近吉田生、觀二其東征稿者、其竄二匿武總之間、奔二走奥羽之外、欲レ報二其

讐二而未レ得之狀、歷々可レ見也、嗚呼五藏以二一書 生、欲レ爲二烈士所レ爲、難矣、而其志百折不レ撓、

可レ不レ謂レ賢哉、吉田生將二東訪二五藏、使二余叙二其東征稿二、因憶五藏之與レ余別也、先考 ○杜預、魯兄弟ノ

父藤右衛門、本年二月九日歿、猶在、先考爲畫計教レ之、今觀二五藏之所レ爲、率、先考之意也、嗚呼先考往矣、五

藏不レ可レ見、五藏縱奉二先考之意、不レ得レ使二先考復視二焉矣、今生行與二五藏二相逢、則先以二此

言二告レ之、癸丑年○同六秋、安元魯レとし、猶本稿の近年奥書には其の子彦助が「右東征稿一篇

閑翁岡村 ○藤川前二、實ハ通稱定二、又ハ於菟馬、名正尹、字子文、閑堂ト號シ、郡山藩儒冬齋ノ子、先生所ニ手

寫也、錄以添云、大正十一年四月十二日、病中執筆、安元彦、○後ヲ柳生藩ノ岡村氏ヲ冒シ、通稱鼎三、名達、字仲章ニ改メ、晩年閑翁以下ノ號アリ、と書いてをる。

是れより先大正六年六月十五日創刊、大阪市南區春秋社の「史文」雜誌に、彦助が該本を和譯して寄稿したのが掲載された。序でに前の文と引合せてみるに『吉田松陰遺文東征稿、先考

○魯三の遺稿中、東征稿叙一篇あり、こは吉田松陰が嘉永四年亥歲、宮部鼎藏と共に東北に漫

遊し、其友江幡五郎復仇の顛末を記載せしものなり、○中彦前年此東征稿に就き、岡村閑翁○森

節齋門人にして、江幡五郎の社友なり、六年九十一歳、生駒山に現住、に質す所あり、翁曰く、余往歲尊嚴○彦の亡父、名は魯、後司直と改む、岡村、

友より聞く所によれば、東征稿は松陰が森田節齋翁に從遊の際作る所、而して節齋大に改削、

補正せられたる文なり、○下此の次より本書の叙（魯三郎）と本文（松陰）及び跋（節齋）の

漢文を和譯したもので、其の最後に「彦、松陰手蹟の國風三首を傳來、所藏せり、本稿、逢隈

河上の別に、牽連せるものあるを以て、併せて左に録す、尙ほ五郎の復讐に關する逸事は、更

にこれを掲載せんとす、かくしつゝいつを限りとながらへん同じ旅寢に歳を送りて、名にしお

ふ甲斐社なれみちのくの逢隈川に君にわかれつ、○右復二宮部鼎藏歌、鼎藏歌云、名にしおふ甲

妻もありけりみちのくの逢隈川に君にわかれつ、○松陰東北遊日記、三、月二十二日ノ條參照、と記してゐる。斯くの如

く前後と通じて、一脈的に由縁りのあつたのは肯かれよう。

さて以上の岡村手寫本、他の關係記事等を、姑らく信ずると、魯は其の頃なほ節齋の許に入してゐたやうで、松陰が五條に赴ける以來、彼れと親交する間、東征日記が成つたので、魯が借覽且手寫する時は、東征稿と改められてゐたやうに思ふ。かくして松陰が節齋を辭すに際し、夙に五郎とは同門、又自分とも同友と爲つたので、序を彼れに求めるに至つたかも知れぬ。

それが岡村本に據つて唯だ一つ現在に傳へられる所以であるが、序の成立が同三年秋としてゐるのに少しの疑問が起きよう。該の序に據ると、同年春後、五郎は安藝から大和に赴き、節齋に郷藩の變を語つた時、魯にも亦聞かせたばかりでなく、却つて彼れの父藤右衛門より復仇の計畫を指示され、爰に策を決して大阪に至り、翌年春夏の何れか江戸へ下つたことになる。故に安元親子の聲援關係から推究しても、最初の寫本は魯に依つて出来たと見定められまいか。

一方岡村の手寫せる事情も亦不分りで、松陰が郡山城下に當時の藤川を訪問したのは、魯の兄を訪ねし翌る僅に半日のうちで、且節齋より彼れに附して依頼した津の齋藤拙堂へ届ける國字匡謬書なる稿本の淨書の了るのを待つて、行かなければならなかつたから、其の他になほ東征稿を貸與して寫録せしむる餘裕なごあり得ない。況んや彼れが手寫本卷首に見る魯の序は、松陰の夏初めの出立に係くべきを、秋の撰に成つてゐるのも、是の際でないのを證してゐるではないか。以上のやうに考へると松陰が大和出立當時、魯の序なるものは其の實未だ出来てをらず、従つて岡村本の如き、或は魯の初寫本より轉寫するに際し、始めて序が出来たと認められよう。この裏書は松陰が藤川を訪ねる時、玄關で用ゐた『松平大膳大夫○毛利敬親内、吉田大次郎』の名刺が幸ひ岡村に藏したのを、明治末、安元彦助の懇請に應じ、八十六歳であつた彼れは此れに追憶の題感を撰して呈した。併しながら岡村の手寫本に就き、何も附述してゐない。

機がないから、僞叙か追記か斷言出来ぬ。序でに杜預三が公命に依り江戸に出たのが、翌安政元年正月で、閏六月に早歿した。孰れにしても本書は藤川に依つて遺存されるに至つたので、東北亡命旅行と五郎の關係が卒直に解され、又節齋と三山の如き有名な文章家と碩儒が應援、添削したのであるから、松陰の少ない人物傳中共の苦心よりしても最高の名文的の價値があり、彼の藤田東湖が下斗米將眞傳に比べて、決して遜色ない特異のものたるのは言ふまでもなからう。

五日奈良を出足、爾來山城、伊賀を経て伊勢に至り、外宮を參拜（内宮には明かでないが、彼れの精神上必ず詣つたと確信する）し、是れより道を中仙道に取り二十四日江戸に著き、桶町の鳥山塾に投じ、當分こゝに寄寓することゝした。以上道途間に於ける訪問者や名所、舊蹟の見物、地理の状況等は、日録と諸人に遣つた手紙で詳細に知られるから一々引例しないが、但だ家兄に宛てた二十三日より翌日まで書續ぎの一狀を抄録し、以上の辯に代へておく。『上家伯教大兄案下、途日甚著相成、彌御闔門御康寧奉_三遠想_二候、扱_一矩方事道中無異、明日著府仕候、五月朔日犬養德國五條驛_ハ所_レ發之書已_ニ相達候と奉_レ察候、○本狀 矩方以_ニ朔日_一發_ニ五條_一、未發

至_ニ田井莊_一訪_ニ森哲之介_一宿仕候、二日至_ニ八木_一訪_ニ谷昌平_一亦一宿、昌平之學毎_レ逢奇_レ之、三日至_ニ郡山_一訪_ニ安元杜預三_一一宿、亦一有志人、四日宿_ニ奈良_一、五日宿_ニ伊賀上野_一、六日至_ニ津_一訪_ニ河村貞三_一、八日伊勢參宮、伊勢之法必御拔_ヲ送り來ル、大夫_ニ宿_シ候法故、村山へ宿_シ申候、訪_ニ

足代權大夫、其人物諄々善談不負所聞也、九日津ニ歸ル、十日齊藤拙堂ニ其山莊ニ遇フ、十一日遇水沼久太夫、山鹿流兵家なり、十二日至桑名、訪森伸助、遂夜中伸助と同舟にて至美濃國大垣、是夜宿ミエジ、大垣にて訪山鹿流兵家山本多右衛門、良齋門人井上壯二郎、十四日宿大田、十五日宿大湫、十六日逢田邊定輔者、是日宿三戸野、十七日福島、十八日洗馬、十九日和田、廿日杳掛、廿一日高崎、廿二日熊谷、廿三日蕨ニ宿申候、道中頗健、又梅雨中ニても雨少ク、終日フリ候は僅カニ兩日ノミ、右此迄は蕨驛舎にて認置候事、已下廿四日江戸著後所認略、至江戸、投鳥山新三郎家、今日著懸ヶ齊藤、劍客之塾、三番まで参り候處、井上壯太郎、此節御屋鋪、櫻田邸に歸り居候由桂小五郎及び松村文祥、赤根才助ニ逢申候、山鹿素水も無異、美濃長原武も又關東へ再來ノヨシ、美濃大垣にて聞之、雖未詳其何如、矩方之喜可也、鳥山宅に越後三條ノ一向僧北條秀英ナルモノアリ、亦寄士、但一昨年々所知ノ人、東北遊日記、村上寛齋歸國、羽庄社中ノ一奇人ヲ失フヨシ、良藏へ御話奉賴候、玉文人へ無別書候事、吉田家藏とあつて、松陰は昨年四月十八日東北亡命旅行罪で萩に歸國を命ぜられてより、大凡そ一年目で江戸に第二の遊學に入つたのである。實に見るもの聞くもの再生の感であつた。然し翌日鎌倉の瑞泉寺に伯父竹院を訪問、六月朔日まで滞在、二日櫻田邸に井上壯太郎、道家龍助、瀬能吉次郎を訪ひ、其の明日は佐久間象山に再遊の挨拶に行つた。

詰り松陰は第一回遊學の時は、象山の見識を普通に見做してゐたが、今や異數の人物なるを識るに至つて尊敬し、時恰も國家は外交の難局に立つに於て、斯の人物外に求め得べき師がないと、心に入門を仕直したのである。

兎に角彼れの東北亡命遊歴は、學問と精神上に重大轉機を享け、且種々な收獲を受けたのであるから、當初の目的は完全に達し得たと言つてよい。従つて其の罪は固より匹夫の自取的行動より發したとはいへ、思想や信念上には甚だ効果があつたのである。然し君恩に依つて十年間猶豫され、先づ大和に行つたのは、五郎の約束や其の跡始末を附ける爲めに外ならぬ。烈、不烈者の心の分岐は、毎ねに其等の行爲に因つて瞭かに區別されよう。苟しくも夙に殉國的教育を標榜して起ち、并に之が實踐躬行を絶対に信奉して、天下國家に臨むは勿論、一人間に對しても同様に各自の正義を信ずる者にとつては、永遠に變易がないのである。既に松陰は人と爲りて斯の精神を固持し、一度び東北旅行に因つて自己の動向を鞭撻せられ、且爰に刮目すべきは、該の待罪中「松陰」の正號を立てたのに對し、深く考及すべき問題が潜在するのに、最大の注目を牽かなければならぬ。其の明年六月米使ベリが來航して、我が國に通商の強要を迫るに及び、有史以來の外交難局に遭遇した。是れに於てか松陰は敢然蹶起し、己れの持論と

する神州の擁護と攘夷の決行に如かずと身を挺し、爾後歴々として悲壯の運動を續け、最後まで獄中、獄外に之を指令して已むことなく、安政六年十月江戸傳馬獄に無残にも斬首され、三十歳の短き一生を來るべき明治維新に捧げて終つたのである。嗟吁。

然らば一方の江幡五郎の烈、不烈の對照は何如。彼れは松陰、鼎藏と奥州戸澤で別れる前後より、義舉を抱く身を持ち乍ら、石巻の栗野木工右衛門宅に寄寓、或は出入し、剩さへ其の娘を妻としたのはよからうが、毎ねに時機の到來を待つと稱し、荏苒歲月を送つたに止まらず、嘉永六年八月(石巻よりか)漂然江戸に上つて松陰等と再び會し、安政二年六月は牧山より江戸に上つたのが、國友と五郎日記に明かであるばかりでなく、舊友人等の書面で屢見される。其の際彼れは手紙に自由して、「小子はいづれへも面晤不仕候、小子身上ハ天下の笑草と相成候○前後略、安政二年八月二十二日五郎ガ江戸ニテ、萩ノ野山獄ニ在ル松陰ニ遺レル狀、(吉田家藏)」の如き苦汁を吐いてをる。彼れの舉決を絶対に信じて來た峻烈の裡にも濃厚、何物も寛量し、嘗て友人の諍名に違はず、今以て仙人の態度を墮さず、獄中に江幡を見放すに至るといへ、尙一片の憐察を以て諒してゐる松陰にさへ「吾樓又候出府○江戸ニ出デタルコト」之由、嗟愕此事ニ御座候、○前同、但シ文末闕クモ、同年(九月九日ナルベシ)江戸ニ上ル來原ニ遺ハス狀、毛利元道藏、と慨歎、疑義の情を表したほどである。最も不烈な行狀の例を引くと「五郎事、如何なる事を貴兄へ申譯有之候哉、彼モト妻ヲ貯へ、○松陰、國友半右衛門、五郎日記等ヲ參考」子ヲ生候、期會ハ已ニ失シ、無詮方罷在候處、

東條○一堂、五郎ノ師老人之志ニテ、彼レヲ歸國爲レ致度よし被レ頼候間、我等より書面遣し呼迎申候、然し餘り賣あるき候事ハ不成様ニ異見ヲ加ヘ置候間、終始東條熟ニのミ塾居申候、乍去彼レモ才と口之男ニテ、智と勇とハ少しく短なる男と被レ思召可レ然事ニ候、前々申上候通、戰國(サ)ならバ遊説客ニしらならぬ男ニ御座候、貴兄之知る所、近澤(説アルカ)言之如く、終憂死致候、可レ憐可レ憐、○前同、同年十一月二十七日、鳥山ヨリ獄中ノ松陰ニ送レル狀、(吉田家藏)」で詳しく言ひ盡くされてをり、殊に五郎の最も親友であつた濱野章吉が長生(兄)として、大正二年頃の五月二十四日平井榮に回答したのに據れば「江幡は毎度人に向ひ、叔父の仇を復する様の事を盛んに吹聴し居たるに、特に實行せず、非評を招きたり、○義所鳥山先生所收」と嫌れてをる。曩に彼れの義舉を聲援し、松陰、鼎藏が生死を共にしてまで應援せうとしたのを、後になつて根柢から裏切つた爲め、舊友から呆然とした侮蔑と激憤とを買つたのは當然であるまいか。斯うした誹謗の例はまだまだ同志間の狀に見出し得るが、今限りないから省略するとして、實際五郎の不烈、不義は畢竟松陰の羨んだ東北の英雄とは、宵よりも附かぬ不勇人間で、徒らに生を淪安する爲め、義節を看板にして、江戸と石巻間を濶歩し、果ては遁げ竄れしつゝ自分亦慚愧の日を送るに恟々するが如き、元來が彼れの性行に徴して、自決さへ見出し得ぬ者であつた。

彼れの不烈さは夫れ而已でない。松陰が刑に遭つた然も同年、「會權臣○兄ノ仇田鐵左膳」伏罪、兄

子○春童カ、復祿、乃還至江戸、聚徒教授、聲譽噪于儒林、俟○盛岡、嘉其成業、不問舊罪、八歳文虎カ、復祿、乃還至江戸、聚徒教授、聲譽噪于儒林、俟○盛岡、嘉其成業、不問舊罪、八歳ノ時、藩ヲ出奔シテ江戸大和、安藝ニ遊學、更祿六十石、實安政六年也、明年召爲藩學教授、乃治裝北歸、過鬼柳關、父老聚觀、其指目曰、彼果不負昔日之言矣、○中娶栗野氏、生二女、配同藩士族藤村政徳第三子通世爲嗣、○前後とは、啞々是れ明治十二年五月一日五郎が東京自宅で死歿（五十三）後に、川田剛の撰文に依つて青山墓地に建てた碑銘である。兄の子は恩命に浴して祿を復し、五郎は新たに六十石を給せられ、嘗て豪語して越境した鬼柳關を其の言の通りに至つて通行し、郷藩人に羨望さるゝ身分となつた。二者の人生的運命の對照は餘りにも哀烈であり皮肉であるが、其の行動から之を批判すれば固より雲泥の差異があらう。不烈ならざる精神は永遠に滅せぬばかりでなく、尊攘家の鞏固な信念には絶対に人を信賴して詐りなく止むのである。不烈、不義なる者は縦ひ高位、高職を偶然に獲得するとも、江幡の下半生の場合は宛ら日陰者の武士、似而非儒者であり、従つて彼れの墓碑は其の實、後世に僞撰を曝露し、常に正しき民衆に非難され、地下に侮辱を受けても猶足りなからう。況んや五郎をして宮部の終始不易なる勁烈と比較すれば、其の霄壤の隔差は言ふまでもない。蓋し松陰、鼎藏は國史を自ら創造し、五郎の類に至つては、自ら之より慚ぢ竄れる好箇の對照であるまいか。

一〇 松陰の日記及紀傳、鼎藏の同行日記

（一）吉田松陰「東北遊日記」（他筆自訂書入本）

東北遊日記

○本書ノ解題的略述ハ本論ノ自序、凡例、及ビ五、六、九章ノ各篇ヲ併見スベシ、但シ本書ノ前ニ、宮部鼎藏ノ房州觀察日記「假題」ヲ連絡參考ヲ要ス、

有志之士、時平則讀書學道、論經國之大計、議古今之得失、一旦變起、則從戎馬之間、料敵締交、建長策而利國家、是平生之志也、然而茫乎天下之形勢、何以得之、余客歲遊鎮西、今春抵東武、略跋涉畿内山陽西海東海、而東山北陸、土曠山峻、自古英雄割據焉、奸兇巢穴焉、且東連滿洲、北隣鄂羅、是最經國大計之所關、而宜觀古今得失者也、而余未經其地、深以爲恨矣、頃肥人宮部鼎藏謀東北遊于余、余喜而諾之、會與人安藝五藏亦將抵常奥、遂相約同行矣、余因作一冊子、古今得失、山川形勢、凡所目擊、皆將以日記之、○コノ序初稿本ニナシ、蓋シ翌年歸國、屏居待歸中ノ整理増補ニ據ルコト明カナリ、

嘉永四年臘月

吉田大次郎藤矩方識

辛亥十二月十四日、霧、已時亡命櫻田邸、留一詩云、一別如胡越、再逢已無期、舉頭觀宇宙、大道到處隨、明月無古今、白日同華夷、高山與景行、仰行豈復疑、不忠不孝事、誰肯甘爲之、一諾不可忽、流落何足辭、縱爲一時負、報國尙堪爲、又留一封書、與宮部鼎藏、安藝五藏、○以上書未發、言其由、初以本月十五日赤穂義士遂事之日也、余與三子約東行發軔、以是日、前數日過書之事起、藩人來原良藏曰、勿憂吾論諸大夫、○世子以必行定志、乃謂三子曰、決無不可行之理、余服良藏之果斷、心竊自誓曰、官若不允、吾必亡命矣、於是遲疑、人必曰長州人優柔不斷、是辱國家也、亡命者雖如負國家、而其罪止一身、比之辱國家、得失何如歟、既而良藏謂之大夫、大夫曰、且與參政議、參政曰、無過書而越境、萬一有事、不得確乎稱松平大膳大夫臣吉田大次郎、口未開而膽先餒矣、安保不辱國體乎、此事縱令有千百故事、非仰公裁、決不可擅斷、大夫無如其論確而志堅、遂以事首國、而余則行所自誓、非不顧負國家、誠丈夫一諾不可忽也、夫大丈夫出國、一言可以榮國、又可辱國、國家榮辱之所係、豈區々一身之故哉、越千住橋、至千住驛、日本橋至此二里、皆連薨鱗々中也、右折

(初稿本)
江戸日本橋ヨリ

千住へ二里、而シテ新宿へ一里半、而シテ松戸へ一里半、凡五里餘、

(前同) 人家頗多シ、然レドモ予ガ亡命ヲ知ルカ、亦一人旅故カ、一家モ予ヲ宿セシメズ、本郷村ニ至リ、民家ニ入、隣ヲ乞フ、亦許サズ、

(前同) 十五日、村童ノ爲ニ學而ノ首章ヲ講ズ、朝五ツ時寺ヲ出、

(前同) 山田三郎ヲ問ヘドモ知レズ、水海道ヨリ、一奴ヲ伴ヒ行ク、

(前同) 右折シテ小路ニ入ル、是ヨリ奴ト分ル、半腹ニ宿ス、通一丁目ト云所也、

取道、是爲水戸道、々狹家稀、四顧不見山、唯有平田漫々耳、過綾瀨川橋、○地名ニ振假名アルハ、概ネ鑄經新宿、至松戸驛、新宿驛前有中川、松戸驛前有松戸川、皆舟濟之、其不架橋、便舟之上下者、張帆而過也、松戸川兩岸有番所、驛前立柱、書曰御代官竹垣三右衛門支配所、自此下總葛飾郡也、時日已落、欲宿此驛、而恐追捕或及、至本郷村、入山二町許、投本福寺、寺係時宗、僧了音者在焉、變姓名曰長州鄙人松野他三郎、亦遊歷中一奇事也、行程五里餘、

十五日、晴、辰時出寺、行三里、爲小金驛、過驛、則廣原漫々、即小金原、而幕府操場也、見野馬九匹、(鑄、正ニ作ル)過原、右視手賀沼、直行、則可經安彦諸驛、過土浦、以至水戸、余欲過水海道、故左折而入小路、(脱アルカ)經花井村、出船戶、舟濟刀根川、筑波山當面前、因作詩云、筑波山刀根川、吾今俯仰發浩嘆、刀根之川遠達海、筑波之山高衝天、吾原浮躁淺露質、觀物寓戒豈徒然、氣象高峻志趣遠、須臾勿忘川與山、濟川行平原中、宿水海道、行程八里、自左折入小路、皆田間原中、路岐多端、且迷且得、而後始得達水海道驛、時既夜、○上ノ三字鑄方本ニナシ、

十六日、晴、出驛行少許、右折入田間小路、舟濟小貝川、是爲四手渡川、發源于小栗、至土田井、入刀根川云、出豐田驛、又右折入松間小路、經大砂、田中諸村、出北條驛、是土浦侯所領、登筑波半腹、有驛、宿焉、筑波、山名、亦以名驛名郡、屬常陸國、時天日尙高、眺望甚濶、快不可言、行程七里、

(前同)
十七日朝、主人山田飛ガ詩數幅ヲ出シ示シ、且余ガ作ヲ求ム、

(前同)
此日行程八里、山ヲ攀テ荊ヲ排キ、行步頗勞ス、月出テ笠間ニ入リ宿ス、牧野左京大夫八萬石ノ城下ナリ、

(前同)
此夜、大町ト云ニ宿ス、

十七日、晴、出驛、極筑波二巔、一曰男體、一曰女體、是日、天氣晴朗、眺望特宜、關東八州之形勢、歷々可指、山而富士、日光、奈須、水而刀根、那珂、皆聚于目前、但余暗于地理、且獨行蝸々、不能論評其山水爲憾耳、有詩、云、去年今月在鎮西、溫泉嶽上極攀躋、當時風雪掠空起、蘇山筑水望總迷、今年反作關東役、季冬乃跨筑波脊、左右顧盼快愉哉、富山白玉刀水碧、一身踪跡且難常、何況天上陰與晴、賀生哭死定幾許、千里人煙色蒼々、嗚呼溫泉自有蘇筑友、筑波自有富刀耦、不似游子辭家鄉、睽離兄弟與父母、越嶺、下眞壁、々々、驛名、亦以名郡、係笠間侯所領、過驛行里許、越休惠山、便道出笠間、々々文武分館、文曰時習館、武曰講武館、夜錄余姓名、使人文館教授森田哲之進、且告所以來者、爲學兵與

經也、

(前同)
孟子首章ヲ講シ、登筑波山ノ詩ヲ示ス、

十八日、晴、朝、時習館小吏大田尾安藏來、問余學所主、午時又來、導余至館、學館番頭加茂多十郎、須藤文太夫、目附某々、教授森田哲之進、長沼流兵家守岡善八郎、及諸學職諸生皆會、凡二十五人、座次齊整、談論不甚快、使余講經、余講孟子首章、蓋館法也、夜、手塚多助來訪、兵家也、談論數次、多助語曰、往年水府老公○齊昭ナ之時、余嘗遊焉、寓砲家梅澤孫太郎家、一夕比隣喧嘈、余驚問之、梅澤曰、鑄砲耳、余起往見之、銅佛鐘磬、積堆如山、方鼓鑄起火、叩其所由來、則曰、收佛寺所有而聚之、余拍掌稱快、後聞之、有忽砲口徑六寸、及七寸、共以六十四卦爲號、又有以周興嗣千文爲號者、其他以八卦以三十六禽爲號之類、不可勝數矣、方是時比隣之國、見公之所爲、且嫉且駭、爲狂爲暴、不久公遂獲罪於幕府、於是武備之政忽諸、小國從大國之後、亦將有所更張、及公既獲罪、備々畏縮之不暇、又何能爲、千歲機會、一朝而去、可勝嘆哉、

十九日、霧、發笠間、經新關、大足、大塚、赤塚、至水戸、未至水戸一里、立柱標、曰、從是東水戸領、訪永井政助、政助不在、逢子芳之助、留

此所ヨリ又少シ手前、陂塘アリ、此地共戸領ト云、

(前同) 水戸城下ニ至
リ、堀土居ニ遇
フ、二ツ市町ト
云フ所ニ至リ、
永井政介ヲ訪
フ、政助不レ在
子順成ニアフ、

(前同) 廿日、終日看
讀、是日、弘道
館稽古終ノ由ニ
テ、順成已時ヨ
リ出、

(前同) 廿一日、朝、政
介ト酒ヲ飲テ
後、會澤憩齋ヲ
訪フ、會澤宅前
ヨリ千波湖見
ユ、

(前同) 廿三日、哺前ニ
歸リ來ル、青山
著ス所ノ四十七
士傳ヲ讀ム、

余宿焉、行程五里、笠間水戸皆屬茨木郡、

廿日、晴、終日不出、哺時政助歸、夜作詩曰、書劍飄然滯天涯、志業未遂
歲空加、一身百感向誰說、枉借七字發浩歌、嗟吾天賦原劣弱、闕如雄才與
大略、慷慨志氣雖空存、讀書未得涉浩博、文字章句措不精、經濟實用亦
無成、舍魚遂併熊掌舍、廿年失策愧此生、家有父兄鄉師友、期我甚重
吾空負、送我之言警我書、三復忸怍吾顏厚、今年之日又將除、吾心之感竟
何如、中宵思之眠那得、剔燈且觀大史書、君不見先主肉髀悲歲月、三分
功業永不沒、丈夫存志豈空死、百年勿教壯心歇、

廿一日、晴、訪會澤憩齋、即常藏也、憩齋宅見高倉平三郎、

廿二日、晴、終日不出、

廿三日、晴、訪會澤、々々宅見青山量太郎、々々延于子、本爲天狗黨、聞
近爲姦黨所驅使、出入于吏局、意所謂昆蕪黨者也、因爾後不復相見矣、歸
見根本孝五郎、芳之助執友也、夜作題上總五郎忠光闕源右府圖詩、芳之
助等社友課題也、其詩云、失母慈烏啞々音、反哺未盡哀怨深、此情禽鳥尙或
有、何況人生臣子心、嗚呼西狩之駕無還日、闔門死難不遺一、六十六州

朝、東萊博議卒

郡珂彦五郎名通
辰爲佐義篤
所擒斬年四十

悉歸源、義軍糾合已無術、成敗利鈍命存天、且殲隻身報黃泉、嵌鱗眇目
厠役徒、一握七首志偏堅、人衆勝天亦何悲、斯人忠孝天地知、獨憾霸府逞
私怨、座令天下義氣衰、義士事逝成千古、于今聞者淚如雨、豫讓子房一流
人、豈於世道爲小補、漢高公義戮丁公、爲劉左祖人知忠、忠光一斃事可
慨、牝雞巢鳩有誰攻、漢四百年源三世、修短寧可委時勢、忠孝之氣塞
兩間、自是國家千年計、當食誰敢不食稻、當行誰敢不由道、人心忠孝
出自然、稅政使人不加鳥、

廿四日、晴、夜、宮部(熊本市宮部増信藏ノ鼎藏ガ篋ニ題セル詩アリ、北渡翁ニ夷攘、南汎踏ニ流
球、男兒平生志、好與此君謀、吉田矩方、トアリ、蓋シ松陰ノ江戸發足
日直前ノ、初、和泉丁伊勢屋彦六ト傍記ス)安藝來、相伴抵其旅舍、各語數日間之奇事、快甚、聞以余亡之日、
來原良藏上書、爲余任其罪、因是官不追捕余也、二子與鳥山新三良、

以二十五日發、先至泉岳寺、拜義士墓、平日所交遊皆追送焉、乃取路于
行德、過佐倉至下妻、鳥山自是而歸、二子則來水戸、皆未發之前所豫
約也、而余以先發不得與焉爲憾耳、安藝有故變姓名詐鄉貫、稱藝
人那珂彌八、々々之先江戸但馬守、實出于那珂彦五郎、則其稱那珂亦非妄
也、那珂、常陸郡名、而江戸、那珂村名也、彌八之先大於常陸、彦五郎死南

三、或云、戰敗自
殺、年月不詳、

朝王事、近年水府議爲立碑勒銘、遭國難不果、彌八之遊常、欲探祖宗之逸事也、是夜、余亦留宿焉、

廿五日、晴、朝歸、二子亦相尋來、午後與三子訪會澤、夜入市、買米炭諸品而還、二子亦同寓焉、

○本條ニ據レバ松陰、既ニ永井宅ニ自炊生活ヲ爲シ、ナルベク、鼎藏ト五郎ノ之ニ來ルニ及ビ、コノ日ヨリ三人全ク共同自炊ニ入リシヲ知ルベシ、

廿六日、晴、與三子訪豐田彦二郎、以病不逢、觀好文亭、借樂園即是也、

(初稿本)
彌八云、此レ事
ニ臨マバ牙城ト
ナフベシ、二人
然レ之、

亭一高墻也、列植以梅樹榉棠、環以隄塹、建制札云、四月至八月三八之日、下及百姓町人、不_(鑄、居)禁釣漁、余嘗讀景山老公所撰借樂園記、又聞其所作歌、云、世遠捨天山_(鑄、居)ニ入人山_(鑄、居)丹天毛尙憂時波、是遠尋_(訪イ)彌世、○ニノ歌「雜記」蓋公

之志可見矣、而今則荒廢、爲之唏噓不能去、過千波湖西登高陵、有平原、蓋操場也、拜車丹波祠、車、佐竹氏之臣也、佐竹氏徒封時嬰壁戰死云、

彌八母中田氏、實丹州之裔、彌八悵然作詩云 鴻雁北來雲氣惡、滿路墜葉驚索々、下馬再拜墓門松、感古涕淚揮又落、

憶得故侯北徒時、滿城人士泣追隨、祖宗城闕夜不鎖、推與他人恬不疑、獨有此君重苦節、笑跨孤馬任鞭馳、縱橫衝突氣益奮、十萬大軍遂披靡、馬革裹屍常事耳、男兒當爲天

下奇、我家與君本姻族、何以苦節揚先德、腰下寶刀鳴有聲、死矣負家生

負國、強收涕淚上前途、落日風寒洗馬湖、出千波湖西、繞城東北而

還、城初常陸大掾國香居之、後江戶氏、佐竹氏更取之、千波湖、那珂川、環而爲險、

廿七日、晴、終日不出、

廿八日、如昨、

廿九日、晴、將觀西山、瑞龍、同三子出永井家、舟濟那珂川、是爲青柳

渡、過常福寺、經額田宿大田驛、出驛十丁許、登瑞龍山、是列公墳墓所

在、歷世諡號曰威、義、肅、成、良、文、武、哀、舜水朱之瑜墓亦在焉、薄

暮還驛、行程六里、

壬子正月元日、晴、旅中閑靜、歲將除也無事可厭、歲已改也無新可賀、

是遊歷中最快事也、出驛將觀西山義公菟裘也、路過民根本儀兵衛家、拜

民長山理介之先、所賜義公手彫木像、立像高八寸許者也、世藏理介家、近理

介死、其子猶幼、故暫托根本云、西山、瑞龍近地、道傍多植櫻樹、至西山

觀菟裘、門舍屋壁、簡朴質陋、而泉石樹木則甚有風致、守者云、此地義公命

(前同) 宇二、五本骨ニ
日ノ丸ヲ出シタ
ル扇ヲ影ス

舜水所相、義公以來、屢次修葺、而未嘗少失舊樣、因追想義公之風、感嘆久之、前庭有景山公手植松、高已過屋、下西山取路于山間、至佐竹寺、佐竹侯舊菩提所也、門額彫佐竹氏章、寺背則佐竹故城址、而今則瀟望漫々、菜田麥圃也、有民清水民之進者、以爲吾輩秋田士人也、來爲導、特有懷古悵然之態、亦可觀人心矣、至小場村、宿所伊賀右衛門家、所江戸氏姻族、彌八欲問古、過之、伊賀者十年前國難之時、與四人共詣江戸、以公冤訴紀州侯云、今語其事、悲壯淋漓、使人落淚、余作詩記之云、雄坡村中弔古城、落日歸牛冥煙生、倦客來尋民家宿、樹際松枋照眼明、老翁兒孫眼環列、引吾入座不復驚、翁說吾祖所氏某、帶弓跨馬往勤王、爾後征戰經幾世、二百年來混編氓、又說先公遭厄日、抗疏侯門奉丹誠、賑恤撫字恩澤重、小人一死鴻毛輕、氣息奄々生何益、不如拔身當鼎鑪、何圖恩哉出分外、延生六十有五齡、語意慨然聲動座、忠憤不忝祖先名、嗟乎舉朝士夫皆如此、生民相忘擊壤聲、男兒流落未易料、時窮草莽見豪英、○水戸藩歷世竹、那珂氏等就キテハ、望月恆隆ノ常陸國誌、中山信名ノ新編常陸國誌、宮本玄球(尙一郎)ノ常陸誌料、佐竹侯爵家ノ諸記録ヲ參考、二日、晴、發所家、觀小場城址、小場佐竹族也、伊賀右衛門送至城址、指

(初稿本) 至湊傳三午餐、
湊人口衆庶、
水戸封内最繁盛
之地也、大田次

示塹壘之所、址背那珂川、沿川而下、至江戸村、訪民齋藤權兵衛、○東征稿亦參照、江戸氏也、彌八將寫其家古記、於是余與宮部先歸、沿川而下二里許、渡青柳上流、入水戸、薄暮至永井家、歲首樹松于門者、天下之通俗、而水府獨插松枝耳、極爲簡易、其制達庶人、按常陸帶門松之制、天保元年所改也、先是蓋亦如天下之通俗、○上ノ註、他本或ニナシ、三日、晴、終日不出、酉時、那珂五郎歸、四日、晴、初以歲晚歲初、家々冗劇、不便訪人也、爲西山、瑞龍之行而歸也、人家未聞、乃與三子及芳之助、謀銚子之遊、已時出家、渡青柳過小川修理、沿那珂川而下、經枝河至湊、此川注海處也、城至是二里、此及大田、水府封内最繁盛之地也、港口艱澁、岸上安礮臺、不赴觀爲憾、舟濟川、沿海過大貫村、至古奈地村而宿焉、村前有木柱、書曰、從是北、御代官小田又七郎支配所、行程凡六里、夜分韻賦詩、足跡遍天下、肩輕一囊、書畫數十葉、詩文幾百章、詳郡國形勢、寫忠孝心腸、可以資磨礱、可以維綱常、男兒平生志、蓬桑報四方、誰知汗漫遊、家國豈暫忘、五日、晴、發古奈地、行三里至汲上村、出海濱、行砂上五里、宿鹿島社傍、鹿島社名亦以名郡、夜課題曰客愁、各賦詩、余詩云、去國桃花節、復

(前同) 二人皆鹿島祠
官、雖或讀書
或作歌、要觀
人物、而非落
開、襟略言者、
(前同) 夜商、量都下儒
師、數次、吾樓善
辨、吾善睡矣、

聞黃栗留、發都國月曉、復見新月鉤、客子悲歲月、歲月空自流、不願千金
富、不願萬戶侯、韜略吾曾學、欲成報國謀、武威煌々耀、一朝略五洲、宇
宙古今際、斯志有誰儔、故國三千里、客愁永悠悠、
六日、晴、訪北條時之助、吉川仲之助、二人皆鹿島祠宮、拜鹿島社、行里許、
至鰐川、航行一里餘、至潮來、宿宮本庄一郎家、其子曰千藏、庄一郎頃撰
常陸志、○常陸志、鹿島流劍法家上條記云、夜少雨、作詩云、孤牀半夜夢難成、聽斷四檐點滴聲、回首
山河鄉國遠、阿兄今夜定何情、兄伯敬、愛雨、余所以有此感也、
七日、朝與庄一郎語、庄一郎國難之時、繫獄、々中有詩云、死去豫期葬
首陽、百年身世劍鏑霜、眠醒草底尋殘夢、落月光寒頭斷場、午前出宮本家、
行一里、至牛堀、泛舟於刀根川、刀根川發源于上野、浩々蕩々、至銚子
口、注海、俗所謂坂東太郎是也、常總以是川爲界、順流而下三里、至息
栖、日已沒矣、登陸喫飯、反而登舟、又下六里、至松岸、則夜已二鼓、登
陸而宿焉、
八日、晴、經長塚、本城、觀海及刀根川注海處、此地狀類銚子、是所以
名歟、戶口殷盛、百貨粗備、市廛間甚有江戸様、但港口沙淤、不便通舟爲

憾、聞係笠間侯信地、而守備單弱、蓋有所恃于地利歟、余乃作詩、曰、巨
江汨々流入海、商船幾隻銜尾泊、春風吹送絲竹聲、粉壁紅樓自成郭、吾來添
纜壬子年、倚檣一望天地廓、遠帆如鳥近帆牛、潮去潮來煙漠々、歐邏、亞墨
知何處、決眦東南情懷惡、眉山之老骨已朽、何人復有審敵作、仄聞身毒與滿
清、宴安或被他人掠、杞人有憂豈得已、閑却袖中綏邊略、強開樽酒發浩
歌、滄溟如墨天日落、歸松岸而宿焉、往復四里、
九日、晴、舟折刀根川、宿息栖、舟行六里、
十日、晴、發息栖、至牛堀、欲航霞浦、直至玉造、舟子以風烈辭、強之
不聽、不得已舍舟、陸行五里、宿玉造、夜雨、
十一日、晴、朝發玉造、還水戶、則夜已初更、行路八里、此間糶廩及鄉貯稗倉
在焉、然失地名、常陸帶云、稗倉、義公所創、
○コノ注、他二本ニナシ、
十二日、晴、午後訪豐田彦二郎、彦二郎學問該博、議論痛快、使人憮然、其
嘗在史局、○彰考以獨力作神祇、氏族、兵制諸志、其外紀傳則分任諸子、
所著有靖海全策、世書、明書等、或成或未成、率皆卷帙浩瀚云、夜根本及
渡井初之進來話、去則鷄鳴、

十三日、晴、訪會澤及山國喜八郎、兵家也、共不在、訪桑原幾太郎、亦兵家也、

十四日、晴、訪會澤、會澤宅見海保帆平、帆平安中人、先公昭時以善劍聘以祿之、慰齋以女妻之、慰齋云、先公時有造大艦之議、材既聚矣、會有回祿之變、焚材、後不及再聚、而國難作焉、遂不果、慰齋今年七十一、矍鑠哉此翁也、

十五日、晴、終日不出、

十六日、晴、訪豐田、設酒歡語、

十七日、晴、訪會澤、訪會澤數次、率設酒、水府之風、接他邦人、欸待甚渥、歡然交欣、吐露心胸、無所隱匿、會有談論可聽者、必把筆記之、是其所以通天下之事、得天下之力歟、夜根本及原甚藏來話、

十八日、晴、作上父叔兄書、與來原良藏、兒玉初之進、小田村伊之助、林壽之進書、昨小田村、林書至、初二子在麻布邸、余以亡之前日抵其邸、謂暴白其事、使二子預議、則或至分其罪、因故欺二子、以有過書之事、暫緩其行、而二子不曉其意、反以不謀為咎、遣書詰責、然是非大義所

關、故不敢辨矣、但以余為負家國、而有所僥倖者、是不可不辨也、

因復書云、辱書、見責以僕逃亡、僕之背家國、其罪固大矣、不必為區々緣飾也、然僕嘗竊奉君子之教、天下無無君之國、亦無無父之鄉、安有永棄君父、以謀利者乎、但僕出門之日、有所自誓焉、不得為知己

一言之也、夫枉尺直尋、雖孟子之所不取、然忍小謀大、則孔門之教也、僕已枉尺矣、安能直尋乎、但當奉孔門之教、自効以贖前罪也、今二

兄乃喻以當速歸、大非所望於知己也、僕雖鴛下（舊不イ）亦人也、使僕無成、則何面目復還鄉國、見故舊也、萬一見迫甚急、則僕有刎首刺心謀自贖

耳、又安有永棄君父以謀利者乎、抑林兄歸國、見僕父兄師友為僕言、二郎亦男兒耳、願勿過慮、觀縷絮談、無益于家國、不多及也、矩方再拜、

十九日、晴、將以明日發、至會澤、豐田、桑原告別、至常照寺後天神社、

拜義公筆塚、寺佐竹支城故址也、夜渡井及菊池鐵五郎、原田誠之進、菊田剛藏、小瀬千藏（初稿本、コノ下ニ渡邊初之進アリ）來話、臨去聞戶則雪積數寸、

廿日、晴、聞在國大夫鈴木石見守、在江戶大夫大田丹波守相尋罷免、二人皆姦黨巨魁、々々已斃、脇從將從而殲、非特為水府賀而已、亦為天下賀

(初稿本)
是日渡久慈川
有橋

也、芳之助書詩三首贈吾三人、宮部、那珂皆有詩、余亦賦與芳之助云、四海皆兄弟、天涯如比隣、吾生山陽阪、來遊東海濱、長刀快馬三千里、迂路水城先訪君、一見指天吐肝膽、交際何論舊與新、分席三句吾去矣、決毗奧羽萬重雲、浩然之氣塞天地、東西何嘗有疆畛、一張一弛有國常、弛之張之在其人、澹菴封事愕金虜、武侯上表泣鬼神、大義至今猶赫赫、大夫敢望車前塵、見君年少尙氣義、白日學劍夜誦文、斗筲小人何足數、勿負堂堂七尺身、吾亦孩提抱斯志、欲將韜略報國恩、聚散離合非所意、誓將功名遙相聞、午時辭永井家、芳之助送到青柳渡、放歌陸魯望離別詩、不顧而去、至菅谷右折、行小路里許、出大道、經石神、大橋宿森山、水戶至此六里、

廿一日、晴、發森山過助川、山邊兵庫邑城也、宿手綱、中山備前守邑城也、行程七里、訪阿久津彦五郎、夜彦五郎來話、往時檢田之事、民間多謗議者、而以彦五郎所說、則曰、手綱歲久原二萬三千石、檢田後僅收一萬七千石、則似非專損下益上者、蓋農民愚魯、不辨利害、且爲富豪、奸民所騙耳、廿二日、晴、訪阿久津、々々々宅看長赤水所著龍子山記、有云、應永廿三

年三月十五日吉野帝末孫常翁、率戶條伊勢守中條播磨守、北條陸奥守至常陸國、永祿二年二月十八日梅翁薨、常翁經大翁覺翁筑翁、至梅翁無子嗣絕、○以上ノ説他證ナシ、辭阿久津宅、阿久津亦相伴出送、謁二御塚、至赤濱過長久保源五兵衛墓、源吾兵衛農家子、好漫遊天下、精研地學、後拔登士籍、即長赤水先生也、及其子復歸于農、至今分爲數家云、至足洗過民篠原貞之助家、乃拉貞之助至磯原、行程二里、過野口源七家、阿久津、篠原由是辭、吾輩留宿焉、赤濱至是皆海濱之地、沙軟松翠、宛如舞子濱也、乃作詩云、濤聲澎湃和松聲、十里白沙撥眼明、憶起舞妓灣上夢、一樽綠酒醉班荆、夜作詩曰、海樓把酒對長風、顏紅耳熱醉眠濃、忽見萬里雲濤外、巨艦蔽海來、艤艫、我提吾軍來陣此、貔貅百萬髮上衝、夢斷酒解燈亦滅、濤聲撼枕夜鑿々、

廿三日、霽、出野口家登臺場、無架砲、過大津人家稠密、二十八年英夷舶來于此、卸隻船二隻、夷人十數人登陸、數日不去、初不知爲何夷、會澤憩齋爲筆談役、按地圖詰之、知其爲英夷、時永井政助在豆萰山、聞變走返、至藤田幽谷所、幽谷命政助斬殺夷人、會夷船颺去、事遂不果、

蓋幽谷意龍錯削七國之策、命諸政助也、而失機不遂、識者惜焉、越勿來故關、故關在山上、而今道則山下海濱也、過關田、荒蜂、大島、渡鮫川、宿上田、行程四里、至平潟常陸盡焉、水戸領則止于大津、大津以東、小國封地參錯、平潟爲棚倉侯松平周防守所、關田、上田爲平侯安藤長門守所、領、荒蜂爲泉侯本多越中守所、領、是日彌八任口唱曰、君不見叱咤生風楚項王、一曲悲歌淚數行、又不見一劍驅敵旭將軍、帳中之淚落紛紛、英雄元是多情緒、不似凡士輕去留、風雨蕭々日將夕、來宿勿來關下驛、與君分手無多日、休言英雄有泣癖、余乃步其韻云、吾無骨相似侯王、且向蝦夷爲啓行、吾無斧鉞統六軍、且向世議破紛々、丈夫功名固多緒、須卜西就與東去、與君追隨幾晨夕、踏盡山亭又水驛、報國策定泣何妨、遠遊豈爲雲煙癖、夜雨、

廿四日、朝晴、既而雪、離海濱、入山間、兩山之間有澗焉、經山田、松川、根岸、齋所諸村、宿高貫、乃澗發源處、昨所渡鮫川卽是也、是日經白川、菊田二郡、行程九里、

廿五日、雪、經鎌田、仙石、石川、赤羽、至白川、行程十里、上田至白川、

山聳道窄、田圃極少、鎌田以北、少有田地、而亦礪确瘠鹵、其山水雖或適吟人墨客之觀、其於農桑之業、困苦亦何如哉、奥棚倉稱天下瘠地、今所過距棚倉不甚遠、則雖不造觀、亦可推而知也、白川、阿部播磨守之都也、封疆十萬石、

廿六日、雪、滯白川、訪劍客箕田○松陰ノ本年閏二月十五日狀ニハ、三田トアリ、蓋シ之ニ從フベシ、大六、其人愚魯、目無一丁字、所語尋常俗談耳、而記一事焉、曰、白川城、織田氏之時始築焉、置丹波長秀、近修城、得石材刻五郎左衛門字者、越後流兵家平井勘五郎、青木造右衛門、山田喜內來訪、亦趙家之奴歟、勘等云、近鑄狻猊砲、彈重三貫、碩長三尺、重十八貫、架以車臺、又云、岩城海濱距白川二十里、有變白川差兵援之、白川雖在亂山中、東山本道而西通肥之長崎、東極松前、蝦夷、奥羽諸侯必由之地、市廛繁盛、

廿七日、晴、尙滯、彌八將有所爲焉、故欲以明日一訣、事甚秘不可紀、作一詩示之云、白水關下風蕭々、與君永訣在明朝、壯士策定休遲疑、勝敗天數非人爲、君不見我有忠光一彼豫荆、素謀不成大節明、興來須盡酒千鍾、人間既是無再逢、○鑄方本後收本日條ノ雜錄ニ「一度はきへゆくものな（傍ニ末乃松ト書ク、山にいつな限りと殘る白雪、緒入道（鼎藏ノ諱名）賦此歌、」トアリ、

廿八日、晴、斷然與彌八一訣、午前發驛、初約與彌八一訣於此已久矣、及期情事難裁、買醉遣悶、所以致延留數日也、出驛越小坂行少許、道左有一路、是爲會津道、余與宮部將抵會津、取道于此、而彌八則直行矣、宮部痛哭、呼五藏五藏數聲、余亦嗚咽不能言、五藏不顧而去、注視久之、及不得見而去、至飯豐而飯、天少雪、至牧內取便道、一里出永沼、從大道則二里、宿勢至堂、行程七里、與彌八一訣之後、終日茫茫如有所失矣、

廿九日、朝雪、已而晴、發勢至堂、登坂少焉至山巔、是爲勢至堂嶺、々與盤梯山對、經三代、福良、赤寸、原、赤井、宿若松、會津侯松平肥州之都也、原、赤井之間有坂爲黑守、過赤井、有二坂、爲沓掛爲瀧澤、々々城外村名、而以名坂者坂上、下瞰城市、一望瞭然、田野又甚濶、土人云、十八萬石許、果然否、是日經郡二、曰安積曰會津、行程九里、

晦日、晴、朝少雪、訪井深藏人、々々既沒、逢其次子某、孫茂松、訪志賀與三兵衛、黑河內傳五郎、共不在、逢傳五郎子百太郎、會津之法、以外套紐色分士人等級、以衣領色分輕卒等級紐色、小納戶爲貴、御敷居內用

之、黑次之、花色又次之、紺又次之、猪苗代舟士用之、猪苗代在城外五里、有城置城代、附士若干、茶又次之、獨禮用之、萌黃又次之、御通用之、淺黃又次之、領色、黑、甲賀格用之、柿足輕用之、萌黃、長柄用之、

二月朔日、晴、志賀、黑河內、井深、來訪、

二日、晴、訪高津平藏、々々老練之人、曾入古賀精里之門、朝鮮使之來對馬、從精里而往焉、魯西亞之寇北邊、藩出兵三千援之、平藏亦在遣中、昔時藩盛講朱學、天明享和之際、聘肥後人古屋十次郎、古學稍行、至近時又復于古、蓋阿部井辨之助、及平藏之力居多、井深及廣川元三郎來、夜與井深訪醫生馬島瑞園、庄田長之助亦會焉、

三日、晴、志賀來、伴至廣川勝助、勝助爲軍事奉行、西鄉十郎右衛門亦會焉、藩今侯四世祖恭定靈神、改革國政、振起學校、用長沼氏兵法、時黑河內十大夫始以兵法用、乃置軍事奉行官、總兵教及軍備、近年奉幕命、置戍于房總、初以會津之地遠于海、無知游泳及操舟之術者、今則有勝于漁父蟹丁者云、近鑄三百幾撒西砲、口徑七寸餘、長七尺餘、又作架砲船、試諸城外

(初稿本) 温泉凡二十家
許、入浴三次、
(前同) 四斗此頃ノ相場
ニテ二分位、
(前同) 米價、此頃黒一
升六七十錢位、
(前同) 氷車、暑中ニ至
レバ氷ヲ賣ルト
黒河内云フ

東湖、

四日、訪井深、抵院內村、藩侯墳墓所在、歷世葬祭用神道云、墓田、土
人云、在此者六百石、而他所又有六百石、至湯本、浴湯場、距城一里、山
洞幽邃、有斗流至城西、是爲湯川、聞近致郡山人喜三郎者掘川、通舟
于津川、果成績歟否、喜三郎嘗掘印幡沼者、
(初、百太郎傳記)
五日、晴、訪原貢及廣川、高津、志賀、黒河内、告別而歸、夜黒河内、井深
來、會津制、飼馬料、每月豆五斗、内四斗以金賜之、率二万金許、穀祿之制、
賜米、以粟之十四、而四之一則賜金、學政、童子十歲以上者、使必學
素讀、十五歲以上使必學弓馬槍刀、十八歲以上、使必學長沼氏兵法、午前
學文、○コノ四字、本書ニ脱カ、姑午後講武、是皆黒河内所語、而若其兵備官制
學文、ラク鑄方本ニ據リテ補フ、
之詳、則有別錄、故略之、又聞、鎗桿、封内無可用者、藝場所用、皆致
諸水戸、岩木、而至於真用者、非鎮西物、則不適於用、雪上所用水車、輕
迅可喜、問之則曰、載重四十貫云、作詩示馬島瑞園云、欲交天下豪
傑士、一劍出家報弧矢、年來非無泉石好、粗才偏厭雕蟲技、逢津城下始
逢君、向吾求詩意懇懇、君家書畫藏充棟、數尺之室生煙雲、相逢勿々又將

(初稿本) 武藝師家居、及
劍槍場、在大門
左右、以圍外、
聖堂後、有印幡
場、

別、囊中詩篇何藏拙、滿腔騷思君勿秘、豪傑相許立談決、示井深茂松云、
書畫真玩具、詩歌亦閑事、立身素有擇、所志在國器、擊劍又讀書、文事
兼武備、案上千卷書、遠求聖賢意、腰間三尺龍、(武)
無復功名地、及時當努力、無空青年志、(平生)
井深茂松兄、將辭會津、抵北越、有以雪深難之者、作詩答之、吾聞山本
道鬼遊四方、地勢人情窮其詳、當時天下亂如麻、屍岸血窟路荒涼、丈夫鍊
膽正在此、隻眼跛足無敢違、二百年來鎖烽燧、士民無復見戎裝、絕海有
關窮山驛、驛有輿馬海有航、紛々遊客居如女、長衣緩帶不裹糧、吾嘗
學兵祖道鬼、乃橫一劍辭家鄉、欲察人情與地勢、又觀千古戰守場、生
今之世應復古、積雪沒脛亦何傷、
○山口市寺内文庫藏ニ「題上總五郎忠光親源右府
圖上」ノ詩トアリ、且ソノ末ニ「右云々」録以示茂松
井深兄、吉田矩方拜草ト見
ニ或ハ同日ノ書示ニ似タリ、
六日、霽、已而雪、朝黒河内使吾二人竊觀日新館、大門扁曰過化存神、中門
曰金聲玉振、門左置大鼓、以報時、正面聖堂曰大成殿、堂左右有四臺、
置生徒、又有習書、神道、和學、禮式及學校、役所諸局、聖堂右側有射場、馬
埒及印刷場、武藝師之家居及劍槍場、以圍其外、東門扁曰日新館、還寓結束、

抵馬島告別、初在白河、聞會津侯疾、世子急至江戶、至是又聞其疾病、藩人之疑懼、日甚一日、發若松經高久、坂下、至塔寺、行程三里廿四丁、皆平坦之地也、塔寺有八幡祠、多藏寶物、訪祠官戶田兵庫、高津平藏姪也、數日間、禱藩侯病于祠、是日事畢、兵庫延吾二人於祠、示所藏寶物、曰八幡公冑鑑、曰橫笛、曰蘆名日記、曰古鼎、曰至德年時弓箭、皆可觀之物也、藩祖中將正之科保、公以還、歷世墨跡詩歌等亦藏焉、

七日、晴、發塔寺、經舟渡、野津、野尻、白坂、寶川、八田、○以下云フ八田、福島、燒山ハ越後

福島之諸地、越東松、車、鳥井之三嶺、宿燒山、行程八里、是間雪甚深、

行步甚難、而牢晴可喜、鳥井嶺上爲奧越界、過奧河沼郡、入越前原郡、

八日、朝霧、已後雪、發驛至津川、是至新潟陸道有二、而其左者山勢峻

峻、積雪間過之、往々致死傷、故從右者、湯川與諸川合、至是稍深大、

舟可以下于新潟、而水勢迅疾、加之兩岸壁立、是以往々有舟觸石角爲

所碎、覆溺者不能登岸而死者、經行地、新谷宿綱木、行程六里、津

川、行地之間有諏訪嶺、雪深路險、行步甚難、八田、福島及此最以深雪稱

云、因作詩、云、吾游北越正雪時、涉艱險阻欲探奇、八田、福島、諏訪

(初稿本)

津川之民二人、
昨同越諏訪嶺、
遂同宿共係露、
紙易魚于新發
田者上

(前同)

行三里、宿木
崎、願望平野漫
白、所越之山甚
遠、乃知行之
動

(前同)
新發田領、米用
六斗苞

嶺、土人稱雪最所推、八田、福島吾不懼、雪也雖深地勢夷、獨難諏訪高

凌雲、峻嶺萬仞攀嶽、僂僂而登腰欲折、胸喘膚汗脚亦疲、有時驚風掠空

起、染鬚搏面冷砭肌、有時日脚射雲擘、返照眩眼光陸離、辛苦乃極最

高處、四顧稱快始解頤、奧野越山連天白、平川一條走青螭、雪深幾丈不可

測、老樹埋沒欲無枝、吾自山陽抵東海、一雨一晴喜又悲、艱阻未有如

是甚、艱阻愈甚奇亦隨、土人漫稱雪中艱、艱中知奇果是誰、夜大雪、

九日、霧、發驛、至赤谷、此間雪深行艱、會津領止于此、有一番所焉、自

是以往、雪漸淺地漸夷、行不甚艱、經山內、米倉、五十公野、出新發田、

是溝口主膳正五萬石之都也、市中頗繁盛、每月以九之日爲市、而今日會當

其日、民庶雜沓、貨物粗備、市廛兩邊、皆并列輕卒宅舍、經生田、御輿、佐

々木、鳥見宿木崎、行程八里半、回顧諏訪嶺、則已渺々于雲間、新發田封

地、東西廿四五里、南北七八里、昔多爲泥澤不毛之地、後開墾、今則實入四

十餘萬石、每苞今價二貫六百文、苞容六斗、越國每歲豐稔、絕無大凶歉、

十日、霧、時々電、舟發木崎、至新潟、水程四里、中間新川堅冰僅碎、昨來

始通舟、々行有鏗々之音、投日野三九郎、々々劍客、好與會津黑河內傳

五郎、江戸齋藤彌九郎交、新潟戸數一萬、元和二年、至三十年前、爲長岡封地、爾後爲公料、今奉行爲河村對馬守、屬官、廣間役六人、組頭二人、定役二十人、並役三十人、足輕二十人、浜信濃川十六里、爲長岡、長岡七萬三千石、實入十八萬石、藩士等級、曰家老、用人、御奉行、番頭、物頭、大組、小組、食祿士五百八十四人、初新潟之屬長岡、市租歲入六千兩耳、若及三七兩、則賞該官、自爲公料、歲率一萬四千兩、其重稅可知矣、北地往々見白兔、因問之、云、平時黃色、冬雪降則白、亦奇矣、夜得一詩、男兒橫劍行天下、時平常恨阻難寡、蹈雪越山與奧野、大雪盈似不通馬、徒跣奔走吾何憚、拊掌稱快自大嘯、寄言城中肉食者、飽暖何情居大廈、云、排雪來窮北陸阪、日暮乃向海樓投、寒風栗烈欲裂膚、枉是向人誇壯遊、悲夫男(阿一)子蓬桑志、家鄉更爲慈親憂、慈親憂子無不至、應算今夜在何州、枕頭眠驚燈欲滅、濤聲如雷夜悠々、

十一日、霧、與日野訪中川立菴、立菴子曰東菴、仙臺藩士氏家晉久寓于此、以講讀授後進、見余作詩見示、余乃步其韻、曰、萍跡相逢忽結親、酒間豪語見情真、男兒交際要唐突、心事何論舊與新、商味形關右衛門等來

(初稿本)
海濱有哨鋪、
日洲崎番所、
所以望海寇、
夜又訪中川、
喫茶、遂宿焉、

會、乃相携士日和山縱步海濱、佐渡雲霧渺茫、峙于正面、海風如剪、不可久留也、夜宿中川、

十二日、霧、午時抵日野、夜宿中川、

十三日、如昨、謀新潟直航松前、新潟里爲栗島、又里爲飛鳥、又里爲止賀、又里爲深浦、又里爲松前、凡里得汛、三日夜可達、陸行則非十數日不可至、且積雪或有梗路者、航松前始于春彼岸、而止于秋彼岸、今待數日、舟當發焉、蓋新潟之船、載五穀菓蔬貨物、至松前者甚多、而其最先至者除今年船稅、故舟人以死爭先、往々有先彼岸而發者、中川、日野爲吾輩周旋船事、因與宮部謀曰、徒待之無益、遂謀佐渡之行、將以明日發、新潟航佐渡之水津二十五里、而舟小、海險、不如自出雲崎之安、是日作詩云、吾骨未可暴砂礫、吾肉未可飽鯨鯨、三分天下歷其二、亂髮蔽裘一劍橫、北塞欲窮張蹇跡、先卜梯攀與航行、氏家見此大韻示余、余又却示、不能文思如懸河、寧得酒量如長鯨、吾儕所期異于此、只要逸氣千秋橫、與君相逢忽相別、贏得浩歌壯遠行、又作詩示氏家、吾於才學無寸長、仗劍杖策行四方、自謂浮華無益國、男子元

是要木強、君是右經左史士、學顏志伊應不忘、書生通病君知否、不磨男子鐵石腸、彫章繪句畢生苦、弄月嘲花終歲忙、與君同是臣子身、寧與此輩相翱翔、學志示君欲相質、百年志業君勿藏、示東菴云、曰才曰氣學爲基、曰博曰精勤爲資、十室之邑必有丘、不學不勤老大悲、才氣或與學相負、飽煖常與怠爲期、奇才之童多易戕、千金之子多易癡、獨君年少乃知學、且學且勤勿失時、

十四日、翳、經內野、赤塚、稻島、宿岩室、行程七里、赤塚立木柱、書云、篠本彦次郎支配所、稻島柱曰、長岡領、岩室則上之高崎零地、高崎之地、在此者二萬二千石、稻島、岩室之間、大山蟠踞曰角田山、々後又有山、曰彌彥山、高峻特起、新潟遠望而發、

十五日、翳、發岩室、過石瀨、出彌彥、拜彌彥大明神、是爲越後一宮、祀天照大神宮曾孫某、有碑文、審記共事、文政年間、菅原爲顯卿所撰也、越後坂、亦彌彥之支山也、下坂、則依海有村爲野積、沿海而行、抵寺泊、有菊屋、相傳、原氏五十嵐、源義經之走奥也、隱此家浴室、浴室已壞、建碑記之、文白河藩臣片山成器所撰也、承久三年、順德天皇之蒙塵於佐渡、

(初稿本)
新潟至是、四望
恢廓、無三崖際、
特有此數峯耳、

(前同)
抵寺泊、午食、
驛中有長門屋、
用一字三星之
章、詰其由、
以主人不在、
不知、

(初稿本)
通觀沿海形勢、
新潟至赤塚、土
地平坦、至彌彥
塚、有角田彌彥
諸峯、蟠踞絕海
中、海岸嶄絕、
不可道焉、因
關道于內地、
下坂、僅可道、
而向之諸峯之技、
尙突起臨海、
無少平地、

(前同)
市店窄而長、然
夫突起臨海、
入內地、蓋頗
有寬曠之區、意
是天成之壘、
歟、以護神州者

也、亦以此爲行在、留蹕三十日矣、時張菊號御幕、遂稱菊屋、々後置小祠、奉祭天皇、行海濱、至出雲崎宿焉、行程八里、米價每苞、不能二方金三百錢、苞容四斗四升、

十六日、將航佐渡、電、舟不可發、午後晴、至暮風起雪降、十七日、翳、十八日、十九日、廿日、雪、廿一日、晴而風逆、廿二日、翳、浪穩風順、已時發舟、離岸僅里許、雨來風轉、乃復歸出雲崎、午後雨益甚、竟夜不止、廿三日、廿四日、或雨、或雪、竟日不霽、廿五日、廿六日、晴而風逆、至廿七日始得發舟、延留十三日矣、僻地無可與語者、一日試叩向昌禪寺、々僧鈍劣愚魯、目無一丁字、匆匆起去、唯日夜擁爐相對耳、且行裝悉委新潟、無文書可看、所持獨有小本古文真寶一冊、因相課、日誦一二篇、以終日、十八日、禪僧大禪者來同宿焉、亦航佐渡者、廿三日、募里中、得北越雪譜、北越奇談、昔語質屋庫、常山紀談、九州軍記、理齋隨筆、教草等數書、於是始得慰閑矣、延留中所聞知、錄于左、此地屬三島郡、曰尼瀨町、戶數倍寺泊、有二千戶許、市中有陣屋、代官常在、江戶、秋熟之時來檢、亦七八日間耳、其他則留手代七人、手付二人、足輕七人、小者若干而守焉、又

有本陣、佐渡奉行之赴任也、寺泊及此隔次而發、有倉址、標曰、非常御備糧倉、弘化二年某月日、蓋欲修造而未果者歟、大禪、本佐渡人、歸思勃々意色特惡、因作詩嘲之云、君家事業總歸空、不問綱常存此躬、知否思親連夜淚、天衷自有萬人同、又有四詩云、豪遊吾欲航佐州、自謂投鞭可絕流、出雲崎頭拍手笑、隔海連山明雙眸、何者海若忽怒號、濁浪排空不可舟、幾日延留尼瀨浦、起臥一樓如俘囚、山川荒絕無勝境、移杖戶外何處遊、夜深索々聽風雪、遠客無端生旅愁、區々旅愁何須說、丈夫當爲天下憂、君不開西虜從來壯船艦、三橋掠遍五大洲、嗚呼備海須要熟航海、求魚切勿緣木求、不然或有事海島、臨海茫洋施何籌、隱憂陷々竟何益、且禱明朝風力柔、云、身本乾坤一眇軀、憂天自咲杞人愚、出師斬檣仰壯烈、策漢過秦思遠圖、落々要存生氣凜、區々何顧學功庸、從來志士空慨慨、且琢小詩捫短髮、云、客恨悠悠無地容、光寒殘燭一星紅、候晴船隻何時發、擊戶雪聲連夜同、身寄山河萬里外、夢迷佐越二州中、中宵歎枕魂頻駭、松響和濤聲勢雄、云、三千里外漂泊身、懷國思家感蓀蓀、繪續纏身辱君恩、定省幾年負慈親、慰閑時取史乘讀、淚落古來忠孝人、何日應竭鴛鴦

(初稿本) 宿此浦、入宿、後、至、辨、天、祠、既、而、亭、主、持、一、封、書、來、曰、相、此、可、以、入、相、川、旅、店、亭、主、皆、著、袴、在、關、門、充、關、吏、使、令、者、

(初稿本) 寺僧不在、唯有一僕、焚、

鈍力、報効得與古人倫、

廿七日、晴、辰時發船、風順帆飽、未後到佐州羽茂郡小木港、港與昨日浦相並、回然有容好馬頭也、可以泊大船、左右斗出、右安辨天祠、左建望遠舖、下舟登陸有開門、吏記鄉貫姓名年齒、然後許入焉、入則戶廳櫛比、土人云、四百戶、宿焉、廿八日、晴、發小木、經小比叡、村山、小泊、高崎、背合、澁手諸村、入難太郡、有小澗、爲眞野川、沿川而上八町許、爲眞野村、即順德天皇山陵所、在、陵舊甚荒涼、延寶七年、奉行曾根五郎兵衛建白、定以地方五十間、爲陵地、疊石爲垣、樹扉爲門、陵上舊有老松、數年前爲大風所吹折、今植釋松代之、陵下有眞輪寺、余乃與宮部迂路登陵、拜哭、曰、以萬乘之尊、幸孤島之中、何者奸賊乃爲此、宮部不覺悲憤、題扉云、陪臣執命奈無羞、天日喪光沈北阪、遺恨千年又何極、一刀不斷賊人頭、某年月日、肥後藩臣宮部增實百拜題之、余亦有詩、云、異端邪說誣斯民、非復洪水猛獸倫、苟非名教維持力、人心將滅義與仁、憶昔姦賊秉國均、至尊蒙塵幸海濱、六十六州悉豺虎、敵愾勤王無一人、六百年後壬子春、古陵來拜遠方臣、

猶喜人心竟不滅、口碑於今傳事新、下陵出新町海濱也、小木至是、越一山脊、路皆崎嶇、過此而往、始得平地、人家頗衆、土人云、二百五十戶、是佐州西海最凹入處、蓋順德御船、亦至于此也、過三四日町、渡國分川橋、經越松原、渡石田川橋、過河原田、五十里、澤根、新町沿海而來、至此右折、而越一坂、出相川、則亦海濱也、行程九里八町、每里五十町、廿九日、晴、訪廣間役藏田太中、佐州官員、廣間役者六人、太中其一也、蓋奉太中所語（傍記）、行屬官最重者中二人、江戶所差、以三十年爲限、奉行二人、每歲以五六月之際、交番、今在江戶者曰中島平四郎、在相川者、曰羽田龍助、々々頗好文事、頃修佐渡志、又好講長沼兵法云、組頭二人、亦江戶所差、以三十年爲限、佐州之士、下至同心、二百六十戶、戶數六七千、本州三郡、二百六十一村、雜太郡百一村、加茂郡百村、羽茂郡六十村、外是小比叡村、御朱印地、不在此數、人口十萬、歲入十三萬石、御城米一萬石、本州之洋有蘆島、海濱間有異樣蘆漂至者、即島所產云、佐渡年代記云、天正十六年、十七年、上杉景勝再遣兵討之、先是地頭二十二人、本間佐州高統居河原田、同攝州永州居澤根、鴻上喜本齋秀高居鴻上、本間左京亮豐季居和泉、土屋下

（初稿本）
釣山、

總守照邦居二方瀉、藍原和州泰理居吉井、本間信州高滋居竹田檀風、本間遠州正方居吉井、本間六郎滿繁居北方、本間十郎高納居谷塚、澁谷十郎左衛門尉直清居加茂、同四郎左衛門尉直正居哥代、同半右衛門尉直茂居梅津、同三郎左衛門尉直住居羽黑、本間泉州居新穗、本間源三郎季本居吉井、本間對州高貞居羽茂、同參州高賴居赤泊、同加州泰亮居城腰、阿部兵庫義任居澁子、石花將監居石花、名古屋源四郎居瓜生屋、金鑛、鶴子山爲始、文祿年時也、今所堀則異于此、其所生則金銀銅耳、舊有鉛鑛、近年以利薄廢、有鍊砂、以不知淘鎔之術未起、下三河有金砂山、四年前亞墨利加舶至本州鷺崎、放脚船二隻進陸、望遠舖誤放銃、由是去、是歲羽州洋飛島、亦有賊船來焉、晦日、寒風栗烈、時々飛雪、金鑛吏松原小藤太、爲吾輩導、觀採鑛製金、先抵勝場、觀粉鑛淘粉、已而登屏風澤、觀撰石、鍛鑿、欲更入坑中、觀穿鑛、小藤太乃發大工二名爲導、各名携油燈一盞、吾輩脫衣、著一短弊衣、以繩爲帶、繫帶短刀、頭蒙天邊、以紙屑爲之、入坑二十間許、坑分爲左右、乃入左坑、坑中或登或下、或橫木爲梯、或刻木爲梯、坑中

(初稿本) 小藤太者、屏風澤番所吏也、入小藤太局、而息、少焉告歸、小藤太則留宿、日暮還宿。

(前同) 坑中穿鑿、仰而向上者、謂之後光、俯而向下者、謂之前、平而向橫者、謂之立、皆坑中之言也。

(前同) 藏田云、佐州御藏田、每歲一萬石、佐州產物、漕松前者云。

(初稿本) 湊、美及水津、皆與越海、相里耳、而吾輩乃欲抵之、而新出雲崎、而新凡四十餘里、然勢有、且利便、在焉、於是知後世兵家徒案地圖、指畫形勢、論古戰得失、成敗、必有、隔靴搔癢者、則不、可、概論也。

四分、或穿而登、或穿而下、或右或左、入十四五町、坑中有光、打聲丁々、歌音琅々、入而視之、則穿鑿者也、觀穿鑿者五六處、轉路至槌場、觀棄水、如浚水狀、坑中甚暖、僂僂曲折而行、滿身生汗、出坑則雪片觸身甚清爽、如下離地獄、出人間界、天工、鑛卒也雖時有多少、大率四十人許晝夜更番、雖強壯有力者至十年、羸弱不適用、氣息奄々、或至于死、誠可憐也、而其自言則曰、此山最不害人、於吾爲多幸、至他山、或三四年、而既至于死、其日直則惟錢四百耳、鑛鑿之治數十人、傷鑿甚多、非勤爲之則不給、採鑛之法、大工先入坑、以鑿穿金理之石、坑中金自有理、非滿地皆有、荷揚數十人、負鑛而出、鑿傷則鑿通續而致之、荷揚鑿通、日直二百、或二百五十耳、聚鑛撰立場、以分其品、輸之勝場、粉之淘之、然後炙之、凝固爲塊、其間經多少困苦、費多少財力、兼傷多少人命、嗚呼語之、亦可下以寒視金、如糞土者之膽、孰又忍棄之夷舶乎、槌場水替夫、多用江戶、大坂、長崎無賴之徒、亦有本土人、鑛坑、幕官所管凡五所、曰青盤、曰鳥越、曰清次、曰中尾、曰屏風、々々即今日所觀、始于慶安五年云、外商賈所管、尙有數所、

閏月朔日、晴、抵春日崎、觀礮臺、訪藏田、佐州產物、漕松前者粗貨耳、草鞋、席、竹器、草器類也、

二日、雨、朝太中子某來、相伴至銅床、觀鎔金及分離金銀銅、還寓結束而發、依來時道而行、至八幡、左折而入、拜順德天皇行在所、老松一樹及廢池在焉、經金丸、目黑、入加茂郡、經新穗、瀉上、原黑諸村、宿湊、此地有湖水、曰越湖、長一里廣十町許、行程七里、湊與夷隔一橋而相連、湊四百五十戶、夷不及四百戶、是日始聞鶯、有詩云、四山殘雪尙皚々、梅藥未看一點開、忽聞鶯語驚尋思、二月已終閏月來、又有詩云、冬寒夏暑不便身、一歲風光無若春、天意似爲游客計、枉於二月加三句、

三日、大風、或霰或雹、道路泥濘、行步頗困、先上湊、夷間之橋、眺望湖海、煙霧濛々、咫尺不可辨、取來時路而行、至目黑、轉路出新町、湊至此四里、宿小木、新町至小木、亦來時所由也、行程共十里、

四日、五日、六日共晴、風烈、舟不可發、

七日、晴、發舟行里許、風逆而還、

八日、雨、九日、翳、風烈、四日至是、情況一如滯出雲崎時、

出雲崎海上、有
盤石而錫齒狀
者、土人號之曰
「舟至」此、苦
甚、一舟子立
於船、號曰、面
取掛、善候、如
始、忍如、驛、而
始、忍如、驛、而
少、忍如、驛、而
路、忍如、驛、而
寺、忍如、驛、而
紀、忍如、驛、而

十四日終日修
紀行

十日、晴、辰時發舟、風順帆飽、午後至出雲崎、復取來時路、宿寺泊、行
程四里、
十一日、晴、發驛至新潟、行程十二里、亦來時所經也、宿日野、
十二日、晴、宿中川、
十三日、晴、午後與晉、東菴、飲後藤宗謙宅、乃相携至海濱、(初、又飲トアリ)天日晴朗、
佐渡及粟島、皆可指而數矣、宿日野、
十四日、十五日、雨、十六日、翳、抵河口、觀形勢、作鄉書、○現存書狀ニテハ十五日、山
縣半藏在江戶邸、作詩贈之、云、少時論志膽如斗、希聖希賢徒任口、
記否村塾學文日、欲排李杜拉韓柳、爾來荏苒忽十年、疇曩心事如等閒、
百年只是如斯過、何以永留天地間、君自津林經史藝、夙以名才取高
第、更聽奮然負笈東、銳志直將誇一世、嗚呼功名素有數、毀譽何關情、所
貴于志士、卓然有自成、今之儒士何爲者、自欺々人了此生、文辭富麗何
足寶、學投時好果何道、致身報國豈因循、誓同狂瀾於既倒、噫吾辜負
國恩深、忸怩無顏見知音、獨有微志磨不盡、(前イ)泣約無失赤子心、又作一
詩、與味形關右衛門云、學之益人其大矣、成德達材總在此、爲子死孝

(前同)
十七日、抵後藤
堤、告別、皆不
讀、故荒孫杖、
(初稿本)
十八日、朝、日
野堤來、

臣死忠、士農工賈事、事已、斯道由來不遠人、誰言無用屠龍技、無奈俗學
弊端多、毫釐每爲千里差、或爲便便經史笥、博聞強志向人誇、或爲風流詩
酒客、風花雪月醉爲家、喜君賈客好文墨、々々亦未廢其職、自古英雄善
治生、請見范蠡計然列貨殖、
十七日、翳、十四日至今日、皆宿中川、
十八日、微雨、近日港口沙淤、不便出舟、且舟人不喜載士人、設辭々
謝、因決意陸行、自來新潟已三十七日、延留實爲舟也、今則陸行矣、策之
最失者、而亦無如之何、已時發新潟、中川父子、日野、氏家、味形、送至
五材橋、引信濃川於新潟市中、通渠數條、橋亦架渠者、乘小舟泛渠、橫
絕信濃川、至松崎、舟行三里、行海濱平沙、經次第濱、宿藤塚、陸行四里八
町、松崎至是、皆係新發田侯所領、
十九日、雹、發藤塚、出海濱、行平沙、出桃崎、是以北係村上侯所領、舟
濟荒川、々迂回、可泊舟、過鹽町、又行平沙、至岩舟、々々驛名、亦爲
郡名、戶數八百許、海灣可泊舟、出驛渡橋、离海右折行一里半、出村
上、是內藤紀州五萬石之都城也、城在山上、過村上渡橋、行少焉有瀨波

川、舟渡之、過猿澤、宿鹽町、瀨波川以北雪猶深矣、愈進愈深、至鹽町、則四尺許、鹽町有米澤侯陣屋、猿坂、鹽町諸地、米澤御預地凡二萬石、是日行程十一里、夜雪、至曉不暫止、積一尺許、

廿日、雪、發驛至大隅、大雪道梗未_レ有_レ行踪、漫不可_レ行、待_レ人行久之、而遂無_レ一人過者、因雇_レ一夫、至葡萄驛、中間初逢五六人、結伴而來者、自_レ是稍々有_レ人行、過驛則山谷險阻、凡三升降至大澤、此間雪最深矣、是爲_レ葡萄山、土人特稱_レ其險、戲作_レ詩云、兩脚踏盡北陸道、連山崎嶇是無_レ道、無_レ道之山非_レ無_レ道、大雪沒_レ道疑_レ無_レ道、去年三月東海道、楊柳掩_レ堤花夾_レ道、晴明降雪果何道、嗒然仰_レ空問_レ天道、經_レ中村、田中出_レ海濱、有_レ一小村、曰_レ碁石、下_レ山愈進則雪愈寡、至此絕無、所_レ降亦雨耳、沿_レ海至_レ大川、而宿焉、此間海上常見_レ粟島、离_レ陸九里許、亦係_レ米澤御預地、是日行程僅七里半耳、而雪深路險、困憊倍_レ常、

廿一日、雨、發驛、又沿海而行、過_レ一小村、則越地盡、猿坂至此、皆係_レ米澤御預地、入_レ羽州田川郡、有_レ關、乃庄內侯所_レ置也、驛名_レ鼠關、過_レ濱熱海、離_レ大道入_レ村里半里許、有_レ溫泉、是謂_レ湯熱海云、熱海亦以爲_レ郡名、至_レ

三瀨、離_レ海濱入_レ田間、碁石至_レ是、海岸皆有_レ山臨_レ海、路繞_レ山腰、崎嶇升降、其間山阿寢平者、有_レ驛市村里及溪澗、形勢比_レ皆同、宿_レ大山、大山戶口繁殷、係_レ庄內侯御預地、地形寬廣、行程十一里、

廿二日、驛、出_レ驛少許、有_レ高隴如_レ城趾者、指而問_レ之、土人云、昔酒井備中守所_レ居也、封地一萬石、行里許出_レ海濱、行_レ平砂中、至_レ最上川、中間有_レ濱中驛、舟濟_レ川、濶六町餘、越_レ川則酒田也、戶數五千、或云、今增至_レ七千、川可_レ泊_レ大船、新潟以北最繁盛之地也、離_レ海而行、峻嶺含_レ雪、卓然當_レ前者爲_レ鳥海山、又濟_レ川二次、皆發_レ源于是山者、宿_レ吹浦、海濱也、行程十二里、此地米價苞_レ二貫八九百錢、苞容_レ五斗、

廿三日、晴、出_レ驛有_レ關、至_レ女鹿、又有_レ關、共庄內侯所_レ置也、過_レ關登山、石路_レ崎嶇、是爲_レ武也武也關、乃鳥海山伸_レ脚于海濱者、關望_レ飛鳥甚近、土人云、離_レ陸五里、島人家二百五十戶、多產_レ魚物、又有_レ好馬頭、係_レ庄內所_レ領、下_レ關經_レ小砂川、行_レ海濱平砂、至_レ鹽越、人家頗多、比屋以_レ小板、扁_レ戶、書曰、百姓某大工某漁師某等、又曰_レ松前出稼某者甚多、出_レ驛有_レ象潟、古有_レ寺、四十九年前地震毀_レ寺、今則平田漫々、經_レ木浦、舟濟_レ一川、此間稍离_レ

海濱至平澤、又出海濱、行平砂宿本庄、是六郷筑前守二萬石之都城也、行程十三里半、

廿四日、晴、發本庄、有川舟濟之、出海濱行平沙、至道川午餐、是龜田侯岩城伊豫守所領也、本庄、道川之間有石脇、松崎二驛、以行海濱不經焉、過道川有長濱、亦不經焉、鹽越至是、本庄、龜田二封地皆以四十町爲里云、至長村、离海入村、自是係秋田所領、經新屋、舟濟御裳川、川雪水方漲、濶可八町、渡處至川口一里、而大船可汭而至此、宿久保田、是佐竹左京大夫二十萬石之都城也、行程十一里、久保田之地、最斗出者爲牡鹿、二峯峙立、爲本山、爲新山、從昨遠望之以爲二島、稍近又出者爲一島、至長村初知其與內地連、土人云、是地五十三村、歲入二萬石、港三、曰止賀、船川、船越、秋田米價以三斗爲苞者、一貫七百錢、數日間見土人往還者、皆裹面冒頭、僅露兩目耳、比々皆然、亦土風之可笑者、新潟至是、大抵海濱平沙、漫々浩々、行步頗困、

廿五日、晴、滯久保田、訪商敦賀屋新六、澁江內膳使家臣熊谷恆次來、因二人言、得粗聞國事、羽州十二郡、內六郡係本藩所領、曰、仙北、秋田、平

鹿、河邊、山本、雄勝、津輕界至新庄界、六十里餘、置大山若狹于院內、祿

千石餘、士七八十名屬焉、佐竹左衛門于湯澤祿五千石、戶村十太夫于橫手

祿六千石、佐竹乙菊子角館祿七千石、共士百名餘、澁江內膳子刈和野、祿三

千石、士三十名、梅津小太郎于角間川祿三千石、士六十名、多賀谷下總于檜

山、祿八千石、士百名、茂手木將監于十二所祿三千石、士五十名、佐竹大炊

子大館祿八千石、士若干、在都下者、大番士十隊、每隊二十名許、藩士三

等、一門家廿四五名、廻座七十名、諸士若干、海濱之地、野代、湊、備砲、

湊有三貫砲一門耳、院內有鍊鑛、森吉、山下、阿仁、有鍊鑛、森吉、山下、

阿仁、有銅鍊鑛、森吉山又出孔雀石、道法以八十間爲町、癸巳、甲午之

飢饉、國用罷弊、以紙鈔續之、然以鈔與金不稱、鈔權漸下、今所行、

以鈔一貫、當銅錢七十孔、

廿六日、晴、發久保田、行里餘、出士崎湊、海濱也、戶口繁盛、有二千

近日將演技、過湊离海而行、道傍起廩五六、樹柵圍之、土人云、癸巳甲

午凶荒後、歲貯粟及糗、今則已充矣、未至大久保一里、賃馬而騎、至大

久保而步、至阿不川又騎、經大川、舟濟川、過一市宿鹿度、騎行七

里、步行四里、

廿七日、晴、騎而發、經三森岡、豐岡、大久保^{ヨリルマデ}至此、道過三八郎瀉之傍、瀉廣四里、袤七里、鯉鮒諸魚多產焉、至三檜山、即多賀谷所居焉、其第宅、地形頗高敞、士百家之外、家臣又有三百許家云、至是造人馬簿、雇馬、凡雇馬用簿、則每里直十五錢^(鑄、五六)、而無簿亦五十錢許耳、經三鶴形有廩、如昨所見、至三飛根、飛根、荷上場之間、舟濟三野代川、而雪水方漲、不通載馬之舟、故驛不發馬、因步而行、荷上場、小綱木之間一里、舟泝三野代川、亦以漲甚不通人、因取三小路、舟濟三小川、越三籠山、山下有製銀銅所、即阿仁坑所出云、披三蒙茸板三荆棘、登山二町許、始至其巔、又下數町得平地、山中殘雪尙多、宿三小綱木、騎行八里、步行三里、是夜與加賀船頭自三青森歸者同宿、云、西洋船過三松前、津輕之間者、今年已三四隻、

廿八日、晴、發驛、經三坊澤、綴子、至三太館、有城、即大炊所居、所屬之士三百余名、而其家臣又有三百許、戶數三千餘、皆極矮陋、經三釋迦內、宿三白澤山內儀兵衛家、文政四年、南部連臣下斗米秀之進欲要津輕侯、即是驛也、行程十一里、儀兵衛爲據人方、職主南部津輕封疆之事、因其所語、頗知村

間之事、本村有肝煎一人、長百姓十二人、肝煎每村一人、而長百姓因村大小多寡不同、代官近改爲御扱役、每郡一名、御扱役巡郡歲四次、春謂馬調、檢馬數也、夏謂人調、檢人口及宗門也、秋謂諍馬、駒馬二歲者定價市之也、往年駒馬至三三歲、附之牝馬、今則至三一歲耳、冬謂暮廻在斂租也、田地方十間、或十五間、因地肥磽^(饒カ)廣狹不同、是謂一人役、大率獲米二石許、斂租二斗五升至三斗、釋迦內有廩、即如向日所見、其法以三十村爲部、村數多寡、各處不同、民一口、歲出五粟升、或米三升藏之、米蒸爲糗、八歲以下七十歲以上者免之、始于天保甲午、而至嘉永己酉而止、每歲秋陽暴之、米價今升四十九錢、而尙爲甚貴、往年十六七錢耳、米價賤而物價不甚廉、是農所以苦也、木綿一反極美者直二貫百錢、炭重十貫直二百八十文、鹽一苞容三斗五升直一貫六百十錢、鹽取之野代、距此十六里、舟泝三野代川而來、

廿九日、晴、出三山內家、至三長波志里^{ナガハシリ}、有闕、過三四十八川、是地兩山迫狹、澗水迂回、如走蛇狀、而無修路之政、過者涉川凡數十次、是所以有四十八川之稱也、雪水奔漲、往々沒膝、冷不可堪、久保田至三綴子、大館、稍有

寬廣之地、漸北漸迫、至四十八川而極、乃有矢立嶺、川流發源于此者、皆注野代川、嶺雪深尙有三尺餘、杉木蒼翳、其巔爲奧羽界、川與嶺天之所疆、奧羽、而佐竹侯不修其路者、亦似非無故、然津輕已不善于南部、則其往來江戶、不得不_{○後ノ相}必由此、而道路荒廢如_{○俟脱カ}此、交隣之道果何如哉、山內云、往年下斗米、蓋欲要津輕於此險也、前事數日其黨數十人、徘徊村里、雖土人爲之疑懼、又使仙臺人某鍛大刀數把、不顧其直、是其所以致敗露也、下斗米之事、余曾聞之山鹿素水、質之安藝五藏、向在水府讀藤田虎之助所著傳、今又聞其土人語、感其志、惜其事不遂、慨然作詩云、兩山屹立如屏風、一溪屈曲流其中、山窮水極欲無路、矢立之嶺當其衝、杉檜掩天晝亦暗、天以絕險疆二邦、聞說文政辛巳歲、津輕就藩過此際、南部通臣米將眞、糾徒欲要遏輿衛、幾日徘徊驚人視、敗露忽空數年計、地利人和兩得之、自謂籌畫萬無遺、休言奇變出意外、一恃每與百禍隨、君不聞韜鈴上乘存一句、初如處女後脫兔、下嶺渡橋、入關、乃津輕所置、驛曰碓關、有溫泉浴焉、經於阿仁亦有溫泉、至石川、直行則可至青森、左折渡橋、雪水方漲、溢于橋傍、石川取便道入弘前、是津輕

越中守十萬石之都也、此間田間小路、雪水洋溢、往々沒脛沒膝、岩城山含雪高聳、三峯巍然、宛如富岳宜矣、俗謂之津輕富士、碓關以北、愈進愈濶、至弘前、四望蒼々漫々、皆肥沃之田也、行程九里、

三月朔日、晴、滯弘前、訪伊東廣之進、伊東之先兵部、居奧之前田澤、或屬伊達政宗、或屬佐竹義明云、伊東云、津輕之海岸五十里、砲臺九所、大間越、金井澤、小泊、龍飛、三馬屋、平館、大濱、青森、野內、三馬屋原成一隊、今稍減僅百人耳、平館近設戍、比三馬屋更少、又有松前非常、海岸非常、各一隊、操練、每歲輪操一隊、非常隊、則輪操之外、更操隔年一次、每隊組頭一人、士三十人、物頭二人、卒各廿五人、長柄二十根、合三隊、家老人總之、學校謂稽古館、古在城外、兼教文武、文化中、國用匱乏、乃徙于城中、狹小其式廓、特置文學、書學、和學、數學諸禮局、文學官、總司一名、小司三名、學士、副學士、會頭補、各四五名、典句十名、句讀師也、授業之法、尤爲有見、素讀卒業、則以次會講小學、史、漢、左氏、詩、書、三禮、易、明律、四書、々學官、學士四名、副學士二人、典筆七人、和數禮、皆學士副學士各二名、和有典句、數有典數、禮有典禮、亦二名、館以二之日

講經、小司至副學士、輪次爲之、以七之日講兵、山鹿流之師三家、輪次爲之、皆一藩子弟悉得聽之、去月廿五日六日、夷船過津輕、松前問、皆一夕繫泊、至晨乃去、意即前夜加人所語、即是也、夜微雨、

二日、醫、至新邸訪荒谷貞次郎、山鹿素水弟也、七年前藩遣定府士十七名、就國、新搆邸于城門前、置之、荒谷亦在遣中、繞城四面而歸、將發、結束訪伊東、伊東賦二絕送吾二人、余次其一詩韻云、男兒欲略北夷陲、難奈吾無百萬師、猶忻半日高堂話、幸爲此行添一奇、鈴木善三郎亦至、談論久之、辭出則日已申、离城市、越一橋、至藤崎、而宿焉、行程僅一里、弘前、杉森有劇場、近日演技云、田地之制、以二百坪稱一人役、然盈縮不一、肥瘠亦殊、其收穀、三苞至四五苞、間有八九苞者、苞容四斗、租三斗至六斗、多寡亦不同、而又有收少而租多、租少而收多者、田法之不均、天下之通弊也、而欲均其不均、則蚩々之民、不知乘除之所在、疑以爲損下益上之政、豪農、富戶從而唱之、遂致謗議洶々、民生不安、水府之政事是已、是治民家所當深察、長思也、

三日、晴、發藤崎、經板柳、鶴田至御所河原、自此經金木至中里、是

爲本道、爲土人所誤、至赤堀、舟濟岩城川、下西岸至蒲原、復濟川、至富野、离川、々發源於矢立嶺、經石川、藤崎、注十三瀉、藤崎至此、路常與川相隨、至是右折、取路田間至中里、行程十一里、以故稍遠、四日、晴、發驛、經今泉、合津、過十三瀉邊、越小山、山臨瀉對岩城山、真好風景也、下山出海濱、經磯町、脇本、々々戶數百三四十、去年夷船之過、去此里許、越山出小泊亦海濱也、戶數三百、行程七里、此與松前、隔海相距七里、

五日、晴、推戶望之、松前連山在咫尺間、出驛沿海而過砲臺下、安砲二坐、以三板屋掩之、不得詳砲長口徑、行二里、离海入山、山有澗沿澗而登、是爲寒澤、藩嚴禁旅人過此路、以故不修道、涉澗數次、深每沒膝、行里許、始至其巔、越巔而下二里許、雪深二三尺、愈下澗流愈大、又涉數次、困苦太甚、作詩云、去年今日發巴城、揚柳風暖馬蹄輕、今年北地更踏雪、寒澤卅里路難行、々盡山河萬夷險、欲臨滄溟叱長鯨、時平男兒空慨慨、誰追飛將青史名、出海濱、是爲三廐、俗傳義經騎渡松前由此、戶數百許、灣港可泊舟、松前侯之朝江戶、乘舟亦到此、經今別戶數灣港、

亦與三廐相類、經大泊、宿上月、戶數僅十七八耳、行程八里、小泊、三廐之間、斗出于海面者爲龍飛崎、與松前白神鼻相距三里耳、而夷舶憧々、往來于其間、比諸榻側容他人酣睡者爲更甚、苟有士氣者誰不爲之切齒哉、獨怪當路者、漠然不省、龍飛崎之近地有五村、曰上宇鐵、本宇鐵、釜澤、六十間、筆島、戶數共六十許、其人物舊係蝦夷人種、今則與平民無異、夫夷亦人耳、教而化之、千島、唐太亦可以爲五村也、而奸商之待夷人、則蓋以人禽之間云、噫可憐哉、

六日、寒風栗烈、飛霞繽紛、至午後乃晴、朝發上月出平館、平館有砲臺、砲門七箇而不常架砲、此與南部九艘泊、隔海相對、間僅三里耳、而內更有大海灣、此尤其要扼之處、臺位已得其所、而臺制亦頗佳、四年前夷舶一隻來于此、距陸里許、下錨日放脚船一隻、乘五六人上陸、夜則還舶、如此者凡三日矣、至二矢村、行程四里半、小泊至此、除寒澤三里外、路皆海濱沙礫、而其山勢突兀臨海、無田地原野、米穀皆仰於青森、弘前、而嚴禁舟運、價苞二方金、村有舟載魚物赴青森者、因欲乘之、休憩舟子家以待其發、舟子云、松前戶數三千、去此十七里、惠佐志千戶、三十五

自評、今而思
之、臺位未爲
得也

里、宮館五百戶、三十三里、奧之北濱入多衣、白布衣、析樹皮以織之、名白割織、尤能堪雨濕、精者一端直一貫三百錢、薄暮發舟、遙望青森神田嶽、右視蟹田、大濱諸浦、曉達青森、舟行八里、以人家未起、舟中又寒烈不可居、入海濱船舖而眠、雪霞繽紛、青森一大灣港、宜備軍艦數十隻、以備非常、

七日、天氣如昨、夜明、入青森市中而食、至野內、有關、經栗坂、麻蒸、土屋、中野、山口、藤澤諸村、出小湊、亦有關、經濱子、清水川、口廣、狩場澤、有關、立柱標界、西北黑石侯津輕本次郎所領、東南盛岡侯南部美濃守所領、津輕之地、率膏腴之地、而此間則多不毛赤地、至馬門、有關、盛岡所置、有砲臺備砲一門、宿野邊地、戶數三百、九艘泊、平館至此二十里許、海灣止于此、與田部釜伏山相對、中間三里許、見泊船二十隻許、行程十里、土屋、小湊之間、路稍离海、殘雪特多、

八日、天氣如昨、發驛、离海行平原荒漠中四里、至七戶、路與獵夫四人伴、二人持槩、二人負銃、皆被獸毛外套、率犬而行、云、將獵熊、始于春彼岸、去年獲五六頭、而今年未獲一、經藤島、傳法寺、宿五戶、行程九

里、藤島前有川謂逢坂川、依村名也、七戶而往、稍有村落田圃、然要之亦皆荒原也、圃中無榮無麥、不見青蒼色、只存粟、蕎麥稈株、蓋收穫之後不復墾也、道傍間有植樹木、非不繁茂、用心于稼穡植、赤地悉可爲良田茂林、惜哉、地曠而人不足、五戶訪藤田武吉、(鑄、夜アリ)々々來話、五戶地著之士六十名許、率稟祿甚微、散在村里、以耕爲生、五戶、三戶、福岡、地著皆可若干名、南部多產大豆、漕于大坂者皆馬載、致之野邊地、牧場數所、產野馬、是日所過荒原、亦連于牧場云、五戶戶數五百、有川注荒川港、去此三里、

九日、晴、風甚烈、未後陰翳、時有過雨、發驛、越淺水坂、出淺水驛、始見麥芽寸許、至古町有岐、可以赴八戶、去此四里半、道東有四方嶽、以界八戶領、野邊地、七戶以來所遠望也、至三戶、戶數比五戶更多、土人云、地著士百名、同心四十名、驛傍有古城址、二百年前盛岡侯都于此云、過義坂、經金田市、福岡、越末松山、宿一戶、行程七里而甚遠、一戶戶數三百、魚鹽仰之八戶、比近諸村皆然、福岡、一戶、米粟稊豆及漆林稱最多、漆稅每株銅錢四孔、諸藩制札、多署侯名、津輕不署、秋田、南部、則連書家

老姓名、

十日、晴、發驛、渡橋、行二里餘、有高原、々以北之水、過一戶、三戶、至八戶、注于東海、以南之水、過盛岡、注石卷港、北上川是也、經沼宮內、戶數三百許、一戶至是五里、有三四村落而無驛市、禿山連繞、荒涼畧如七戶以北、過北上山下、宿川口村、行程六里、甚遠、道右含雪聲、天者爲岩鷲山、南部富士是也、路逢大畑戍兵、大畑南部北外海濱、聞置戍卒五百名、以四月十月交番、南部之地、多產良馬、名於天下、而其利多在官、而不民、民家產牡駒、至二歲、官爲賤定其價、以價之半賜民及鬻之、價遙貴于向所定、而官皆收其利矣、官之所收、歲二萬兩云、田圃間絕無牛馬耕者、問之、云、土質堅牢、非鋤不可墾、果然否、農人常有守古之癖、田畯之誨、或有所未盡歟、

十一日、晴、未後有雨、發村、經(鑄、民)澁谷、至盛岡、渡中津川橋、訪村井京助、至石丁宿焉、行程三里、是南部美濃守二十萬石之都也、南部封地、里法六尺爲間、六十間爲町、六町爲里、是爲小程、七里有楸樹、是爲大程、精米升八十錢、南部壤地雖大、少平坦肥沃之地、米粟不多、然以其僻在極北、穀

價不甚貴、

十二日、微雨、巳時乃止、訪坂本春汀、至山陰村、訪江幡春菴母妻及遺孤文虎、至長町香殿寺、拜春菴假葬所、春菴、忠義之士也、以侍醫從駕于江戸、爲奸臣所陷繫于獄、乃自仰藥而死、拜哭之餘、不堪怆慨、鼎藏題國風二首、○原本既燒失シテ寫本ニ傳ヘリト云フ、コノ和歌次ノ如シ、ナキ人によその缺をしかばりつゝ、涙の雫手向こそすれ、あはれいかに草葉の蔭に思ふらん同じこの葉の行末いと、予亦題數句云、人衆勝天亦何久、請俟他年天定時、云、男兒報國一死足、黃泉之下君瞑目、渡夕貌瀨橋觀厨川城址、阿倍二曾據于此、實八百年前事、而溝塹今尙可認、城據北上川爲險、訪山田齋宮、瀨山命助、二人皆坐春菴事爲所禁錮、竝辭不逢、未後發盛岡、々々南北邊、皆列輕卒宅舍、間有揭板書某組者、尤爲良法、渡北上川舟橋過津志田村、方仆道樹廢良田、新起妓樓數十家、南部國事、實可悼哉、宿郡山、行程五里、盛岡至是、大道如砥、其直如箭、道松鬱蒼、郡山有一小墟、是爲斯波御所城址、驛繞山腰斷爲二部落、戶數頗多、夜雨、南部鈔幣、蓋坂都豪商所出、署商三人名、雖不知其制度何如、安得非國用乏缺、不得已、屈膝於豪富、以彌縫目前者哉、堂々大藩、不能行國鈔而用商鈔、

按、建武二年八月、足利高氏以族家長爲陸奥守、居陸奥斯波地、因稱斯波氏焉、郡山城趾豈是邪、當攷、

其如國體何哉、

十三日、微雨、午時乃止、發驛、經石取至花牧、有城、道傍有輕卒之家四十戶許、過驛渡橋、又有輕卒四十戶許、至黑澤尻、以和川雪水方漲、不可通舟、宿于此、行程九里、是日始見梅花爛漫、黑澤尻戶數三百、而花牧稍多、石取一小驛耳、

十四日、晴、發驛、舟渡和川至鬼柳村、有關、南部封地疆于此、盛岡至鬼柳、左右有山、而山間稍寬廣、蓋南部封內沃地此爲最、至相去有仙臺關、自是以南、地形益寬廣、又舟渡一川至水澤、伊達將監采地也、祿一萬五千石、至前澤、三澤賴母采地也、祿三千石、至中尊寺、離道入山五六町、有十八坊、杉樹蒼翳、頗有幽邃之致、寺藤原氏所創也、曾聞之鎌倉僧、源羽林既滅藤原、見此寺宏麗、謂二衡特跋扈奥州耳、尙且有此大伽藍、況吾爲天下總追捕使、安可無大營造乎、乃營二階堂、經山目渡岩井橋、宿一關、田村右京太夫三萬石之都也、行程十三里、々法與南部同、但以小程六里爲大程、卽三十六町也、

十五日、晴、將迂路觀石卷港形勢、治裝訪佐世岱太郎、發一關、左折入

松島道、經鹿沼、和久津、出石森、笠原內記采地也、祿千二百石、經黑沼、宿登米、伊達式部采地也、祿二萬石、家臣頗多、式部第據高敞地、塹壘環之、隱如一城堡、行程十一里、

十六日、翳、發驛、舟濟北上川、沿川而下、至柳津、布施某采地也、祿千七百石、至飯野川、大立目下野采地也、祿千二百石、北上川至河股、分爲兩岐、西者直注石卷港、而其東者即飯野川、而注氣仙、港曰乙巴、舟濟飯野渡、又濟舟場渡入石卷、行程八里十二町、石卷分管四名主、石卷四百戶、蛇田六十戶、住吉八十戶、門脇百八十戶、東岸爲湊、四百戶、港船數七八十隻、川口沙淤、往々傷舟、本藩出米於海船、或曰、歲七八十萬石、或曰、三四十萬石、果如何否、北上川傍置番所二十餘所、禁關出、然關出者不可勝數云、湊及住吉有米廩、又本藩及南部侯、一關侯、皆置會所、登米大夫亦置之、皆爲海運也、登日和山以縱觀、山係葛西城址、今置鹿島祠、地形高敞、臨川與海、一關至石卷、絕無大坂峻嶺、土地恢廓、田野肥沃、而道路四通八達、旁徑多岐、獨石卷道最大矣、精米升直七十五孔、仙臺所行銅錢甚少、皆銚錢之極弊惡者、鈔幣有一步札、二朱札、原與金相抗、漸失

其權、今則一步札三百七十五錢、若四百錢耳、

十七日、翳、發驛、至矢本、大道平直、砥箭不啻、左右皆平原荒、土質沙土含潤、開墾可爲美田地、意人力未足也、經小野、舟濟成瀬川、川口亦可泊舟云、取便道登富山、山上有寺、望松島、一眸無遺、秋天牢晴、則見富士山于未位、故以名云、山有杉栢良材、下山出高城、海濱有鹽田、又越一小坂至松島、舟至鹽竈二里半、陸行則三里云、是日陸行七里半、夜雨、

十八日、朝微雨、已而晴、訪鹽竈別當鈴木隼人、々々導吾二人、登法蓮寺、々々地高敞、可望松島、寺有藩侯所臨之室、拜鹽竈明神祠、是爲陸奧一宮、有古鐘、按文、明應六年所鑄、有大旦那留守藤原朝臣藤王丸之文、留守氏、登米太夫伊達式部之祖也、祠有神馬、藩侯每世獻一匹、九月十七日祭事、侯在國則來詣、仙臺封地最禁賣色、而以鹽竈、石卷、船舶所輻湊、不禁焉、未後、發鹽竈至市川、觀多賀城碑、有詩云、多賀古址尋古碣、蝦夷、靺鞨字尙新、憶昔朝廷壯遠圖、吞胡氣象懾百蕃、千餘年後問往事、空使男兒淚沾巾、經今町過燕澤、觀弘安五年里末清俊所建碑文、怪奇不可

讀、相傳、鎌倉圓覺寺開山祖元、爲蒙古戰亡者建之、時有忌諱、故省字畫而隱之、過原町、橫出大街芭蕉衢、是卽中山道也、貫街市南北長二里許、行程四里半、訪入江長之進、々々々近任記錄役、出入評定所、々々々置町奉行二名、記錄役六七名、以司刑法、藩制居是官、雖同藩人不許妄接、因不得相見、其弟及其父權大夫出接、歟談移晷、辰時至國分街宿焉、其弟送至寓舍、

十九日、翳、求接養賢堂學頭大槻格次、々々使塾生森本友彌來、友彌羽之上山侯松平中務少輔之臣也、談話數次、相伴至城之前門、廣瀨川繞城、前面架板橋、々内曰川内亦多士、大夫第宅、城背據山、々後峯々相倚、直接羽州、至街市東邊躑躅丘、一名釋迦堂、地稍高敞、臨平田、建天神祠、昔政宗公之撰城地、以此及石卷之日和山、青森三所、請決於幕府、々々乃允青葉、卽仙臺城也、岡今則植櫻樹、爲士庶遊之所、有劇場、三四月之間、每天晴演技、是日陰翳、故不演、假設賣酒茶餅餌店、頗有江戸風、聞劇場不特此、五月之後、更移他處云、午晴還寓、未後至養賢堂、學官二人引吾輩、周旋于堂中、堂文化年間拔大槻民治爲學頭、增廣其規制、

入大門、右爲劍槍場、左爲學頭舍、卽格次所居也、左折而行、渡橋、正面爲堂、堂左有聖廟、門扁中和二學、堂右爲諸生寮、堂方二十四間、有兩階、右爲君侯所臨、左爲諸士出入處、中央及左右前後五區皆方五間、中區爲君侯視學、諸生進講所、後區爲君侯安息所、四隅爲霤亦皆方五間、東南植梧、南西植竹、西北植松、北東植梅、是謂梧庭、竹庭、松庭、梅庭、後區之後、三區平列、謂亥子丑、各廣五間、長三間、左則寅卯辰、前則巳午未、右則申酉戌、廣長共同、四隅之區、皆方三間、四外繞以一間半緣通、區畫井々、尤爲可觀矣、習書、素讀、算法、諸禮皆習之于堂中、學校獨闕弓銃場、馬埒則在學校後、學田一萬三千石、巳午凶荒稍減、爾後開墾、今至一萬石、去年起小學校于川内、云、文學賞格、素讀試、終小學四書、則賞賜小學一部、五經則四書一部、小學四書、皆藩學刊本、講究試、終小學四書、賜左傳一部、五經則史記一部、周禮儀禮、則侯章上下、或朱子語錄一部、養賢堂學頭、以世儒爲之、班爲番頭、管學校附士及足輕以下、凡百四十八人、儒家學業、不稱其職、則減其祿、或至其半、訪格次、小野寺玄廸、國分平三亦來會、供酒食談話、藩臣等級、第一、一門十一人、次一家、準一

家、次一族、次著坐、次大番組、凡十隊、長曰大番頭、祿千石以上者任之、然撰其才能、不甚拘祿高卑、間有五百石以上者任之、副番頭、不拘祿高卑、以隊中士爲之、大番任殿中番衛、爲廣間番、每歲登衛十日、次組士、次旗本組、足輕四十八隊、每隊五十人、弓銃分隊、足輕地著者、不在此數、每歲正月二日、爲追立狩、清晨侯親臨案內村、不拘士庶、捕雉取頭獻于麾下、一番頭、賞銀錢三文、二番三番、遞減一文、一番至三番、侯親臨賜酒、不拘貴賤、是以衆皆爭先、早曉得雉、侯未臨則直趨城門而獻之、是日足輕數隊射弓放銃、以爲操演式、仙臺追立狩、與相馬馬取狩、並稱以爲壯觀矣、

廿日、翳、森本及金子平作來、亦上山藩人也、午後伴森本及藩人三名、詣瑞鳳寺、寺在城背山麓、貞山公政宗、仁公忠宗、義公綱村三廟在焉、登愛宕山、山眺望極濶、近之街市第宅、皆在目中、遠之金華、七森諸峯、渺々可望、廣瀨川過其麓、歸寓、山本文仲來、云、安藝五藏欲見公二人、來自鹽竈、謬聞二人已發也、未時發此、申後同國分、訪吉岡九左衛門、石川才八郎亦會、終宿焉、仙臺侯封地二十四郡、四十年前、檢歲入實數、稟諸幕府、以

一百二萬三千石、見今大小臣祿、共八十萬石、大臣地著于采地者、星羅棋布于二十四郡中、有四十八箇、其他小祿士之地著、無往而不任、入其疆使人悚然、祿制有賜采地者、曰奉公人前、今土地人民爲已有、與祿者稱家中、農稱足輕、皆充諸軍役、有賜地而不賜人者、是謂寄合百姓、租稅之制、共以四公民六率之、有以月賜廩米者、是謂扶持方切米、一人扶持米四苞、苞容四斗五升、有以五月十月賜廩米者、是謂倉米、稱祿以貫、々五斗苞十箇、軍賦百貫三人、郡村管轄每村肝煎一人、間有村大而一村置二人、村小而二村管一人者、肝煎下置組頭三四人、集三十許村、置大肝煎一人、有郡奉行、仙臺六十萬石、分爲奧四十萬石、南二十萬石、奧置三人、南置一人、巡郡歲二次、春視苗、秋視稻、奉行下有代官、々々下有村役人、民一戶、禁田過五貫文、以防兼并之害也、

廿一日、翳、辭吉岡家訪桑原隆朝、至國分、入江訪大槻、田邊、森本于養賢堂、山本于醫學館、皆告別而去、申時發仙臺、行里許、渡廣瀨川橋、爲長町、國分町至此、市廛倚壘、不暫斷、過町則大道平直、左右平田、渡名取川橋、宿中田、行程一里二十町、

廿二日、晴、發驛、經增田、七千石、大内、岩沼、槻木、至舟迫、仙臺以南、沃野漫々、而至舟迫、左右山勢稍迫、阿不熊川流其傍、越小坂二三、而出大川原、地勢稍潤、道左有城址、宮内某所居云、過刈田宮、道逢彌八、々々斬奸之策定、欲必逢吾輩、以廿日朝發鹽竈、至仙臺、倍道兼行、日夜不休、追吾輩至福島、行程三十里、意遂不可追及、將復歸仙臺、至是相逢、無勝拊躍、相伴至白石同宿焉、驛前有川架橋、是日行程十一里、白石、昔上杉臣甘糟備後居焉、後爲伊達所拔、有城、今片倉小十郎居焉、祿三萬石、市廛頗繁盛、城據高陵、家臣宅舍繞之、市廛又因之、川流帶其外、注入阿不熊川、城背有南部山、以本月廿日練兵、四方來觀者以萬數、市上有嚮行軍圖者、開練兵之日、嚮諸操場、蓋江戶風也、彌八白河別後、至湯村、滯數日、至鹽竈、又滯數日、至石卷、寓栗野木工右衛門家、○東征稿、五郎東上日記參照、彌八復姓名曰安藝五藏、又以仙臺自古與藝不善、至今痛拒藝人、不肯入封内、變鄉貫稱備後人、別後有詩云、浮名恐累百年身、棄絕文章已幾春、昨夜松洲誤觀月、又呼筆硯作詩人、有歌云、明日蒔又櫻翳而遊秦武、今年計農春止思波、夜聞五藏定策、又爲語

其家國近狀、酌酒劇談、快愉甚、

廿三日、晴、吾二人將迂路至米澤、過驛右折、取路于亂山中、行二里、道右八丁許、小原村有溫泉、浴者頗多、出戶澤、○今宮城縣磐城國郡田郡小原村ノ大字、行程四里、此至桑折四里、津輕及羽州諸藩、往來江戶者、皆自上山至此、出桑折云、地方多製楮紙、奧羽之地、率不種糧、但名蠶桑、道傍多有桑園、五藏送至戶澤、將以明日永訣、遂同宿、夜招淨瑠璃語、使語忠臣藏十二回、相見恍慨、淚數行下、

廿四日、晴、五藏□□期在近日、是以訣別、殊不勝情、五藏作與森田謙藏、鳥山新三郎、村上寬齋、來原良藏、土屋彌之助、井上壯太郎書、託吾二人、又招淨瑠璃語、使語忠臣庫八回、未後斷然捨五藏而去、經渡瀨、關町宿滑津、行程五里、

廿五日、霧、發驛、經峠田、湯原、有關、過關里許、惡黨合、アクトウシ即奧羽界也、下新宿嶺甚峻絕、嶺盡得平地、是爲新宿、白石至此、皆亂山間、而道不甚艱、此以往漸進、山漸廓、有肥饒地、桑園漆林尤多、嶺以南之水、皆入阿不熊川、以北皆入最上川、即注酒田港者、至高島、戶口頗殷、舊係小田

侯封地、經龜岡至河井、新宿至此四萬石、係米澤御預地、高島有倉、標曰御城米溜倉、其輸于江戸必牛馬載、至阿不熊川而後船載、入浦河港云、過花澤關渡橋入市、即米澤也、上杉彈正大弼十五萬石之都也、宿荒町、

廿六日、晴、訪高橋玄益、求介藩諸學士、會藩侯將以明日發朝江戸、是以諸士繁劇、不得相見、米澤領、羽置賜一郡、東界中山六里、越界玉川十六里、奧界板屋六里、綱木三里半、南界則花澤、不能一里、有二百餘村、每村名主一人或二人、欠代一人、村役五人、皆撰平民中才能者爲之、置郡奉行一人、代官五人、掛役四十人許、代官付足輕七十人許、郡村中不置代官所、代官所在城內三之丸、糠目、中山、荒戶、鮎返、小國、玉庭、六所、置城代、玉庭在城西四里許、又地著足輕、張番警固等多用之、藩臣等級、高家四家、曰武田、島山、三本木、二本松、分領家次之、八十二騎次之、大小姓次之、三手次之、馬廻、五十騎、與板是謂三手、凡八百人許、三扶持方次之、猪苗代、組外、十八組是謂三扶持方、花澤有原八町、城南三里有南原、皆小祿士之地著者、即三扶持方之徒也、藩制雖君侯不蓄妾、除夫人

(譯、號アリ)

在江戸邸外、國更有御部屋樣者、亦率列侯之女也、宮女十人、皆用藩士婦女、國產之最大者爲蠶及漆、蠶置蠶桑方、賤價賣蠶卵以利下民、而未詳其制度、漆則詳之、蓋提封以漆樹二十六萬三千三百三十三株半爲限、每株納粕漆重一錢九分於官爲稅、其稅既輕、而欲更利民、以銅錢八孔代重一錢、以納于官、漆直則實過之、漆實則官買之、米澤、會津諸地、製蠟燭餐附、皆用漆實、米澤多用車運、一人挽之、載米一苞、四斗五升、城外有諸士第宅、繞以溝塹、市廛又圍其外、夜以侯駕將以明日發、巡視市街、警戒非常者、自宵至曉不暫止、

(譯、號アリ)

廿七日、晴、辰時候駕發城、至大町觀儀衛、侯騎而發、家老亦騎、其他騎從者三人、駕過板谷口、出福島云、群臣送者皆著上下、駕已發、而吾輩亦發、行平路二里、越舟坂至關驛、越松坂、奈古坂至綱木、有關、登檜原嶺、嶺上與羽界也、下嶺則檜原驛也、山中多出椀皿材、樹名謂不奈、假填以撫字、造椀器爲生者、山間自爲部落、是謂某小屋、々々々云、嶺上望磐梯山、即向至會津、勢至堂所望也、宿大潮、檜原、大潮之間二里餘、亦皆峻坂、而坂上殘雪尙多、仙臺、白石、桃櫻大半飄零、新綠陰々、而此間櫻

花盛開、而桃未開、樹葉尖新、滑津以往、嫩蘗未生、多用獨活爲羹、大潮有鹽井二、地中湧出、以手試之則溫泉、試之于口則鹹、而其色亦黃、每歲四月至九月煎之、率得六百苞、々容四斗二升、但以費薪多、不能常煎云、是日行程九里、

廿八日、發、發驛、至熊倉、田(轉、中)此始爲平地、至鹽川、有二川、皆架橋、

川發源於猪苗代湖水、流入津川、至若松、行程六里半、訪井深、志賀、黑河內、高津、志賀宅逢一關藩人佐世岱太郎、高津云、飯豐山北麓米澤封內、有一村、相傳平氏一族所遁匿、本帥家佐藤平三郎、中陵漫錄載之、會津封地跨六郡、會津、河沼、安積、大沼、耶麻及越蒲原、南界大內五里、西界勢至堂九里、東界十里、北界十九里、凶荒列國所爲憂、而獨北越之地甚少、仙臺、南部則數々有之、會津介于其間、比越爲數、而比仙臺、南部甚少、又聞會津絕無盜賊之患、北越亦然、

廿九日、微雨、發七日町、抵高津告別、渡湯川橋、湯川古稱黑川、平藏號緇川、原此名也、過飯寺至本鄉村、々造陶器、市上多標御許瀬戸捌問屋者、舟渡會津川、川下流合津川、經關山越火玉嶺、嶺上下二里、

出大內、經倉谷至檜原、々々臨川、乃會津川之上流也、沿川而上、又舟渡之、經長野、道傍有植人者云、三年而堀之、宿田島、戶口頗多、田野少廓、大內至碓、五萬五千石、係會津御預地、置陣屋、總稱此地方曰南山、驛傍有城址、昔長沼盛秀居之、屬蘆名、是日行程十一里、

晦日、晴、發驛、經川島至糸澤、又入亂山間、越三王嶺、是爲奧野界、水脉亦疆于此、嶺以北者入會津川、嶺以南者入下野絹川云、經上三世利、中三世利至碓、澗流稍大、有高原嶺、攀躋二里餘、始得其巔、巔平原也、

是爲此行中第一高嶺、是以南爲宇都宮侯領、有驛曰高原、宿焉、行程十一里、原上荒涼、氣候比平地稍異、此地駄馬、晝間服役、夜則放牧原野、

四月朔日、晴、發高原、下嶺三里、有驛爲藤原、澗流發源于嶺者至此稍大、即絹川也、經大原、高德、亂山始盡、路皆與澗流不甚相遠、過高德舟橫絕之、自此爲二荒社嶺、過大瓜出今市、戶口繁殷、大道坦平、翠杉夾道、即所謂日光街道、而幕府詣二荒、由此道也、至二荒山、僱一夫爲導、社造築宏壯、文采華麗、金章朱楹、銅瓦粉柱、爛々眩目、噫美矣、吾知雖使阿房宮大成、其美則固讓此萬々也、有澗流繞其前、是爲

大谷川、下流亦合三絹川、去此三里、有中禪寺、不詣觀爲憾、社率以三十年修造、費用四十萬金許、社領一萬三千石、土人云、源賴朝之時十萬石、果然否、市廛二所共千戶、夜宿鉢石町、行程十一里、社下法親王殿在焉、有三十六坊、三十六院環之、又有祠官六人、伶人廿四人、地人七十五人、同心七十五人附焉、寬永寺法親王、以歲末歲初及祭時等親臨、法親王臣百名許、亦居于此、○吉田家藏ノ無題詩、年月日闕ケルモノニ「江海浪漫浩浩、遊歷同歲事何了、一百聲鷓、果爲吾輩」ト歸兆、嗚呼人間得失何須問、男子須要立卓立塵俗表」ト見ユ、按フニコノ日ニ係ルベシ、

二日、晴、早發、至今市直行、即幕府所由之道也、二里而有二大澤、社領止于此、右旁有一路、是爲例幣使道、吾輩將抵足利觀學校、因取路于此、經三板橋、路人云、昔板橋將監居焉、至文挾、二荒至此五里、社領止于此、社領之地、道傍列植杉樹、渡滑川橋、經鹿沼、奈良佐原、榆木、金崎、至合戰場、合戰場不詳其所以名、或云、宇都宮彌太郎與壬生忠宗戰所也、距此不遠有壬生村、宿朽木、朽木與嘉右衛門新田市街相連、戶口繁殷、有三旗本土島山民部少輔陣屋、采地三千石、行程十二里、三日、翳、發驛、渡橋、有岐、右折而行、經富田、茂呂、犬伏、天明、又

有岐、左側例幣使道、而吾輩右折至足利宿焉、行程□□、路亘都賀、安蘇、足利三郡、鹿沼而來至是、宇都宮、壬生、佐倉、濱松、關宿、古河封地及旗下士采地、參伍相雜、又有御代官小林勝之助支配所、抵學校、正門扁曰「學校、往昔小野篁所創、舊在去此數町十年寺村、後徙于此」云、慶長年間修造、定以學田百石、拜聖廟、々扁大成殿宇、廟中分爲三區、中安孔子木像、像甚有古色、云、宋代物也、像側列顏、曾、思、孟木主、左置小野篁像、右區楣扁入德二字、正門外、舊有入德門云、廟門與正門相中、扁杏壇二字、觀文庫、經史諸書略備、內有宋版本及上杉憲實手書學校公用等字者、最爲可珍、此地四遠皆見名山、南爲富士、(鑄、山)西爲淺間、東則筑波、而北則日光、南西隅小山曰淺間山、似尼丘山、東北隅有兩甲斐山、足利氏之時、長尾但馬守所城、封地十八萬石云、夜微雨、

四日、晴、朝發足利、過十年寺村、猿田村、舟渡覺川、沿川而下、過梁田驛傍、是即例幣使道、而吾輩不由是、沿川直下、梁田驛名亦以爲郡名、離川至荒荻、有小橋一名落合、二野之界也、越橋則邑樂郡木戸邨、而館林所領也、行一里許、入館林、秋元但州六萬石之都城也、欲訪三科文次郎、抵

大手門、問守門者、々々云、三科宅在城内、法不許入旅客、因至片町、作書遣价、會文次郎不在、索然而去、聞藩近下地于三丸外造操場、土人相聚、身親役作、雖不詳其信否、實爲一佳話矣、行一里餘、羽附、岩田二村之間立木柱、書曰、自是東西南館林領至板倉、右折取便道、舟渡小川、過高島天神社傍、出刀根川堤上、沿川而下、至泉、見一舟載人而下者、呼而乘之、足利至是六里、舟去館林里半、河股所發、每月以四九之日至關宿者、下川少許、又有二川自左方流入焉、卽向所渡覺川及其他諸川相合者、是稱坂東二郎、下川二里許、左岸爲中田、右岸爲栗橋、卽奥州街道也、上陸有關、御代官竹垣三右衛門支配所、反舟又下少許、川分爲岐、左則刀根川、舟由右川下至關宿、上陸而食、時日已暮矣、是日宮部作五七言絕句各一首、乃步其韻、賽歌曰、遊歷幾年渾是客、晚花新葉子將還、檜山白水且休說、不耐憂思塞胸間、曰、積雪又殘花、與君徒然還、獨羨吾廬子、○五郎已在英雄間、又乘一舟、順流而下、直達江戶々々橋下、關宿至此十三里、風力甚勁、且睡且醒、以五日已時達焉、乃抵桶町、(鑄、訪、梁山泊、二作ル)投鳥山家、土屋兄弟及越後三條一向僧北條秀英寓于此、相共劇談、至夜

宮部歸邸、余猶止焉、將有所處、次日藩人來、懇勸歸邸、○山縣、小田村、余各日記以下參照、余以前日之言與前日之志拒之、藩人云、子之亡、官不甚咎、蓋以子初得遊歷之許也、然子之得許、以十月爲限、過限則罪不可測、及限而還、則官或不深罪、今急還邸服其罪、然後再申素願、徐贖其罪、亦未晚也、且子非負國家者、十年之後歸國、則其學雖已成、身已無所容、不如下急還爲容身之地、然後出成其學也、宮部亦以余亡、謂爲已故、欲必還之邸以塞其責、論之甚力、於是歸計決矣、以十日入邸、井上壯太郎以是日發邸歸國、乃走筆作序曰、井上壯太郎會以血氣犯科獲罪、忼慨愧赧、不能自堪、將屠而死、會官裁有望外之恩、於是感憤負笈、東遊江戶、折節讀書、將大有爲焉、今茲四月、有故、學未就而歸、來告吾曰、吾之歸、實無面目以見父兄、雖然事亦不可已、爲之如何、余乃惘然曰、吾子實無面目以見父兄矣、而吾則有更甚焉者、吾向執匹夫之諒、爲唐突之舉、上犯邦典之重、下貽父母之憂、其罪固天地所不容、然自誓以謂、前罪已不可追、但有盡一身之力、繼之以死、勉立後効、以贖之耳、苟能卓然自立、不顧(鑄、流俗)俗流、直以古之大丈夫爲師、毀譽利害、毫不足以動吾心、則可

庶幾也、吾子向已不辭其死、則於吾言固將有所豁然、古曰、同病相憐、吾子之病吾固憐之、而吾之病吾子幸勿契、他日子歸于山陽之阪、時々出此文誦之、其必有憶于東海之濱、居數日、歸國之命下、於是愕然、初覺爲所賣、而今則無可如何、交朋來者皆憮然相弔、或曰、子能途而亡乎、則爲之、謹勿途而屠、余曰、匹夫匹婦尙能引決、大丈夫誠重死矣、知不能知爲人所賣、至所賣、又求苟免、益見其拙、且吾計數蹶、而志則益壯、志壯則安往而不可成學矣、

○日記ノ本文ハ以上ヲ以テ終リ、次文ハソノ詩賦ニアタルベシ、

余以逋亡之罪、壬子十二月八日、削籍奪祿、賦此示諸友、

士窮見節義、世亂識忠臣、二語吾常愛、服膺書諸紳、四海澄鏡二百春、豐祿幾人襲祖勳、時平無復斬將事、政清寧有排闥曳裾人、魚躍龍潛皆自得、恩波浩蕩豈有垠、嗟吾狂頑覆家門、俯仰何面對乾坤、吾罪萬死猶尙輕、放逐況賜自在身、艱難崎嶇非所問、誓蓄節義報國恩、與人傭作有匡衡、弟子都養乃兒寬、孫敬閉戶繩繫頸、仲舒下帷不窺園、青史所記載、一々養吾真、一朝業成臥故山、松陰梅下烏角巾、時向世事迴類

波、且爲古道解糾紛、致君澤民雖已矣、立說濟世尙可言、有是死後可謝祖、有是生前不負君、敢爲窮途不堪窮、屈節失義徒沈淪、有客誠我語諄々、努力可邀恩光新、主人不答愧滿面、此言到吾果何因、寧忍百年報國志、翻陷一身祿利間、

(附) 異本參考記錄

○初稿本表紙ノ雜記次ノ如シ、但シ此書云々ノ二行ハ門人佐世八十郎、ソノ他ハ松陰ノ筆ナリ、

(二月十六日ノ條)

ナガトロ 長津伊勢守

大方は月夜も愛し是そこの
積れば人の老となるもの

古今集

此書先師所賜、

宜以珍藏也、八十

長州

松野他三郎

(折目)

和漢諸藝手引

紙紙

タラノ類
スケタリ

船頭來、蓋營商ニ上蝦夷、北蝦也、東蝦居ニカモヒ
距ニ松前、運上鋪ニ者、因叩以ニ北地之事、其所談
歷々可聽、云、山丹人之來、止ニ唐太、云、蝦
夷產物、ニシン、キンコ、アハビ、アキアジ、
エソ錦等、云、山丹人、語言類ニ蝦夷、故用ニ蝦
夷通詞、云、蝦毒矢附以下用ニブス、鳥頭、製之藥、試
之熊羆、怒甚則毒益漫ニ溢于滿身、獸死體冷則毒
復萃地ニ于創所、云、オクシリ、距ニ城下、三四里、生ニ海
狗、一年所獲、不過一二頭、叩ニ佐渡之事、云、
(出雲崎)崎至ニ小木港、十八里、指ニ戌、而佐之中則戌亥
也、小木至ニ相川、九里八丁、兩津至ニ相川、七里、
佐渡三郡、二百八十餘村、商船六七百石以下者

二十艘許、歲入二十萬石弱、御城米五千石、往ニ來松前ニ之舟、或過ニ佐渡外海八十里許、又
云、出雲崎有ニ篠本陣屋、所轄七萬石餘、崎船隻五百石以下者十八隻、又云、越後海岸九十
里餘、

(二月十七日ノ條)

曇、尙滯ニ出雲崎、午後寂靜難レ慰、散步市中、抵ニ向昌寺禪僧廬、地僻俗俚、固不レ望ニ僧之能解
レ事、然至ニ與レ之接レ言、駭ニ其愚魯、會有ニ一丐僧來乞宿焉、見ニ其痛拒レ之、亦駭ニ其殘忍吝
嗇、恩々辭去、市中有ニ妙福寺、地頗高敞、因登臨、佐渡在ニ目、其峯最高、而雪最白者爲ニ金
北山、近地雪消最遲云、夜大雪、至ニ曉不レ歇、

(二月十八日ノ條)

雪、尙滯ニ出雲崎、崎之近村有ニ小島谷、近時楠見佐渡寺出馬、(守ナラン)○佐渡掘ニ金銀、每歲三千兩耳、
然或有ニ多レ焉之歲、○諸國御代官、皆管ニ御勘定、而楠見則小村之民、而一旦起爲ニ佐渡奉
行、又爲ニ御勘定、士人所レ說也、○市中有ニ實梅漬ニ于曲物ニ者、問レ之則云、賀ニ易松前者、
夜歸ニ佐渡ニ者、禪僧大禪來宿焉、即昨一相ニ見于向昌寺ニ者、

(二月十九日ノ條)

雪、尙滯焉、終日看讀、無ニ奇事可レ紀、讀ニ教草、誦ニ進學解、

(二月廿日ノ條)

朝雪、午後晴、尙滯焉、晚抵三浴鋪、此地鋪凡十五所、一鋪每夜浴者四五百人、誦過秦論、

(二月廿一日ノ條)

晴、尙滯焉、誦三原道、

(二月廿二日ノ條)

曇、浪穩風便、已時發舟、將直航小木、愉快甚矣、舟離岸僅里許、細雨沾衣、既而風亦轉方、舟不可行、乃復歸出雲崎、向之快變爲怪、徒茫然自失耳、午後雨益甚、竟日夜而不止、

(二月廿三日ノ條)

或雨或雪、竟日不霽、午後與三鼎藏及大禪抵貸本鋪岡村氏、借常山奇談、北越雪譜、北越奇談、昔說質屋庫等書而還、亦可少慰閑矣、予先取常山奇談而讀之、讀至吾洞春公討三陶賊一條、夜已二鼓、風雨擊窗、索々有聲、憂佐渡不可航、懷古悵然、

(二月廿四日ノ條)

天氣如昨、卒業常山奇談、取昔語質屋庫讀之、夜大雪、

(二月廿五日ノ條)

牢晴、終日看雜書、貸本鋪來、借九州軍記、理齋隨筆、

(二月廿六日ノ條)

晴、如昨、

(同本ノ雜記)

豐臣秀吉譜

松下加兵衛之綱乃授金五六兩、(間ナラン)○清洲城壁崩可百門、信長命諸士急修補、○永祿六年夏、

信長獵于河邊爲講武也、○信長嘗問炭薪一年之費、監者曰、千石有餘也、○秀吉託美濃

土□、又以偷竊穿窬爲業者千二百餘人、○三木城主別所長治自刎、年二十三、弟友行亦死、

年二十一、○秀吉築姫路城、○秀吉使宮部善靜坊某守城、授食祿五萬石、取鳥○上月、佐用、

三木、鳥取、高松、○秀吉擊瀧川一益、檄于諸士曰、吾將出軍伊勢、卿曹比往近江草津

而待之、○毛受勝助自稱柴田修理亮勝家、力戰而死、○天下之賦稅、三分二者地頭取之、三

分一者耕民可自取之、○浮田秀家重臣白川肥後守出木標六百、分與朝鮮人、

水府

一史官ヲ建テ、人才ヲ教育スル事、

一學術は、各其好ミニ隨而采ニテモ、陸ニテモ、王ニテモ、皆兄弟ノ如シ、何ゾ相闘フニ至ラ

一大船製造ノ議アリテ、材木等モ餘程集リタル處ニ、同祿ニ逢テ燒失ス、相尋テ公○徳川退隱シ玉フ、

一會澤は諸子ヲ讀ム事餘リ不_レ好、殊ニ莊子ナドハ甚キライノ話シ、

一綱目ノ書法發明、此モキライノ話シ、

一宋李綱ノ文集ヲ譽ム、

一天下ノ士ヲ集め事ヲ辨ズル事、

渡邊登、鈴木春山、江川太郎左衛門、齋藤彌九郎、赤井巖三、清水俊藏、安積祐助、村越吉太郎、右永井政助ガ數々語ル處ノ人物、

一農兵臺場掛リノ事、

一土著離_レ行事、

一小船難_レ勝ニ大船ニ事、

以_ニ關西三十八ヶ國_一讓_ニ弟千幡_一、實朝、以_ニ關東二十八ヶ國_一讓_ニ一幡_一、

一二十七八年前、多賀郡大津_ハ英夷來舶之事、

一豊田土著之説、

三上山、倭藤太蝦蟇ノ事、近江國湖水ノ南三里許ニアリ、近江富士ト稱ス、

深見宗方、肥後國相良ノ一族ニシテ、同國水俣ノ城ヲ守リ、拒_レ薩事、

小堀遠江守政一、宗甫、以_ニ茶道_一用_ニ豊公_一、後世稱_ニ遠州流_一、

下總相馬郡、

秋風に水股オツル木葉カナ 薩、ヨセテハ沈ム月ノ浦波 深見宗方參河守、

木山紹宅阿蘇家、飯田山ノ花見ニ罷リテ、

風ヨリモ烈シキ人ノ心ニテ手毎ニ折ン花ノ枝カナ、

○相州北條ノ幕下佐野城主天德寺、○大友ノ旗下佐伯惟常、

細川武藏守高國ノ城荒木安藝守、

陶ノ臣永 丹後守、周防國岩國ノ城ニアリ、

藝佐伯郡、○浮田直家居_ニ備前岡山_一、

新發田因幡守治長、從_ニ謙信_一而至_ニ小田原_一、後貳爲_ニ景勝所_一討、

守_ニ新發田五十野兩城_一、五十野、疑脫_ニ公字_一、

謙信賜_ニ宇佐美駿州威狀_一、河中島合戰ノ事、

上杉舊臣長野信濃守、世在_ニ上野箕輪_一、

朝倉士大將託美越前詩、萬恨千悲有_ニ暮然_一、 誰知今夜入_ニ黃泉_一、故國更勿_レ灑愁淚、屍暴_ニ戰

細川參齋公藏百首、

三齋公十二歳、甲著初ノ時、
有吉頼母、勝テ_ニ甲_一ノ緒ヲシメル、
○松_□實助丹波一國割リ取_レノ話

111111

猪右衛門
トイ、シ

池田家護國公、藤九郎國清公、

仁科五郎信盛守高遠城、織田信忠攻之、城陷、信盛死之、勝頼弟也、

筒井順慶ガ小姓刀ヲ持テ居リシカ、牧野兵太、
池田紀伊守ヨリ丹羽山城等ヲ使トス、

明十七年正月六日、

福岡備前城兵額田十郎右衛門戰死、其將臨陣也、託其子又三郎於岡本筑後守、不與己同軍焉。

府同在三邑夕君一赤松兵部少輔政則ノ守護代浦上喜三郎則國等守焉、備後國山名俊興攻之、

工藤木工
伊藤
伊東
加藤
加賀
苺萱關在二筑前、俵散
シタル、苞、
千束、タ
ネワラ、

千束蘆、タ
パネワラ、

[illegible]

豆駿界有_二千貫樋_一、御代官田中丘隅_{本河崎}、所_{管民}築也、堤上建_二禹廟_一、

本河崎
管民

所築也、堤上建三禹廟、

九州軍記○立花氏、出_二大友氏、大友貞載始築_三筑前糟屋郡立花山_一而居焉。（大友宗麟家録）

豐後府内一 ○戸次丹後守鑑連入道道雪與二大友一同祖、出三左近將監能直子、實賴朝愛妾所生、
立花家一 ○誅二大内輝弘黨一、埋三諸長府松原一、是謂三豐後塚一、

實賴朝愛妾所生

雜
二

○吉弘左近大夫鑑理二男主膳兵衛鎮理繼三高橋家一後改三鎮種一弟三髮號三紇連

○龍造寺氏、秀鄉裔也、文治三年、賴朝賜_二秀家肥佐嘉郡龍造寺邑_一、及_二其他諸家_一。

○島津祖又三郎忠久、賴朝寵_二比岐藤四郎娘_一而所_レ生、託_二高山重忠_一（伊東_{キヨ}乃_ニ聞_ル、命_ス）

テ、○道雪養_ニ高橋紹運嫡男統虎_一爲_レ子、後改_ニ宗房_一、○道雪肩輿

淺猿ヤ思ヘハ日々ノ別レ哉昨日ノ今日ニ又モ逢子バ

右品川東海寺澤菴教_三稻葉濃州_一歌也、雖_二異端徒所_レ言、吾輩何可_レ捨哉、固不_二以_レ人勝言_一也。

明日有ト思フ心ノアダ櫻夜半ハ嵐ノ吹カヌモノカハ 古歌

蜀山人、南畝、寐惚先生、大田覃、字子耕、通稱直次郎、後改七方、舊門、家三百山、又念三、不

園心逸日休居士、○岩屋城紹運守之實滿、紹運二男立花、之

〔鱗方本ノ雜錄〕本書、次ニ宮部ノ歌一首ヲ記ス、既收嘉永五年正月二十七日註參照

五月廿日、衣ニ人衣、食ニ人食、
スレド、姑ラク掲グ、

スレド、姑ラク掲グ

(朱書、但シ本行ノ謄ハ謄ノ誤リナラン、)
謄法、不可有無者也、無則無明以道、謄法、不可有者也、有則無以教忠孝、不可無、

不可有者、吾未知所以捨也、

五月廿五日

防長二國古今事蹟、本藩始祖以來遺事、藩士姓族譜、
邊事、遠征、民政、凶荒、

寅我藩ニ來ル、年二十一、
西(東ノ誤リナラン)北遊二十二、投夷船二十五、建言就死三十一、○上ノ細字二
行ハ熊本藩士佐々淳次郎ノ筆、

元和元年大阪落城、寛永十四年天草蜂起、十五年陷、正保四年南蠻來寇、慶安三年由井賊起、
寛文九年蝦夷亂、寛文十一年初、仙臺公族宗勝、有奪宗之志、至是發覺、伏誅、文化二年
魯西亞來寇、天正中葛西氏國除、

此行尖庵(宮部)年紀、

大空の光りハ日々に清けれど光を下に掩ふ叢雲

(松陰)年紀二十二、(上ノ細字佐々筆、)

吉田大次郎矩方識、(上ノ八字右同人筆)

○本書卷末ニ、他筆ノ漢詩十一首、和歌八首ヲ書添ヘアレド、松陰ノ作ニアラズ、又東北遊歴ニ關係ナケレバ省略ス、但シ
最後ニ左ノ跋アリ、

此雖寥寥舐牘、亦先師所自作自寫、則安忍不愛惜哉、宮部君稱先師爲人、求得其手
澤、乃贈以此紙、亦欲使君分吾愛惜也、

辱交 長門 土屋敬之識

(11) 同く「東征稿」原題東征日記(岡村閑翁手寫本)

東征稿 ○原題ハ東征日記ナルコト、森田節齋ノ書狀及ビソノ本書跋ニテ知ラレタリ、今姑ラク上ノ寫本ニ傳フル書名ニ據
リテ掲グト雖モ、松陰ノ直接關係資料ニ未見、又本書ノ解題の略説トソノ他ハ本論ノ自序及ビ五、六、九章參照、

東征稿叙

庚戌春、五藏聞國内有變、而兄死之、謂余曰、我將東歸爲兄報讎、請與子自別、
爾來四年、不知其所爲如何也、頃者邂逅吉田生、觀其東征稿者、其意武總之間、
奔走奥羽之外、欲報其讎、而未得之狀、歷歷可見也、嗚呼五藏以一書生、欲爲烈士所
爲、難矣、而其志百折不撓、可不謂賢哉、吉田生將東訪五藏、使余叙其東征稿、因
憶五藏之與余別也、先考猶在、先考爲畫計教之、今觀五藏之所爲、率先考之意也、嗚呼先
考往矣、五藏不可見、五藏縱奉先考之意、不得使先考復視焉矣、今生行與五藏相逢、
則先以此言告之、 癸丑秋、安元魯 ○安元杜植三題、
弟魯三郎

東征稿 ○以下東北遊日記ノ關係
條ト對照、必看ヲ要ス、

安藝五藏、南部藩士江稿五郎假稱也、遇國難變姓名、五藏年十八、西師大和人森田節齋、
從學數年、受師命遊藝、入阪井虎山之門、吾藩士土谷彌之助亦後至焉、相得甚喜、一日大
阪人知五藏者、致書報國變、初南部姦臣曰田鎖左膳、寵於老侯、廢先侯立今侯、五藏

兄春庵首沮之、遂下獄死、其徒連坐者十餘人、事在某歲月日、五藏聞變大驚、然不著於辭色、獨語彌之助以實、託事忽去、藝赴大和、與節齋謀決策、東來江戶、時某歲月也、一日遇素所識安房人鳥山新三郎、々々爲僦宅于桶町河岸、共居焉、五藏遇國難後、絕文辭交、獨與出羽人村上寬齋交、會彌之助亦東見五藏、喜出于意外、相共往來、因彌之助知五藏者、爲吾藩士來原良藏、中村百合藏、井上壯太郎、而因我知五藏者、肥後藩士宮部鼎三也、皆一見如舊、每相會輒置酒、々々談及古今忠臣義士姦猾譏佞之事、則五藏先泣、寬齋、鼎藏亦泣、座中皆泣、已而大聲劇談、旁若無人、蓋世有號笑社者、如吾輩謂之泣社亦可也、明年冬、我與鼎藏將游常與、五藏亦有東行之志、謂吾二人曰、十二月十五日赤穂義士遂志之日也、請以此日同發如何、吾二人曰諾、乃約同行、我有故先發至水府、主永井政介家、以待二子、々々以三期日發、先至泉岳寺拜義士墓、社友送者至此而飯、獨新三郎送至下妻、相泣而別、二子以廿四日來政介家、我欣然出迎同宿焉、水府諸才子、聞吾三人在焉、稍々來話、夜々劇談、往々至鷄鳴爲常、是以延留自廿四日、至明年正月廿日、凡二十七日矣、廿日告別政介及芳之助、發水府、芳之助送至青柳渡、五藏賦一詩示之曰、丈夫未殉國、戴頭枉遠游、欲別知心友、河梁哭放聲、相共攬淚而別、廿六日至奧白河、宿逆旅、五藏謂吾二人曰、吾初欲復先侯以成亡兄

之志、時勢不可、獨有要擊之策耳、聞賊以四月飯國、機不可失也、請與二君永訣、吾二人請生死從之、五藏強辭之、遂定策、吾二人將經會津、秋田、津輕、以至盛岡、而五藏則向奧路、策已定、置酒、々々酣、鼎藏探懷、出金十圓、資五藏、々々辭曰、丈夫成事、何以金爲、鼎藏正色曰、非金無以全策、且大行不顧細勤、何區々辭讓之爲、五藏乃受、吾二人入會津路、五藏直行奧路矣、已分手、吾二人痛哭、從後連呼五藏々々數聲、五藏不顧而去、實正月廿八日也、吾二人經奧羽諸地、以三月十一日至盛岡、訪阪本春汀、々々者春庵門人也、初春庵之從先侯西也、以母妻二孤、○松陰東北遊日記ノ別帳ノ雜錄ニ據レバ一人ハ江幡童春カ、又書狀ニテハソノ子ニ文虎アリシコト多見ス、託之、春庵已死、春汀使之居城外山陰村農家、吾二人因春汀往訪之、老母時病眇一目、寡婦扶之而出、吾二人具言五藏無恙狀、老母喜曰、堅彌尙在世乎、吾見君等、猶見堅彌也、因泣數行下、吾二人亦泣、堅彌五藏小字也、初五藏在水府、聞江戶村有其同族齋藤權兵衛者、往訪其家、請寫其系譜、至白河作一書附之、以與姪文虎、且戒之以勿含恨于本藩、是日告別母妻二孤、至香嚴寺問春庵墓、守墓者曰、春庵之死、假埋于此、固無葬祭式、而其夜衆聚供花、々々委積爲丘云、吾二人聞之、浩歎久之、各題一詩而去、五藏之發白河也、至石卷寓某家、爲里人講兵書、時跋涉仙臺、福嶋之間、伺賊消息、確聞賊以某日發江戶、將要擊之、未發也、而吾二人以三

兄春庵首沮之、遂下獄死、其徒連坐者十餘人、事在某歲月日、五藏聞變大驚、然不著於辭色、獨語彌之助以實、託事忽去、藝赴大和、與節齋謀決策、東來江戶、時某歲月也、一日遇素所識安房人鳥山新三郎、々々爲僦宅于桶町河岸共居焉、五藏遇國難後、絕交辭交、獨與出羽人村上寬齋交、會彌之助亦東見五藏、喜出于意外、相共往來、因彌之助知五藏者、爲吾藩士來原良藏、中村百合藏、井上壯太郎、而因我知五藏者、肥後藩士宮部鼎三也、皆一見如舊、每相會輒置酒、々々談及古今忠臣義士姦猾讒佞之事、則五藏先泣、寬齋、鼎藏亦泣、座中皆泣、已而大聲劇談、旁若無人、蓋世有號笑社者、如吾輩謂之泣社亦可也、明年冬、我與鼎藏將游常奧、五藏亦有東行之志、謂吾二人曰、十二月十五日赤穂義士遂志之日也、請以此日同發如何、吾二人曰諾、乃約同行、我有故先發至水府、主永井政介家、以待二子、々々以期日發、先至泉岳寺拜義士墓、社友送者至此而飯、獨新三郎送至下妻、相泣而別、二子以廿四日來政介家、我欣然出迎同宿焉、水府諸才子、聞吾三人在焉、稍々來話、夜々劇談、往々至鷄鳴爲常、是以延留自廿四日、至明年正月廿日、凡二十七日矣、廿日告別政介及芳之助發水府、芳之助送至青柳渡、五藏賦一詩示之曰、丈夫未殉國、戴頭枉遠游、欲別知心友、河梁哭放聲、相共攬淚而別、廿六日至奧白河、宿逆旅、五藏謂吾二人曰、吾初欲復先侯以成亡兄

之志、時勢不可、獨有要擊之策耳、聞賊以四月飯國、機不可失也、請與二君永訣、吾二人請生死從之、五藏強辭之、遂定策、吾二人將經會津、秋田、津輕、以至盛岡、而五藏則向奧路、策已定、置酒、々々酬、鼎藏探懷、出金十圓資五藏、々々辭曰、丈夫成事、何以金爲、鼎藏正色曰、非金無以全策、且大行不顧細勤、何區々辭讓之爲、五藏乃受、吾二人入會津路、五藏直行奧路矣、已分手、吾二人痛哭、從後連呼五藏々々數聲、五藏不顧而去、實正月廿八日也、吾二人經奧羽諸地、以三月十一日至盛岡、訪阪本春汀、々々者春庵門人也、初春庵之從先侯西也、以母妻二孤、○松陰東北遊日記ノ別帳ノ雜錄ニ據レバ一人ハ江幡童春カ、又書狀ニテハソノ子ニ文虎アリシコト多見ス、託之、春庵已死、春汀使之居城外山陰村農家、吾二人因春汀往訪之、老母時病眇一目、寡婦扶之而出、吾二人具言五藏無恙狀、老母喜曰、堅彌尙在世乎、吾見君等、猶見堅彌也、因泣數行下、吾二人亦泣、堅彌五藏小字也、初五藏在永府、聞江戶村有其同族齋藤權兵衛者、往訪其家、請寫其系譜、至白河作一書附之、以與姪文虎、且戒之以勿含恨于本藩、是日告別母妻二孤、至香殿寺問春庵墓、守墓者曰、春庵之死、假埋于此、固無葬祭式、而其夜衆聚供花、々々枝委積爲丘云、吾二人聞之、浩歎久之、各題一詩而去、五藏之發白河也、至石卷寓某家、爲里人講兵書、時跋涉仙臺、福嶋之間、伺賊消息、確聞賊以某日發江戶、將要擊之未發也、而吾二人以三

月十八日至仙臺、欲見五藏達南部狀、不知其所在焉、延留數日探之、而五藏未之知也、以某日至仙臺、謬聞吾二人既發、日夜兼行、追吾二人至福嶋、料其不可及而反、吾二人聞之、亦走追之、遇諸逢隈河上、喜悲交至、爲語其家狀、五藏大喜曰、吾可以死矣、五藏平日每言及其師節齋輒泣、於是作一書寄之曰、回天之力、盡出於荆軻弄政之計、非僕本志也、唯先生亮察焉、又各與於江戶社友、以叙永訣之意、併託吾二人、初白河之別、五藏情緒甚傷、至是毫無憂戚之色、吾二人已與五藏別、以四月五日飯江戶、直至鳥山寓、時百合藏、良藏已飯國、彌之助、寬齋、壯太郎會焉、乃示五藏書、皆一讀泣下、獨寬齋怒曰、五藏何不臨發語我、々將挑臂而從、而今不能實、爲千載之遺憾、因淚數行下、一座爲之聳動、乃相共謀曰、輯遺文、謀不朽、吾輩之任也、而五藏所著未定者多、他人改刪之非其意也、獨節齋翁五藏所心服也、取正于此、吾輩與五藏皆無遺憾矣、皆曰善、於是輯遺文、癸丑二月、我携之赴大和、質於節齋翁、如其傳、將待他日遂志、煩大手筆姑記之以備采擇、

友人 長門 吉田寅二郎矩方記

辛苦經營僅作文、々壇建轍獨張軍、何如炭漆心如鐵、一劍橫衝陸奥雲、
癸丑三月念二日、吉田生似此稿、余不忍多讀、漫題一絕、以換評語、時余爲與拙堂

書、故句中及之、

節齋 森田益

右東征稿一篇、閑翁岡村先生所手寫也、錄以添云、

大正十一年四月十二日 病中執筆

安元 彦識

(三) 宮部鼎藏「東北旅行日記」(自筆本)

(假題)

(宮部鼎藏) 東北旅行日記 ○本書ハ全部塵紙ニ細記セシモノナルガ、題名竝ニ首尾ノ記ナク、且本文中問往々別スル爲メ假リノ書名ニ掲グ、是レヨリ先嘉永四年六月十三日ヨリ二十二日マデ、松陰、藩費ニテ相房海岸ヲ觀察スル際リ、鼎藏モ共ニ同行シテ成リシ各自ノ日記アリ、然ルニ松陰ノハ後チ同藩士長井雅樂ニ貸與以來紛失シ、カ、今ニ知レザルモ、幸ヒニ鼎藏ノヲ傳ヘリ、併シナガラソノ原本亦見當ラズ、但シ二十年ホド前、熊本市吉田益喜ノ手寫セル略ボ全文ノ半ニ近キヲ今同家ニ藏ス、又ソノ年八月鼎藏、曩ニ松陰ト同行、巡見シタル相房沿海ノ要地圖ヲ橫堅約四尺ノ大和紙ニ淨寫シ、且餘白ニ凡例、記事、跋ヲ自書セルモノ、東京市小橋一太ニ藏ス、サレバ本篇ニ後者ノ一書一圖ヲ收メザレド、二人ノ東北遊歷ト前後シテ關係スル資料ナレバ、以上ヲ合看、參考スベシ、
(四年十二月十五日)

嘉永辛亥臘望、晴、味爽治裝、使僕松三負笈發龍口 ○肥後熊 邸、過新三郎 ○鑾治橋ノ冶橋

外居、新三郎題余笈曰、跋涉山川、
○但シ背板ニハ「跋涉山川」將何爲、唯 吾樓亦揮筆

書曰、古錦作詩囊、於國將何何益、不如此白板、乾坤藏無窮、飲酒作氣、伴主人及

吾樓、○五郎 奮然上路、時送者薩人肝付七之丞、後備人濱野章吉、長人土屋彌之介及其弟

強平也、路過永原武邸舍、武濃人也、亦設酒肉、觀壁上挂一畫、々中長劍便裝負笈圖、

即余與大次郎之小照也、醉後題其上曰、□□□□又伴武到高輪泉岳寺、謁于義士墓前、余乃以國風一首奠之曰、□□□□相共慨然彷徨不忍去焉、七之丞慷慨不自禁、拔刀斫地以說驚衆、々皆冷笑告別、獨七之丞送到兩國橋上也、就街店買飯、自本所經左加左井渡、過舟濟之、沿河東北行數里、舟濟之、爲之刀根之分流、以界武藏下總二國也、蓋往昔莫幕府于江戸之後、所改制而非古之國界也、暮時宿行德驛信樂亭、行程六里、此日朗晴如仲春、夜月亦佳、小酌、吾樓有思大次郎詩、曰、相戲相酬有**（元）**好朋、笑傾傾杯酒汚行騰、可憐獨在羈亭裡、影冷寒窗半夜燈、余亦詠國風曰、□□□□更三人竝枕寢、向遣歸松三乎高輪也、松三憂余無僕從、有若生疾必困也、懇託吾樓、々々感其言與金一片、而吾樓意色殊惡、余嘲之、吾樓以國風對曰、□□□□

十六日、侵曉上程、滿地霜白、行數里、顧見富岳、白雪與朝紅旭相映發、一大奇觀也、行至舟橋驛、筑波峯淺綠如畫、亦一觀也、聞昔高橋某據此地以跋扈、古墟猶在焉、驛南有千葉村者、即常胤之所出、而千葉氏不能制御高橋氏、以致衰云、出驛白艸茫、牧馬兩三相戲、是爲黃金原、々廣袤數里、廣在關左第一、而幕府更世之初、必獵講兵於此、至大和田則時已午、買飯、出驛數里、路上見碑、江戸人古張女題誄□□□□歌曰、ハル駒ヤコ、モ黄金ノ原ツ、キ、此句信不欺我也、稍東北坂路崎嶇、或高或下、坂盡見一湖洋茫一色、

潤處過一里、狹處僅數十步、延回而長、曰飲馬湖、開田沼侯爲閣老、曾建決水爲田之策而不成、至水野侯、欲役諸侯大舉而遂之、亦不成也、

自湖右折上坂路、行數十步有關、從是入佐倉郊關地、稍高置輕卒家數十、蓋以其要地也、下而過一小橋、別有一堰水、是爲外塙、繞塙六十弓、初見城門、登坂路亦置士人家、左則至城正門、初昏宿新街、佐倉法有學士武人來過者、則必迎而禮之、因出名刺以與主人、夜乞主人觀過者名簿、自春至冬客八十余名、竊以謂佐倉一小藩、而待士如此、大焉者豈可不恥之乎、歎賞久之、自行德至此、九里而遙、

十七日、晴、日昇一竿初起、盥喫食畢、召侍詔者不來、叩主人以聞藩風、揭其可錄者數條、於此今侯欲有意于勉勵文武、向招桃野庸齊講兵、又招桃井左右八郎令藩士習劍法、其用心于武如此、而於文則曾召藝人久保某者爲客、某死舉其子二人、一以承其後、一以繼儒村上氏、吾妻友田中彌五郎、亦以處士舉焉、其他使某々講射于三十三間堂二回、其所費各五十金、其用心文武概如此、午後去治髻、與新三郎、吾妻出觀城、々以飲馬湖爲西北、而東南接岡野、蓋此城依岡、後池沼以爲險、聞此城太田道灌所肇築也、歷年既久、池乾沼涸、失其形勢、余與三子同沿城正門、稍下坂入沼地、泥深將及膝、因竊從士人屋後、蹇裳就淺處渡之、越柵二重、初出街頭而歸、

晚間藩人荒野武之助來、武之助即今夏與大次郎同遊房相時、同舟渡海人也、夜見招其家小酌、吾妻僞爲藝藩人、其談論無根、而武之助不覺也、亦一笑話、惜不使大次郎聞之、夜至三更而歸、佐倉一藩士人、上自大夫至輕卒凡八百家、其上者爲年寄、次年寄者爲番頭、次番頭者爲物頭、下焉者則給人也、中小姓也、中小姓屬物頭、々々管銃卒二十人凡十六隊、而給人屬番頭亦二十人凡五隊、年寄亦以五人爲限、其他士人盡守所管封內、醉裏抽筆記燈下、時二友鼻聲如雷、

十八日、晴、晏起整裝上程、經酒々井驛至中川、左折行田間數步、右折沿山行、足指稍仰、越一山則宗五宮也、宗五者當堀田攝州侯之時、民苦其苛政、欲託宗吾直訴之幕府、宗吾待大樹親詣東臺、潛於三枚橋下、窺駕過竿上書直訴之、以故族焉、而堀田侯亦遷封、爲今堀田侯所領敵政皆改、民以爲宗吾有力、建宮祭之、奉香花者甚多、吁乎、宗吾誠一匹夫也、而其剛直不撓一意于尊嚴、遂其所志矣、可謂有烈士之風也、其血食于後世則宜哉、自宮左經松林下田間、霜融泥滑、吾妻橫倒、滿身帶泥、相笑去、終沿飲馬湖行堤里餘、至太田喜、又行一里餘、至阿千木、買酒飯去、經二十和田渡從田間行堤上、半里餘、又得一大渡、是爲坂東太郎河即刀根川也、日已暮、路上陰闇甚難步、一農夫爲先導、至龍崎而宿焉、夜已三更、行程八里、

十九日、晴、欲至常陸下妻、風起上程、行田畝村落間七里、未後至水海道、就浪門善六家喫飯、去問下妻里程、路人曰、五里而遙矣、三人相謀曰、日晷路遠、不若宿于此、詰朝兼行走趨、乃歸浪門家、浪門舊角抵家、頗以任俠自負、使之喫酒、善飲、醉後劇談纒々、夜三更而臥、

念日、宿醉未醒、日晷而起、主人供酒饌、亦雄談大酌、踉蹌上程、主人携子送至驛外、晚間風寒雪下醉頓醒、夜至下妻投宿鯨井勇吉家、以主人與吾妻相知也、小酌就寢、此日醉中不記得他奇觀、祇見鬼怒川潺湲流、筑波峰步々相近耳、

念一日、吾妻先起、去訪輕部愛介、後與新三郎同起待吾妻、々々不來、愛介父六兵衛來迎余二人、不果行、午後與吾妻、新三郎以愛介爲先導、去尋多賀谷氏墟、多賀谷氏之先、出自金子十郎家忠仕結城氏、與水野谷氏共爲著世、至慶長六年、重經有罪國除、墟據沼爲險、歷年之久鋤爲田畝、然其墟址猶歷々可指、下墟稍北、賽千勝社、又西北至大寶社、々後有池、長二里許、本有巨跡居焉、天皇使役小角者除之、小角乘船射而斃、焉時祈八幡、故建祠于此、則大寶二年也、後源義家及賴朝東征之時、詣此祈戰、以得勝、後人因以爲百勝之神、多賀谷氏所奉青雲刀及小鳥尙藏社庫、而土人所奉之刀、掛桺楹上不數千、小角所乘之船猶在、刻木爲之者也、出社南

至大口村里正平右家、有稱常陸坊海尊墓者、碑延文二年所建、餘字磨滅難讀、未知其然否也、歸途謁多賀重經墓、夜過愛介家、喫河漏歸臥、夜二更、

念二日、子幹

○鳥山

將自此行下館、余與吾妻亦慮子義

○松陰

有待焉也、崇朝告別、主人懇

留固辭、初聽爲割雞設宴、舉杯大醉、主人出數紙乞書、々而與之、遂上途、々分爲

二、一東一北、於是與子幹決別、蓋吾妻此行也、有大故在焉、再會難復期、而子幹

友宜特篤、寓吾妻于己家二年、衣食飲食、共周旋之也亦至矣、以故吾妻戀々、有不忍

分手之態、余勵聲曰、男兒苟欲殉國家者、果斷勇決之尊也、何爲兒女之態乎、推

子幹北歸、余二人亦向東、吾妻願望子幹、號泣哭失聲、余亦爲之潸然泣下也、

意思不平行步遲重、漸經田町向筑波郡、昏漸至山下、二人相謀曰、方今天下無事、不

求則以得奇險乎、大丈夫常憂無奇難已、遂侵夜上山、峽路確碎一步險於一步、先

欲極男鉢峯、取路于林間、路極狹石極高、樹皆十圍、黯黑如行峒中、至半腹顧是、

野火延數里、謂昨至大寶、觀夜火於筑波山邊、今則却如觀之於平野、其高可知也、至

山巔夜已深矣、晨向山上、謂吾妻曰、樹下一宿、石頭一枕、不亦奇乎、至則得茅屋、

蓋夏秋之間、村民來賣茶處也、相顧一笑、排艸戶入之、爐上掛一釜、爐外置一桶、餘

燼狼藉、遂拾薪移火、燒之取暖、亦笑曰、是我金殿玉妻者耶、惜使子義不與之、而良

藏、壯太亦欲此奇者、今我二人領之、豈不愉快哉、圍爐對坐、且語且笑、遂抽筆記

昨遊及今夜事、時山風吹樹木、澎湃如萬馬齊奔、則枕笈擁爐而睡、火滅則寒氣襲肌、代

起添薪、如此者數次、至曉風益暴寒益烈、亦大平之一奇難事也、

念三日、睡初覺則朝旭既射艸壁間、二人相笑而起曰、今朝欲觀日出於山巔、今已晚矣、何物

睡魔妨我事、縱目也、炙囊中所齎搏飯喫之、留題國風一首曰、燒左思題名殘惜天出

ニシト此屋廬主爾告世埋火、押戶出則二巔、巍然在左右、驚曰、昨夜咫尺黯黑以此地爲

巔、而乃不知二巔之凹處也、審諦之位、北者高而峻、位南者低而易、欲先極其易者、

上數弓有社、扁額曰女鉢山、又下極峻者即男鉢山也、亦有社、蓋祭伊弉諾、伊弉冊

二尊於兩山巔者、即題姓名祠柱曰、嘉永辛亥臘月念一日宿于山上、晨拜謁祠頭、余二人

共三千里外之人、再遊又不可期、慨然題姓名于此、肥後藩臣宮部鼎藏增實、陸奥南部道逃

臣江幡五郎通正、時山風吹雲四顧澗然、遙見白雪嵯峨插于烟霧上、是駿之富士峰、而兩

根、足柄諸山南走連綴焉、自富士峯北白雪指天屹立亂山中者、爲下毛之日光山、其背

後則亂山倚壘、不知越耶羽乎也、東南則海雲連縹渺之中、而其黑難辨者爲江戶、白易

見者爲霞浦、爲飲馬湖、如蛇偃于平野者即刀根川也、刀根發于源上毛深山中、蜿蜒百

許里吞諸川、稍大至關宿分流、一則注常之銚子口、一則注武之口、其如蟻垤培塿者、

三三五

即常及上下總之山也、關左之州皆在我目睫下、所謂沃野千里天府之國者、其在此間哉、昔者平將門登叡山、觀京師壯麗、曰、可被取而代也、遂叛據下總猿島、々々亦在目中、而今則墟矣、其所爲則悖逆、其所志則豈不可憐哉、相共嘆其大志、慨然久之、從男舩祠後、北下二里、是爲權名藥師寺、就寺下、賒飯向眞壁、々々勇吉弟來寓于此、與吾妻過之、去出二山麓、南者爲足尾山、北者爲加波山、皆有山神祠、亦屬山脉筑波者、投宿雨引山下、時日漸過、行程五里而近、

(四ノ誤リ)

廿五日、晴、風發、取路于雨引山、蓋便道也、上下各里許、沿山東行五里許至笠間、即牧野左京大夫藩也、食封八萬石、市井不甚壯、城據山頗得地勢、就市店喫飯、聞城中有藥師堂、在二郭高阜處、余欲觀城形勢、儲導者、々々曰、國有禁、帶刀者不得詣之、則止、去廻城南行溪邊、有一小路、顧可至藥師堂、傾笠披林莽而上、上二町許有本城正門、々々北向、對門峙立者即藥師堂也、一城形勢於是可概見、又不必登堂、東下坂出東門、々々者無誰何者、二人相顧笑其守衛不嚴、經新關、大足、大塚、赤塚、初行隴上五里、薄暮入水戶、即水戶宰相公、食常之三十五萬石、而藩鎮于此也、子義在藩士永井政介家、因先訪之、伴子義宿和泉街伊勢德家、與子義談別後事及三更、

(五)

廿六日、晴、與吾妻、子義訪永井政助、頗有士風、先公景山君時、見拔擢任郡奉行者、

而今則野、會羅國難、幽囚八年、因家至貧、即善遇我輩、笑語曰、錦里先生貧則貧、然園收芋栗、不金貧於食、卿等何有請、以貧勿爲意、以主我家、有子曰芳之助、篤志文武、亦善左右我輩也、午後訪會澤慰齋、醇々老先生也、齡已七十一、然猶耳順以內人也、談話頃刻、過千波湖上、歸政介家、夜餘米及炭于市來、

廿六日、晴、尋豐田彦次郎、有疾不遇觀、過觀好文亭、々々千波湖北高隴上、周圍十町許、西南則岸、々列植梅數百株及款冬、岸下有埴通湖、々上建木牌、文曰、四月至八月三八之日、縱民皆垂釣、蓋此亭也、所景山公之肇造、以使勉強文武者、每月六次賜酒食于此、縱其樂也、公會有國風之什、曰、世ヲステ山ニ入ル人山ニテモ猶ウキトキハコ、ヲ問ヒテヨ、蓋指乎此也、初公欲一振國政、先建學校、使一藩士、大夫夙夜勉勵于其中、又召天下有名于武藝者、以振作士風、一時彬彬相競、其間則游息于此亭、以宜其氣一張一弛、可謂有勸裝之法矣、今則公遜位、學校亦不能如昔日之盛、有志之人皆懷憂、雖有此亭、孰樂之者乎、祇使人扼腕切齒而已、去沿千波湖入林中、有操練場、廣袤三四町許、行數十步路、謁佐竹臣車丹波守首塚、植松標之、有一小龕、以其忠臣、有多人詣之者、吾妻母之家中田氏者、實爲丹波裔、吾妻有詩曰、云々、遂從吉田祠前、過湖東廻北郭、歸于政介家、

廿七日、晴、歲晚、人事^(忽)匆忙、甚憚^(忽)畏煩人、終日不出、

廿八日、晴、如前日、

念九日、晴、早伴^(忽)吾妻、子義濟青柳渡、卽那珂川也、北行二里許、有一寺、過觀之、曰常福寺、所謂水戶侯菩提所者也、當先公時、排佛殊甚、坐僧不如法、廢寺二百八十餘區、而此寺以其菩提所亦獲免云、經額田、太田二驛至瑞龍山、々則侯家世々墳塋之地也、有守冢戶、士錄二□□皆輕卒數家奉之、余輩就輕卒守門者、請一觀域中、門者先導焉、上山先拜公墓、周圍五六間、高六七尺、疊石爲臺、木橋石階有門鑰鎖、中有二碑、右者爲公墓、左者爲君夫人墓卽附葬者、又拜□□墓、々制若一、側有朱舜水之墓、亦可惻也、薄暮歸、宿太田驛、

嘉永壬子正月元旦、晴、味爽觀西山莊、々卽黃義門公所退隱之處也、出宿而北、下岡塾有

一小村、曰根本、就民根本儀兵家一拜義公木像、々高八寸許、豐下隆準、直衣烏帽、拱手

立焉、公昔日公在時、民永山利介者之先某、幼時常遊戲於山莊、公手自刻其像以賜之、

子孫崇奉神事焉、今其裔孫幼、故安木像于義兵家云、去途上列殖桃、頗有雅趣、山間

凹處卽山莊也、門外老杉數十株、蒼鬱矗立泉石幽、渡小板橋入門、亭宇陋小、不似世

所謂侯家之苑裘者、可想見公之恭儉自持也、西山遺事不吾欺也、一山巖然當亭南軒

曰月見山、園中有老梅二株、名好文木、蓋公所手植也、假山有松一株、亦景山公所手植云、出莊西月見山、南行里許有寺、曰佐竹寺、蓋佐竹氏之墟也、墟據高隴頗得地勢、初佐竹氏居于此稍大、遂逐江戶氏於水戶城據焉、後遷封今羽州久保田云、遂至小庭村、投宿于所伊賀右衛門家、

○次ノ日ヨリ翌月
十七日マデ聞ク

(嘉永五年閏二月)

十八日、微雨、近日河口沙淤、不便出船、且舟子不喜載士人、設辭々謝、因決意陸行、自來新潟已三十七日、延留曠日、實爲舟也、今則陸行矣、策之最失者、而亦無如之何也、巳時發新潟、中川東庵父子、日野三左、味形、氏家送至五材橋、新潟市井引信濃川、通渠數條、橋亦架渠者、乘艇泛渠、遂沂信濃川至松崎、行海濱平沙、經次弟濱宿藤塚、松崎至是、皆係新發田侯所領、此日舟行三里、陸行四里八丁、

十九日、雹、發宿出海濱、行平砂出桃崎、自是以北係村上侯所領、舟濟荒川、々迂回可泊舟、過鹽谷町、又行平砂至岩舟、々々驛名亦爲郡名、人戶八百餘、海灣可泊舟、出驛、渡橋萬海右折、行一里半、出村上城、是則內藤紀伊守所居、管五萬石、城在山